

王子原遺跡（第4次調査）

公営住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

"The Ôjibaru Site (4th)"

2012

都城市教育委員会



遺跡遠景(南から)



掘立柱建物跡(SB02)



土坑墓(SC36)

序

本書は都城市が計画した公営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録です。

王子原遺跡は都城市の南部、金御岳のふもとに広がる旧中郷村にあります。

今回の調査では、平安時代の終わりから鎌倉時代の初めにかけての建物跡や墓などを中心に、多くの資料を得ることができました。

この報告書が記録保存の一資料としてだけでなく、様々な場で活用され、地域への関心を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、多大なるご協力を賜りました各関係機関並びに関係された皆様方に対し、深く感謝申し上げます。

平成 24 年 3 月

都城市教育委員会
教育長 酒匂 釀以

例 言

- 1 王子原遺跡は宮崎県都城市安久町に所在する。
- 2 本書は王子原遺跡にて実施された発掘調査の成果報告書である。
- 3 発掘調査の目的は、開発事業により影響を受ける埋蔵文化財の記録保存である。
- 4 開発事業の事業主体は都城市であり、事業目的は公営住宅（王子原団地）建設である。
- 5 発掘調査に係る業務は都城市教育委員会が担当した。
- 6 発掘調査を実施した地番は都城市安久町 6852 番地、調査面積は 2,860㎡である。
- 7 発掘調査の期間は平成 22 年（2010）10 月 1 日～平成 24 年（2012）3 月 30 日である。発掘作業の期間は平成 22 年 10 月 14 日～平成 23 年（2011）3 月 30 日、整理等作業の期間は平成 22 年 11 月 1 日～平成 24 年 3 月 30 日である。
- 8 王子原遺跡では過去 3 地点にて本発掘調査が実施されている。本調査の名称は通し番号を付し第 4 次調査とした。

	調査機関	調査期間	報告書名	報告書刊行年度
1	宮崎県埋蔵文化財センター	1998,5,18～9,29	「王子原遺跡」	2001
2	都城市教育委員会	2003,4,23～8,31	「王子原第 2 遺跡」	2004
3	都城市教育委員会	2007,11,7～2008,3,31	「王子原遺跡 上安久遺跡」	2011

- 9 発掘調査担当者は都城市教育委員会文化財課近沢恒典、下田代清海である。報告書作成担当者は都城市教育委員会文化財課近沢恒典である。
- 10 発掘調査に係る基準点設置測量は株式会社旭総合コンサルタント、空中写真撮影は九州航空株式会社、自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
- 11 本書に記載したレベル表示は標高、方位表示は真北を示し、座標値は平面直角座標系（世界測地系）第 II 系に基づく。
- 12 調査及び報告書に使用した略号は次のとおりである。
O J B 4 = 王子原遺跡（第 4 次調査）
S B = 掘立柱建物 S C = 土坑 S D = 溝状遺構 S F = 硬化面（道路状遺構）
S S = 集石遺構 P = 柱穴
- 13 出土遺物の分類・時期比定については下記文献を参考とした。
南九州縄文研究会編 2002 「下剥峯式土器」『南九州貝殻文系土器』
金丸武司「土器形式の設定」・「南九州縄文後期土器の変遷」『本野原遺跡Ⅲ』2006 宮崎市教育委員会
栗畑光博 2004 「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』19 宮崎考古学会
太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編 -』
上田秀夫 1982 「14～16 世紀の青磁碗の分類」貿易陶磁研究第 2 号
森田稔 1995 「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
森隆 1995 「黒色土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 14 発掘調査及び報告書作製にあたっては、次の諸氏・諸機関の御指導・御協力を得た。記して感謝申し上げます。
柴田博子氏 東和幸氏 山本信夫氏 宮崎縄文研究会
- 15 記録類や出土遺物は都城市教育委員会において保管している。

目次

I 調査の経緯・経過・組織	1
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の記録	6
1. 地形と層序	6
2. 遺構と遺物	10
(1) XI～XIV層の遺構と遺物（縄文時代早期）	10
集石遺構	10
出土遺物	11
(2) IV～IV層の遺構と遺物（縄文時代～古墳時代）	14
(3) IV～V層の遺構と遺物（古代～中世）	16
掘立柱建物跡	16
土坑	22
溝状遺構	28
道路状遺構	28
出土遺物	28
(4) III～IV層の遺構（中世）	33
IV 自然科学分析	40
王子原遺跡（第4次調査）における植物珪酸体分析	40
王子原遺跡（第4次調査）における花粉分析	44
王子原団地建替工事に伴う地質調査（抄）	48
V 調査のまとめ	52
報告書抄録	63

表目次

表1 集石遺構計測表	12
表2 I～VI層出土遺物集計	30
表3 土師器集計	30
表4 掘立柱建物跡	35
表5 土坑	35
表6 溝状遺構	35
表7 柱穴	35
表8 出土遺物：1	36
表9 出土遺物：2	37
表10 出土遺物：3	38
表11 出土遺物：4	39
表12 植物珪酸体分析結果	42
表13 花粉分析結果	46
表14 調査地周辺の地質層序	50
表15 調査地の地質層序	50
表16 地下水位一覧表	50
表17 遺構分類表	55

挿図目次

図 1 遺跡位置図	4	図 22 S B 0 2	19
図 2 地形分類図 (1/100000)	4	図 23 S B 0 2 ~ 0 5 出土遺物	20
図 3 庄内地理志 巻 93 益貫村絵図	4	図 24 S B 0 3 ~ 0 5	21
図 4 1/50000 地形図 (大正 7 年)	4	図 25 S B 0 6 ~ 0 7	22
図 5 米軍撮影航空写真 (昭和 22 年)	4	図 26 S B 0 7 及び P i t 出土遺物	22
図 6 調査区位置図	5	図 27 S C 0 1 ~ 1 6	23
図 7 試掘トレンチ・調査区配置図	5	図 28 S C 1 7 ~ 3 0	24
図 8 王子原団地現況図	5	図 29 土坑出土遺物	24
図 9 土層模式柱状図	6	図 30 S C 3 6	25
図 10 土層：1	7	図 31 S D 0 1 ~ 0 4	26
図 11 土層：2	8	図 32 S D 0 2 ・ 0 4 出土遺物	26
図 12 土層：3	9	図 33 S F 0 1 ~ 1 2	27
図 13 X I ~ X I V 層遺構・遺物出土状況	11	図 34 I V ・ V 層遺物出土状況	29
図 14 S S 0 1 ・ 0 2	12	図 35 I V ・ V 層出土遺物：1	31
図 15 X I ~ X I V 層出土遺物	13	図 36 I V ・ V 層出土遺物：2	32
図 16 X I ~ X I V 層遺物出土状況	13	図 37 中世畠跡検出範囲	34
図 17 VII 層上面遺構出土状況	14	図 38 植物珪酸体分析結果	42
図 18 I V ~ VI 層出土遺物	15	図 39 花粉ダイアグラム	46
図 19 V 層上面遺構出土状況	17	図 40 地質推定断面図	51
図 20 S B 0 1	18	図 41 土師器編年対照模式図	54
図 21 S B 0 1 出土遺物	18		

図版目次

巻頭図版 遺跡遠景／掘立柱建物跡 (S B 0 2) ／土坑墓 (S C 3 6)

図版 1 III ~ IV 層畠跡	34
図版 2 植物珪酸体 (プラント・オパール)	43
図版 3 花粉・孢子	47
図版 4 1 区全景・2 区全景・1 区土層	56
図版 5 掘立柱建物群 (S B 0 1 ~ 0 5) ／土坑群 (S C 0 9 ~ 1 6) ／S C 3 6 遺物出土状況	57
図版 6 S B 0 1 ／S B 0 3 ・ 0 4 ／S B 0 5 ／P 3 9 遺物出土状況／S C 0 5 ／S C 3 6 ・ S D 0 4 ／S D 3 6 土層	58
図版 7 S D 0 2 ／S F 0 8 ・ 0 9 ／S F 1 1 ・ 1 2 ／調査状況／2 区VII ~ XVI 層土層／2 区X I ~ X I V 層遺物出土状況／S S 0 1 ／S S 0 2	59
図版 8 出土遺物 1	60
図版 9 出土遺物 2	61
図版 10 出土遺物 3	62

I 調査の経緯・経過・組織

調査の経緯

平成 20 年 (2008)、都城市建築課 (以下、「市建築課」と略記) より都城市教育委員会文化財課 (以下、「市文化財課」と略記) へ、市営王子原団地建替え事業予定地内における「文化財所在の有無の照会」(6 月 27 日付け・都建 324 号) がなされた。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「王子原遺跡 (おうじばるいせき)」内であったため、市文化財課は 7 月 31 日～8 月 1 日にかけて確認調査⁽¹⁾を実施した。その結果、一部で遺構・遺物が確認されたため、開発に際しては埋蔵文化財保護のための協議が必要である旨の「回答」(8 月 7 日付け・都教文第 387 号) を行った。

その後、市建築課と市文化財課との間で、調査費の積算 (「依頼」平成 21 年 10 月 15 日付け・都建発第 521 号 / 「回答」平成 21 年 10 月 21 日付け・都教文第 475 号) などの協議が行われると共に、市建築課により既存建物の解体作業が進められた。また、都城市より宮崎県教育委員会へ文化財保護法第 94 条第 1 項に基づく「埋蔵文化財発掘通知」(平成 22 年 9 月 16 日付け・都建第 419 号) が提出され、宮崎県教育委員会より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」(平成 22 年 9 月 22 日・0850-9-22 号) にて事前の発掘調査が必要との通知が出された。これにより発掘調査の実施が決定され、平成 22 年 9 月 28 日、市建築課から市文化財課への発掘調査予算の配当替えをもって事業に着手した。

(1) 都城市教育委員会 2009「王子原遺跡」『市内遺跡 2』

調査の経過

○発掘作業

平成 22 年 10 月 1 日～13 日にかけては委託業務・物品賃貸借の入札など、調査開始にあたっての準備作業を実施した。発掘作業は 10 月 14 日の重機による表土掘削より開始し、平成 23 年 3 月 30 日の埋戻しをもって終了とした。

調査の方法 現表土層から近世耕作土層までを重機により除去した後、作業員により遺物包含層掘り下げ、遺構検出、遺構掘り下げを実施し、図面・写真等により状況を記録した。

測量基準としたグリッドは、平面直角座標系Ⅱ系に基づき、10 m 四方を 1 区画として設定し、南北方向を北から A～J、東西方向を西から 2～6 と呼称した。記録図面の作成は近沢恒典・下田代清海・立石和子・馬籠恵子が行った。土層断面図などは手測りで作成し、遺構平面図や地形図などは基準点 (グリッド杭) 及び補助点に設置したトータルステーションを使用し放射法により測定、電子平板 (「SITE XROSS」コンピュータ・システム株式会社) を用いて図化を行った。遺物の出土位置記録にもトータルステーションを用いたが、掘削中に移動した遺物や小さな破片などはグリッド一括として記録した。また、状況に応じて空中写真撮影・自然科学分析を導入し、遺跡の総合的な把握に努めた。

調査の経過 廃土置場の関係より、調査区を南北 2 区画に分割し、1 区 (北側調査区) → 2 区 (南側調査区) の順で、調査区と廃土置場とを転換しながら調査を進行した。また、当初は文化層 1 面 (古代～中世) を調査対象としていたが、包含層掘り下げ時より、それ以前の時期の遺物が観察され、複数期の文化層の存在が予想された。これらの文化層に対しては、グリッド軸に沿ったトレンチを設定し、建物建設部分では沖積層上面、それ以外では霧島御池軽石層上面までの調査を実施することとなった。遺物・遺構の集中が確認された部分については可能な限りトレンチ拡張し、記録を行った。発掘作業の経過は次のとおりである。

10 月 14～19 日：重機による 1 区表土除去

10 月 22～11 月 31 日：1 区中世畠跡調査、古代～中世遺物包含層掘り下げ及び遺構検出

12月1～17日：1区古代～中世遺構調査
 12月10～1月7日：1区古墳～縄文時代トレンチ調査
 1月7日：1区空中写真撮影・自然科学分析試料採取
 1月11～17日：1区埋戻し及び2区表土除去
 1月19～27日：2区古代～中世遺物包含層掘り下げ及び遺構検出
 1月27日～2月16日：2区古代～中世遺構調査（1月26日～：霧島新燃岳噴火）
 1月28日～3月22日：2区古墳～縄文時代トレンチ調査
 3月28～30日：2区埋戻し

調査に係る諸手続は次のとおりに行なった。

調査着手報告（平成22年10月18日付け都教文第427号・文化財保護法第99条第1項）
 埋蔵物発見届（平成23年3月28日付け都教文第711号・文化財保護法第108条）
 調査終了報告（平成23年3月30日付け都教文712号）

啓発普及活動は次のとおりに行った。

平成22年11月20日 都城地域博覧会（キッズボンパク）小中学生対象発掘体験プログラム
 平成23年3月2日～20日 都城市立中郷中学校 遺跡見学・発掘体験

○整理等作業

整理等作業は発掘作業と並行し平成22年8月1日より開始した。平成22年度は遺物の洗浄・注記・一覧表作成、遺構実測図・写真の整理を中心に実施した。

平成23年4月～7月までは遺物接合を行い、8月～12月にかけて遺物実測図作成・トレース・レイアウトを実施した。遺物実測は水光弘子・槇尾恵美子・近沢恒典が行った。トレース・レイアウトには「トレースくん ver2010」（株式会社キュービック）及び「Adobe Illustrator CS3」（アドビシステムズ株式会社）を使用している。11月～平成24年1月にかけて遺物写真撮影・本文作成・編集などを行い、平成24年3月の本書刊行をもって全ての業務を終了した。

調査の組織

王子原遺跡（第4次）発掘調査の調査組織は以下のとおりである。

平成22年度（発掘作業・整理等作業）

調査主体 都城市教育委員会
 教育長 酒匂醸以
 教育部長 石川清
 文化財課長 坂元昭夫
 同副課長 山下進一郎
 同主幹 松下述之
 同副主幹 栞畑光博
 同主査 近沢恒典（調査担当）
 同囑託 下田代清海（調査担当）
 同囑託 平川美奈子（庶務担当）
 調査作業員
 内山次男 千田けい子 曾原主吉
 立石カズ子 鶴松雄 抜迫清美 東春雄
 広畑雄二 福岡咲子 福重光男 前畑篤子
 馬籠恵子 渡司裕美子
 整理作業員
 大久保まゆみ 奥登根子 槇尾恵美子
 吉留優子

平成23年度（整理等作業）

調査主体 都城市教育委員会
 教育長 酒匂醸以
 教育部長 日高裕文
 文化財課長 坂元昭夫
 同副課長 山下進一郎
 同主幹 松下述之
 同主幹 栞畑光博
 同主査 近沢恒典（調査担当）
 同囑託 平川美奈子（庶務担当）：10月まで
 松村美穂（庶務担当）：11月から
 整理作業員 水光弘子 槇尾恵美子

Ⅱ 遺跡の立地と環境

地理的環境

都城盆地は九州南部内陸にあって、霧島火山群の東南のふもと、宮崎県南西部から鹿児島県にかけて広がる。その起源は列島形成時の陥没帯とされる。基盤層は四万十累層群であり、近隣火山群の強い影響の下、シラス台地など火山噴出物起源の地形形成が発達している。周縁には標高 400 m 程度の山地が連なり、南は大隅半島に向けて開口する。四方より流入する河川群は、盆地を南北に貫流する大淀川へと収束された後、北縁山地を抜け宮崎平野へと至る。内部地形は周辺部のシラス台地、中央部を広く占める低位段丘、河川沿いの氾濫原に大別される。

都城市は東西 25km、南北 35km、面積約 650 平方km、周縁山地を含む盆地の大半を占め、人口規模は約 16 万人。中心的な市街地は盆地底南部に形成されている。

王子原遺跡は盆地の南縁山地のふもと、萩原川、安久川、梅北川に囲まれた開析扇状地面（標高 160～180 m）に立地している。この扇状地面はシラス台地面などと複合しながら、全体的には南の山裾から、北の萩原川、西の梅北川へと向けて下っているが、開析谷が深くまで入り組んでおり、緩やかな起伏が連続する地形となっている。

歴史的環境

本調査にて確認された遺跡の時期は縄文時代早期、古代末～中世初頭、中世に大別される。

縄文時代早期の遺跡は盆地全域にて確認され、本遺跡周辺では梅北佐土原遺跡、梅北北原遺跡、天ヶ淵遺跡、王子原第 2 遺跡などが上げられる。本調査区から北西へ約 300m、中郷中学校の校舎建設に伴い調査が実施された梅北北原遺跡では小牧 B 式土器、下剥峰式土器、押型文土器、集石遺構 10 基が出土している。

古代末～中世初頭にかけての都城盆地は、11 世紀初頭の島津荘成立後にあたり、遺跡数が増加する傾向にあるとされる。特に盆地南部域での調査例が多く、本遺跡周辺でも、青白磁の水滴など特徴的な遺物と共に多量の土師器が出土した永田・藤束遺跡、溝状遺構に囲まれた掘立柱建物跡と周溝墓、豊富な舶載陶磁器などが出土した筆無遺跡、上安久遺跡、王子原第 2 遺跡などが上げられる。また、これらの調査では、鍛冶関連遺物が多く出土している点も特徴的である。

中世では桜島文明軽石（1471 年）を検出指標とする畠跡が確認された。畠跡としては中尾遺跡や蓑原遺跡など、水田跡としては鶴喰遺跡や嫁坂遺跡など多くの遺跡が上げられる。

また、調査区北を東西に走る県道は、安久・梅北の両集落を繋ぐ道であり、調査区のやや東側より別れ、金御岳のふもとを抜け南へ続く道と共に、近世絵図（図 3）にても確認される。

王子原団地

中郷村は、明治 22 年（1889）に梅北村・安久村・豊満村が合併し成立、昭和 42 年（1971）、都城市に編入合併された。王子原団地は中郷村により昭和 38 年（1963）に建設された。1 棟 4 戸の長屋形式で、補強コンクリートブロック造。基礎構造はコンクリート布基礎である。

参考文献

栗畑光博 2009 「島津荘は無主の荒野に成立したのか」『南九州文化』109 号
宮崎県農政水産部農業振興課 1981 「都城・北諸県地域土地分類基本調査 都城」
都城市 1997 「都城市史 通史編 自然・原始・古代」
都城市 2003 「都城市史 資料編 近世 4」

都城市 2006 「都城市史 通史編 近現代」
都城市 2006 「都城市史 資料編 考古」
都城市教育委員会 2007 「梅北北原遺跡」
都城市教育委員会 2011 「永田・藤束遺跡」
宮崎県教育委員会 2008 「筆無遺跡」



1王子原遺跡(第4次調査) 2成山遺跡 3池平城跡 4正応寺跡 5六ヶ村城跡 6野添遺跡 7天ヶ淵遺跡 8王子原遺跡・上安久遺跡 9王子原遺跡 10王子原第2遺跡 11梅北北原遺跡 12永田・藤束遺跡 13城ヶ尾遺跡 14大岩田村ノ前遺跡 15黒土遺跡 16横尾原遺跡 17梅北城跡 18尾崎第1遺跡 19尾崎第2遺跡 20笹ヶ崎遺跡 21大岩田上村遺跡 22筆無遺跡

図1 遺跡位置図



図2 地形分類図(1/100000)

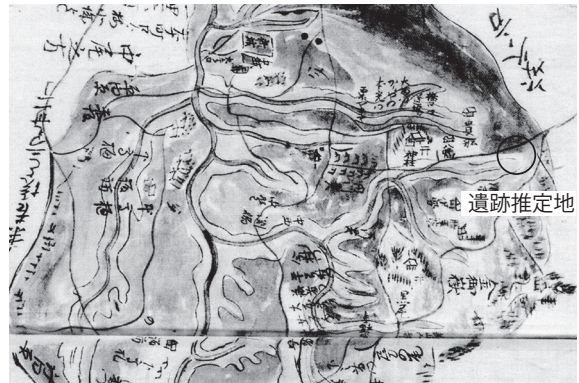


図3 庄内地理志 卷93 益貫村絵図

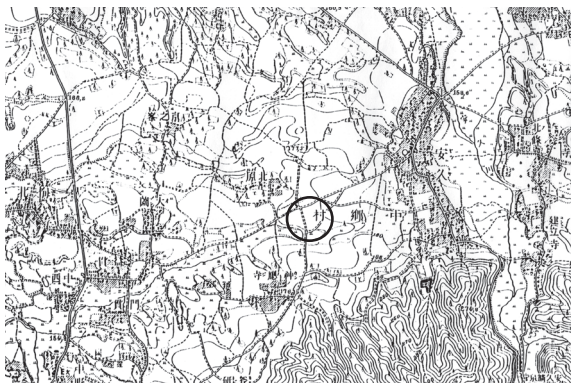


図4 1/50000 地形図(大正7年)



図5 米軍撮影航空写真(昭和22年)

図2・4・5は国土地理院発行・所管の地図・写真を使用している。



図6 調査区位置図

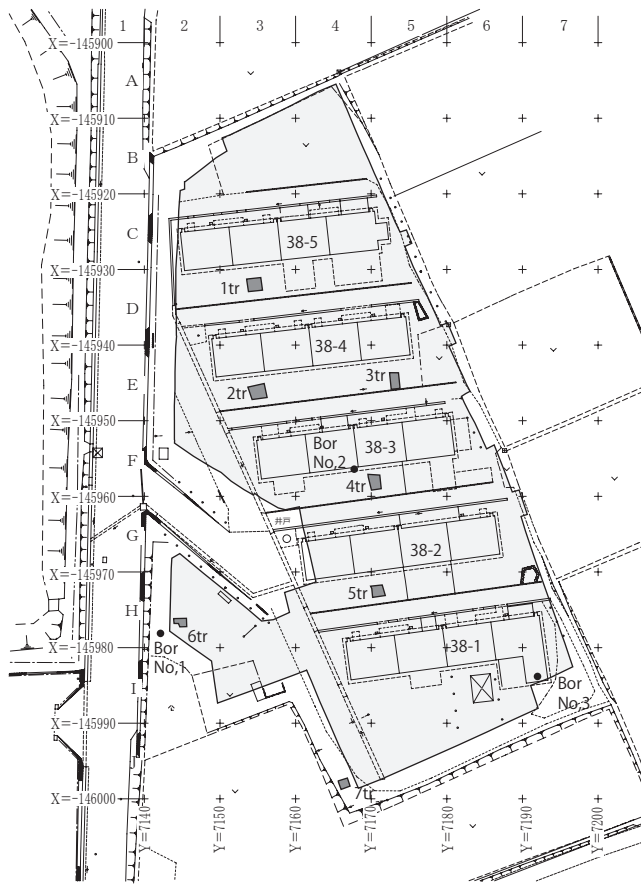


図7 試掘トレンチ・調査区配置図(1/1000)

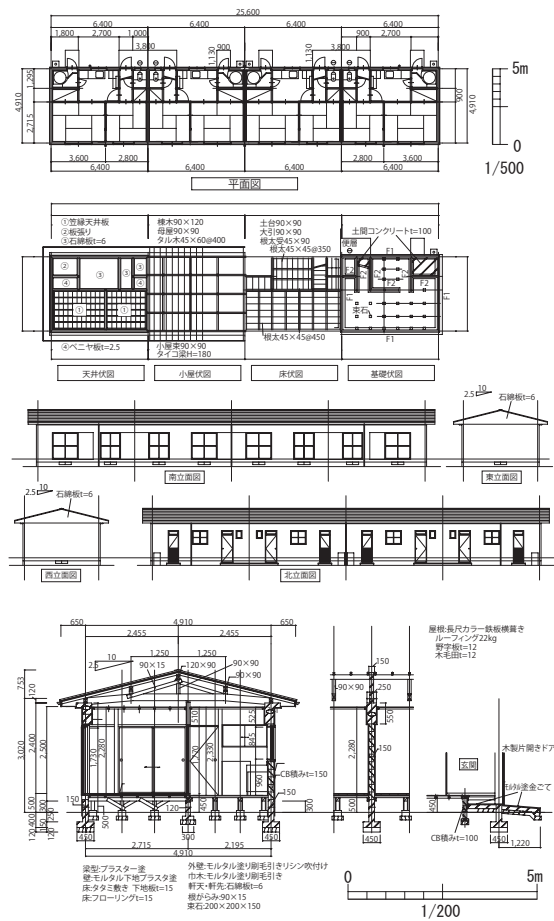


図8 王子原団地現況図

Ⅲ 調査の記録

1. 地形と層序 基本的層序

本調査区周辺の地層は、上位より霧島火山噴出物、沖積層、入戸火砕流堆積物、都城層の順で堆積し、基盤岩は四万十累層群⁽¹⁾とされる。地質調査の結果⁽¹⁾では①火山灰質粘性土層（層厚 2.30～3.70m）、②上部粘性土層（層厚 0.45～2.30m）、③砂質土層（層厚 1.30m）、④礫質土層（層厚 0.40～2.00m）、⑤下部粘性土層（層厚 0.45～0.90m）、⑥シラス層（層厚 20m 以上）が確認される。①層は霧島火山噴出物である黒ボク、ロームを主体とし、②～④層は「湖水形成時の堆積層あるいは、河川の氾濫堆積物」起源の沖積層、⑥層は入戸火砕流堆積物を起源とする「湖水形成時に流入したシラス（二次シラス）」と考えられている。

遺構・遺物は①火山灰質粘性土層中にて確認され、同層は色調などより次の 15 層に分層された。

I 層：現代表土 / II 層：近世～現代造成土・耕作土 / III 層：白色軽石（桜島文明軽石・桜島 3 テフラ）・中世耕作土 / IV 層：黒褐色土・縄文～中世遺物包含層・中世耕作土 / V 層：褐色土・縄文～中世遺物包含層 / VI 層：黒褐色土 / VII 層：黄色軽石（霧島御池軽石） / VIII 層：黒色シルト / IX 層：橙色火山灰（鬼界アカホヤ火山灰） / X 層：黒褐色土（霧島牛のすねテフラ？） / XI 層：暗褐色土・（桜島 1 1 テフラ） / XII 層～XIV 層 = 縄文時代早期遺物包含層 / XII 層：暗褐色土 / XIII 層：黒褐色土 / XIV 層：灰褐色砂質土・暗褐色砂質土 / XV 層：明褐色砂質土

肉眼で確認できた火山灰⁽²⁾は、上位より桜島文明軽石（桜島起源・1471 年）、霧島御池軽石（霧島火山御池起源・約 4200 年前）、鬼界アカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源・約 6300 年前）、桜島 1 1 テフラ（桜島起源・約 7500 年前）の 4 種であった。霧島牛のすねテフラ（霧島起源・約 6500 年前）については明瞭に確認することはできなかった（以後、「文明軽石」・「御池軽石」・「アカホヤ」・「桜島 1 1 テフラ」と略記）。

(1) 株式会社八光開発コンサルタント 2010 「王子原団地建替工事に伴う地質調査委託報告書」
(2) 早田勉 2006 「都城盆地とその周辺に分布するテフラ（火山灰）」『都城市史 資料編 考古』

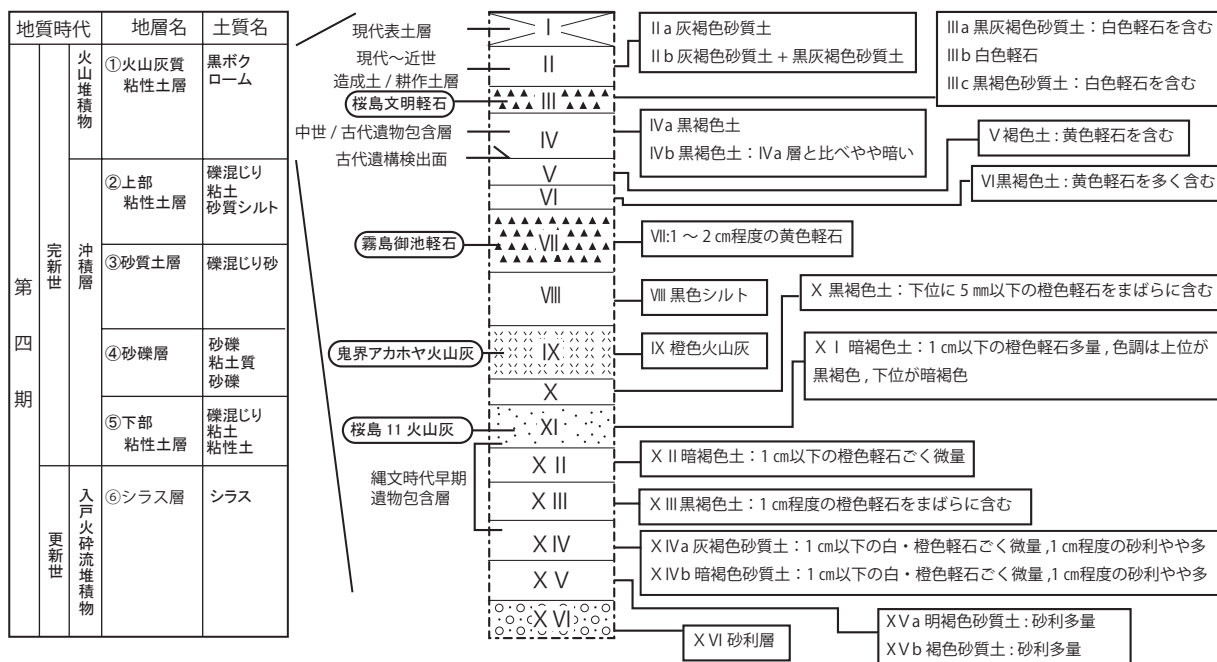
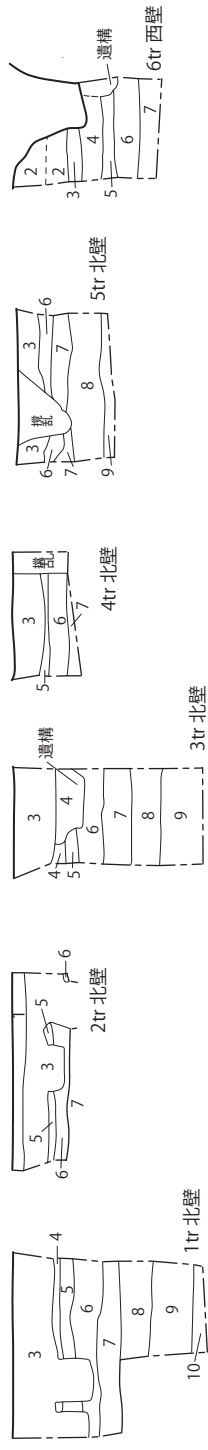


図9 土層模式柱状図

- 1 砂型
- 2 パリス・オレンジパミス混成褐色土
- 3 白色土
- 4 褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 赤褐色土
- 9 アカボネヤシロ
- 10 オレンジパミス混成褐色土



試掘トレンチ土層

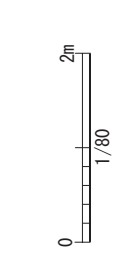
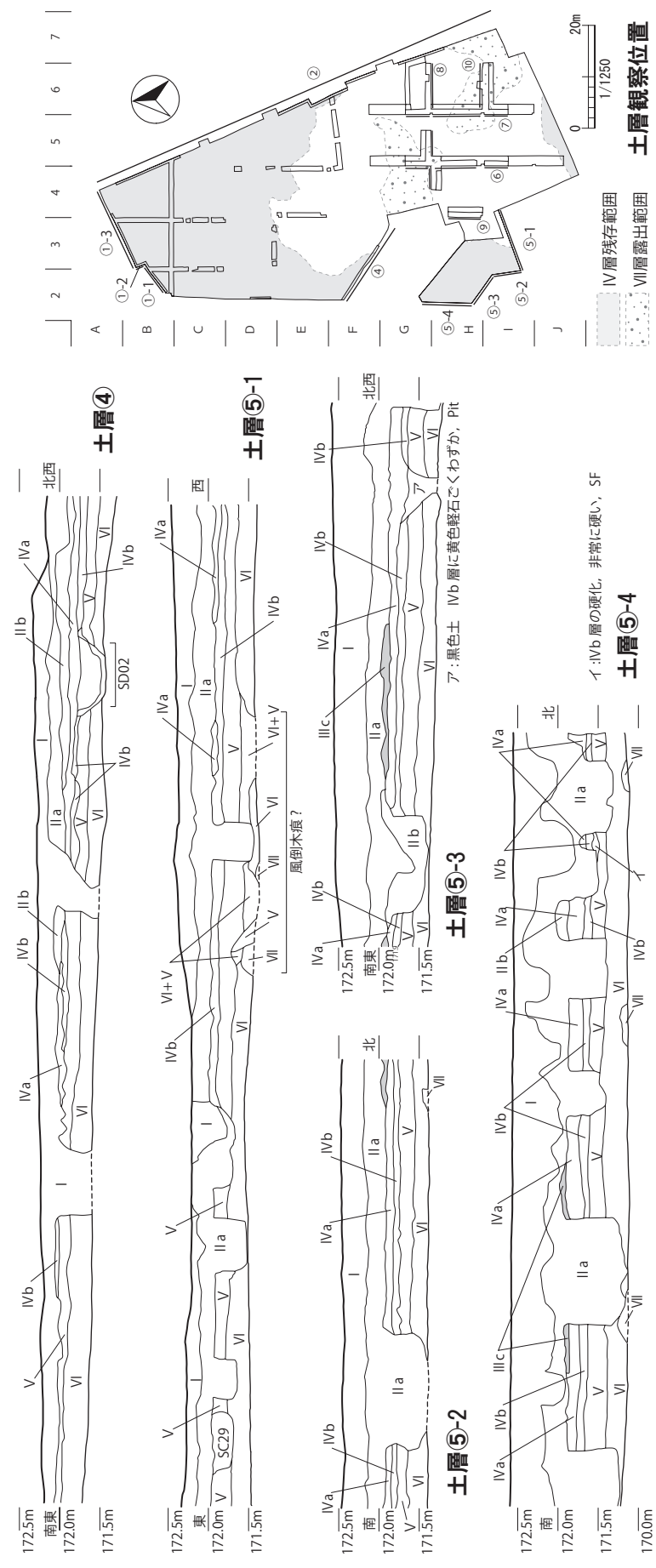
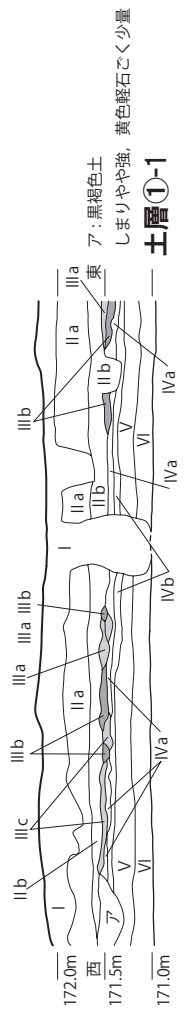


図10 土層:

ア: 黒色土 IVb層に黄色軽石ごくわずか, Pt
 イ: IVb層の硬化, 非常に硬い, SF
 土層⑤-4



ア: 黒褐色土
 しまりやや強, 黄色軽石ごく少量
 土層①-1

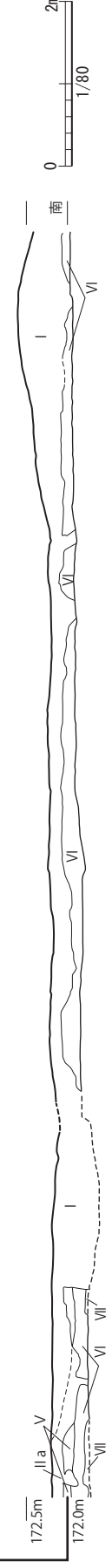
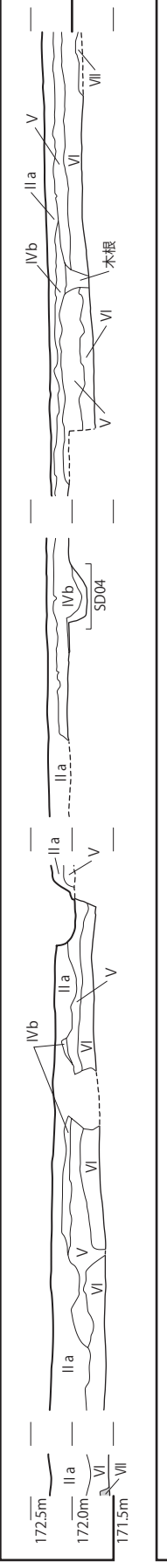
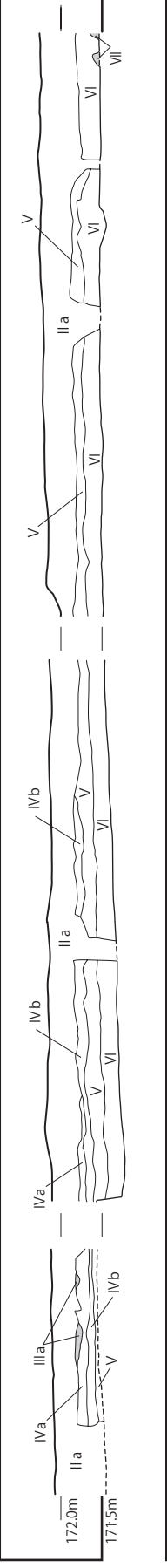
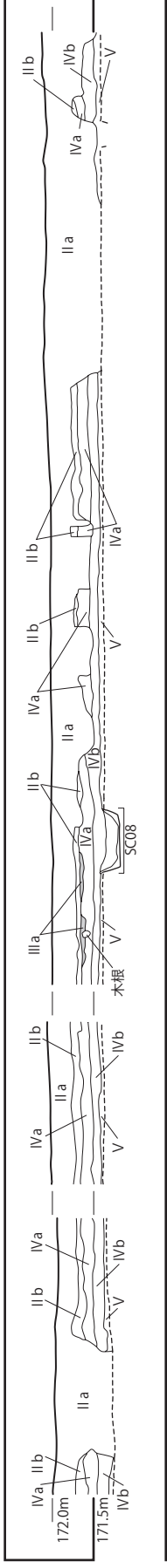
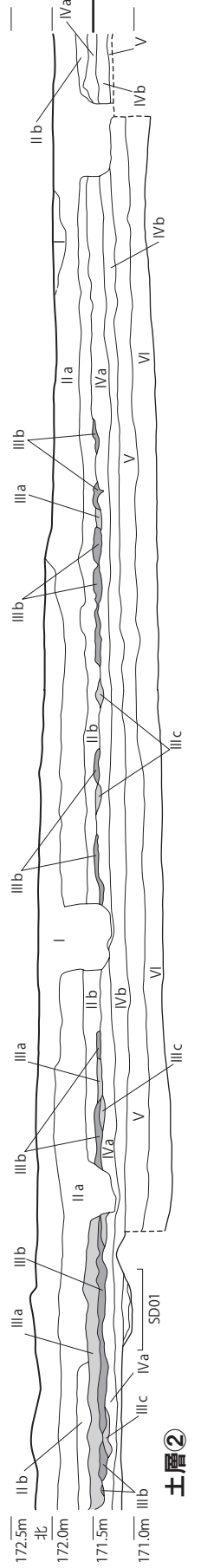
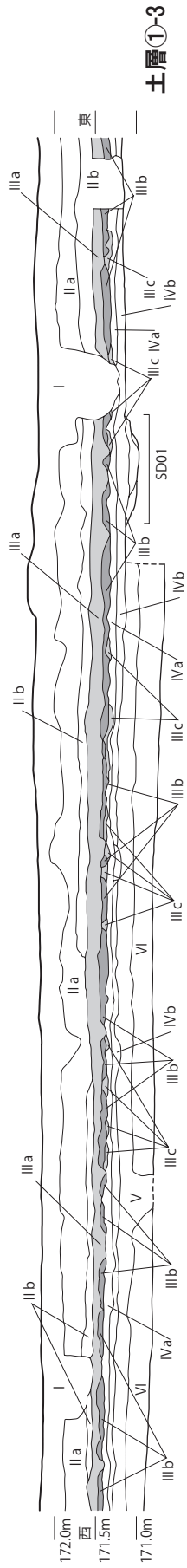


图11 土層:2

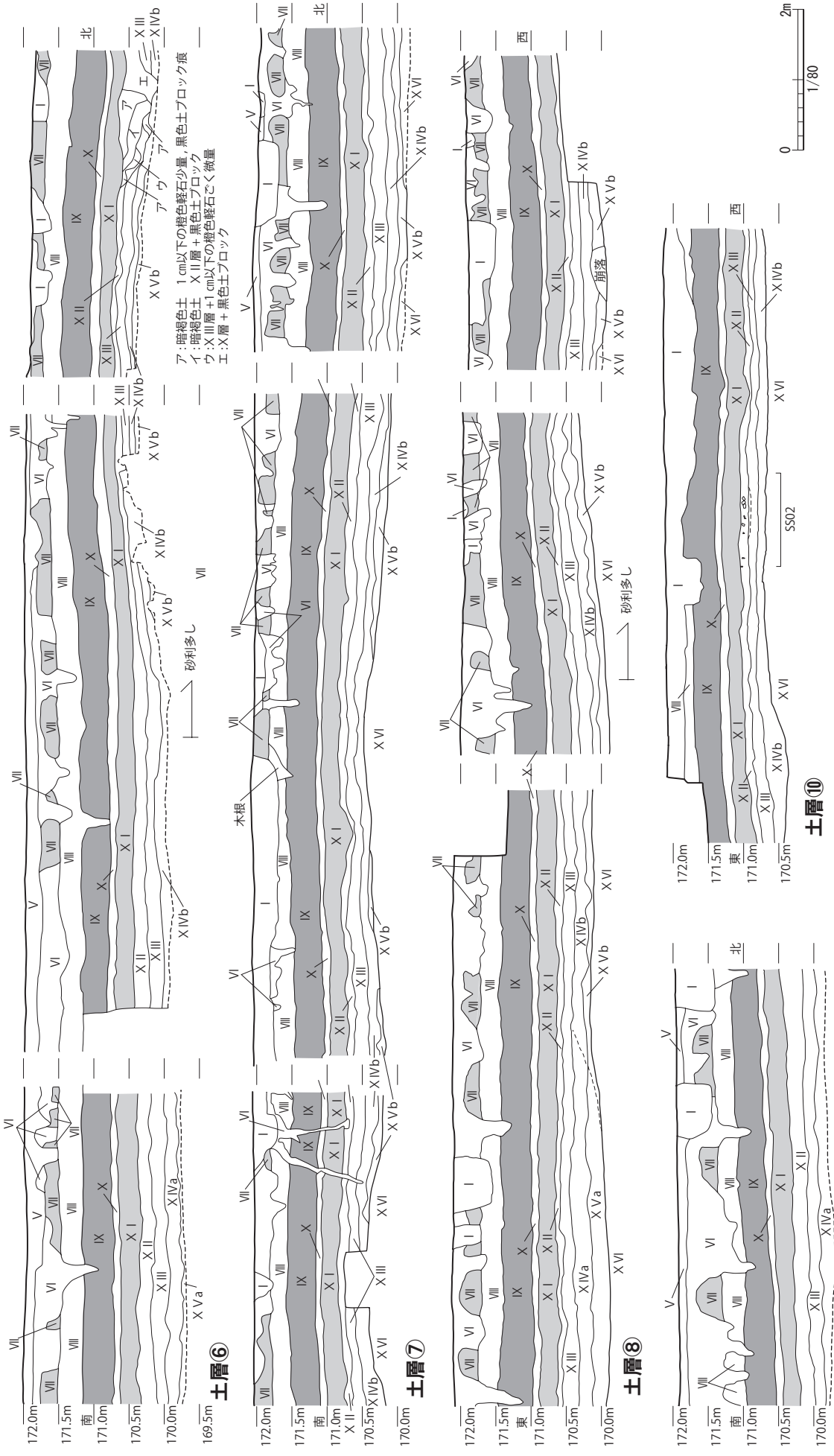


図12 土層:3

調査区及び周辺の地形

本遺跡は盆地の南縁山地のふもとに形成された「開析扇状地面」⁽¹⁾にあり、今回の調査区は扇状地面のやや東側、西側を谷に面した台地の端部付近（標高 172m）に位置している。また南側にも浅い谷が東西に入り込んでいる。現状では調査区付近を頂点とし、南・西・北への傾斜が観察される。周辺での調査事例には、梅北北原遺跡、王子原第 2 遺跡がある。南から北への傾斜に沿い、200m 程度の間隔で、王子原第 2 遺跡（標高 177m）、本調査区（標高 172m）、梅北北原遺跡（150m）と並ぶ。いずれも西側の谷に面した台地の端部付近に立地するが、地形や層序の観察より、各遺跡間には東西方向の浅い谷地形が入ると考えられる。遺跡間の層序はほぼ対応するが、梅北北原遺跡では本調査区でみられた礫層（XVI 層以下・沖積層）の堆積は確認されていない。

調査区内の現地形はほぼ平坦であり、ごくわずかに南→北へ傾く。土層観察では土層②、④にて南→北、土層⑦、⑥、⑨、⑤-1にて、北→南へのごく緩い傾斜が確認された。また、F-4・5、G-4~6、H-5~7、I-6・7グリッド付近ではI層（表土層）直下が、上位を削平されたVI層やVII層（御池軽石）となっていた。これらの点より、調査区南東部（I-7グリッド付近）～中央部（G-4グリッド付近）にかけての高くなる部分と、北部（A・B-2~4）・南部（H~J-2~4）の低くなる部分との区別が把握され、調査区内の旧地形としては、南東部より西へ向けた微高地があり、その両側に南北の谷へと続く、ごく緩やかな斜面が形成されていた状況が推測される。

また、本調査区においては、調査区を東西に大きく横断する削平と共に、旧団地使用時（ゴミ穴など）・建設時（基礎など）の攪乱、耕作地として使用されていた時期（貯蔵穴）の攪乱なども多数あり、VII層以上については、かなりの部分が影響を受けていた。

(1) 宮崎県農政水産部農業振興課 1981「都城・北諸県地域土地分類基本調査 都城」

2. 遺構と遺物

(1) X I ~ X IV 層の遺構と遺物（縄文時代早期）

G~I-3~7グリッド、建物建設予定地に設定したトレンチにて検出された。出土層位は桜島 11 テフラが混じる X I 層の最下部から X IV 層の上位にかけてであり、集石遺構 2 基、土器片 120 点余りが確認された。

集石遺構（図 1 4 ・ 表 1）

SS01 H-5グリッドにて検出された。X I 層最下部より礫が出現し始め、X II 層を中心とし、X III 層最上位にかけて形成される。平面的には径 80cm 程度の集中域と、その周囲 1m 程度にごく薄い礫の散乱がみられる。集中部の厚さは 10cm 程度であり、礫同士の重なりは乏しい。構成礫数は 156 点で総重量は 21.2kg、最小 4 g、最大 780g である。100g 以下の破碎した小破片が 81 点と全体の過半数をしめる。石材は砂岩と考えられた。掘り込みは確認できなかった。礫の接合結果では、総点数は 156 点→94 点と 40% 減少し、平均重量は 136g → 225g と増大する。100g 以下の小破片が 81 → 31 点と大きく減少し、301g 以上のやや大振りな礫点数がわずかずつであるが増加している。

SS02 I-6グリッドにて検出された。X II 層中に形成される。平面的には径 70cm 程度の範囲に集中し、厚さは 10cm 程度、礫同士の重なりは乏しい。土層断面では X III 層を掘り込むように、わずかに黒味が強い土の薄い凹みが観察されたが、平面的に検出することはできなかった。構成礫数は 106 点で総重量は 17.2kg、最小 15 g、最大 635g である。**SS01** と比較し赤変、破碎している礫が少ない。石材は砂岩と考えられた。礫の接合数は少なく、総点数は 106 点→93 点と 12% の微減、平均値は 162g → 183g の微増であった。

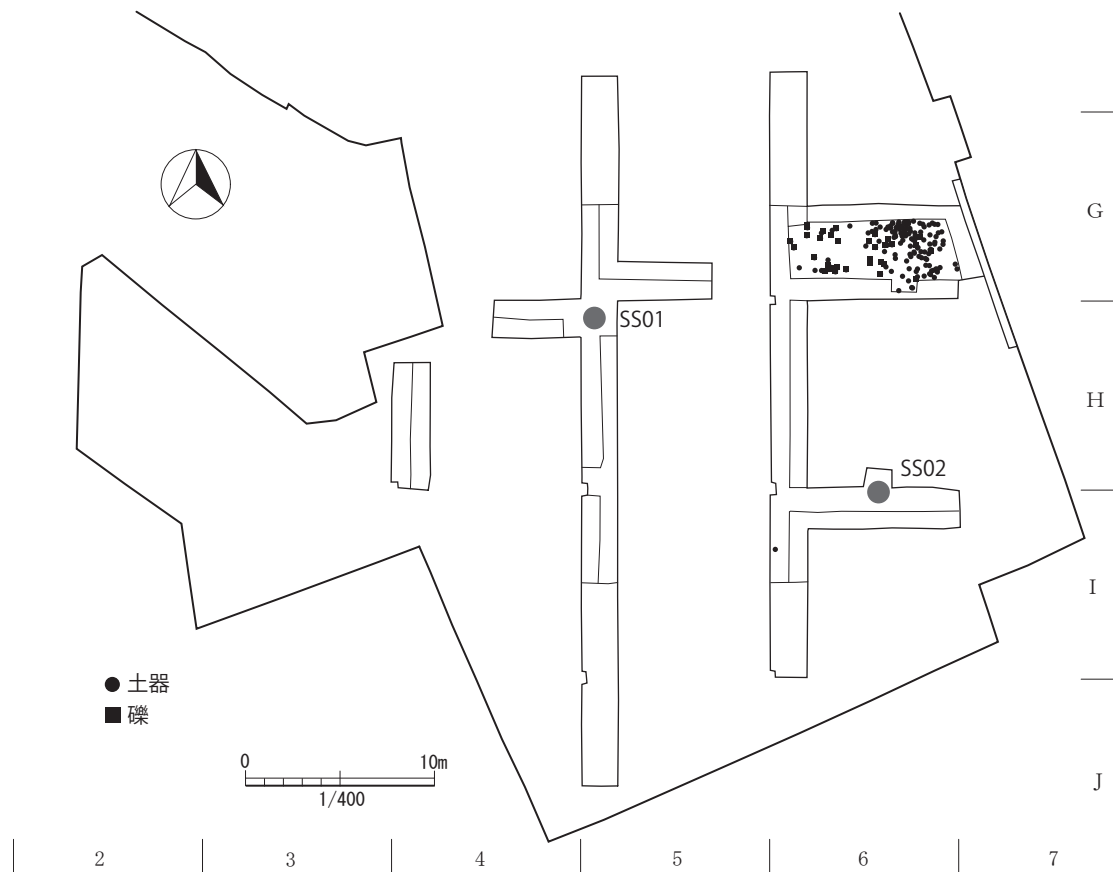


図13 X I～XIV層遺構・遺物出土状況

出土遺物：図15・16

土器 G-6グリッドにて124点、I-6グリッドにて1点が出土した。G-6グリッドでの調査は、トレンチによる確認時、土器片が4点出土したため、建物建設計画に合せ範囲を拡張した。出土層はX I層35点、X II層43点、X III層39点、X IV層7点と、X II層を中心にその上下層に広がる。平面的には中央より東側、北東隅から調査区外へと広がる状況と考えられた。文様・調整等より3種類に分類した。

I類：1.2.3.4.5 無文である。明るめの茶褐色で、器壁が8mm程度とやや厚い。ラッパ状に大きく開く形状の口縁部と考えられ、内外面の調整はナデ。破片20点が確認された。出土層の内訳はX I層6点、X II層7点、X III層7点である。

II類：6 無文である。器壁が5mm程度とI類に比べやや薄い。外面調整はナデ、内面調整はケズリである。やや膨らみ気味の胴部片である。底部・口縁部は確認できていない。I類と接合し、個体を形成する可能性もある。70点と最も数が多い。層別の内訳はX I層13点、X II層28点、X III層22点、X IV層7点であり、X II・X III層を中心とする。

III類：上記2分類に該当しない土器や小片などにより判別不能であった土器である。**7**は斜位の貝殻刺突文を施す胴部片である。上部に焼成後の穿孔が半分残る。下剥峯式土器に該当すると考えられる。

石器 8 先端部と基部右半を欠損した正三角形基調の石鏃と考えられる。石材は黒曜石、出土層位はX IV層である。

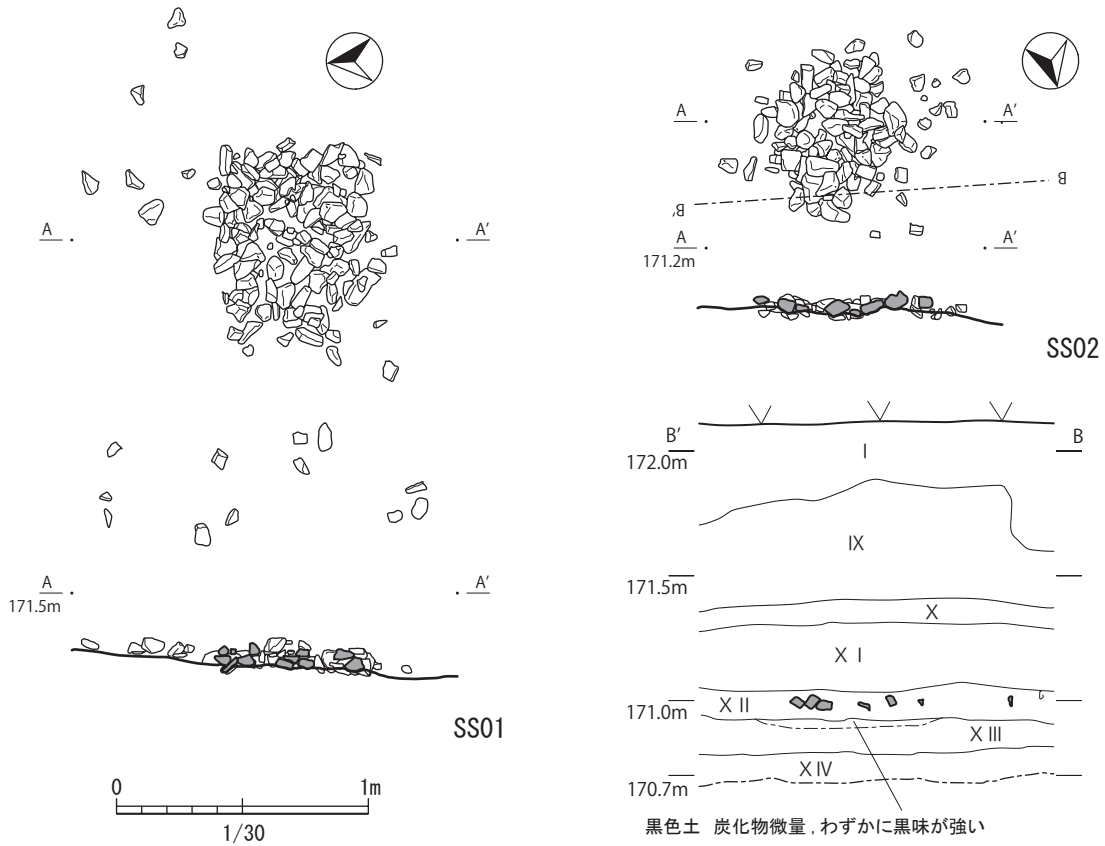
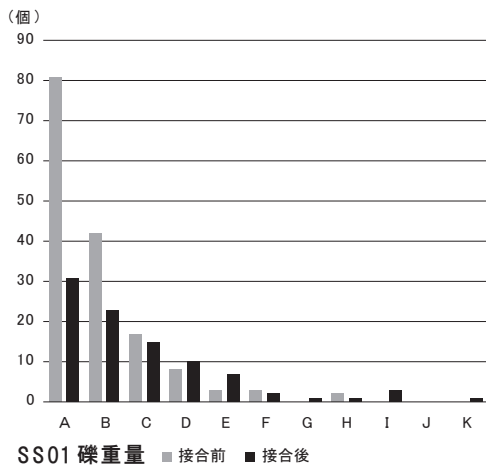
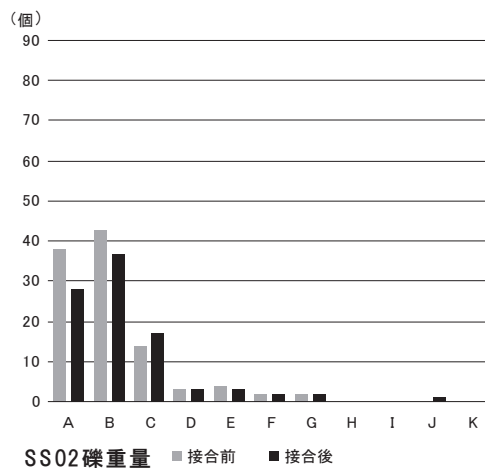


図14 SS01・02

No.	規模		構成 礫数 (個)	総重量 (kg)	平均 (g)	構成礫内訳											備考
	長軸 (cm)	短軸 (cm)				A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
						1~ 100g	101~ 200g	201~ 300g	301~ 400g	401~ 500g	501~ 600g	601~ 700g	701~ 800g	801~ 900g	901~ 1000g	1001g~	
SS01接合前	85.0	60.0	156	21.2	136	81	42	17	8	3	3	0	2	0	0	0	
SS01接合後	-	-	94	-	225	31	23	15	10	7	2	1	1	3	0	1	
増減数	-	-	-62	-	-	-50	-19	-2	2	4	-1	1	-1	3	0	1	
SS02接合前	75.0	60.0	106	17.2	162	38	43	14	3	4	2	2	0	0	0	0	
SS02接合後	-	-	93	-	183	28	37	17	3	3	2	2	0	0	1	0	
増減数	-	-	-13	-	-	-10	-6	3	0	-1	0	0	0	0	1	0	



SS01 礫重量 ■ 接合前 ■ 接合後



SS02 礫重量 ■ 接合前 ■ 接合後

表1 集石遺構計測表

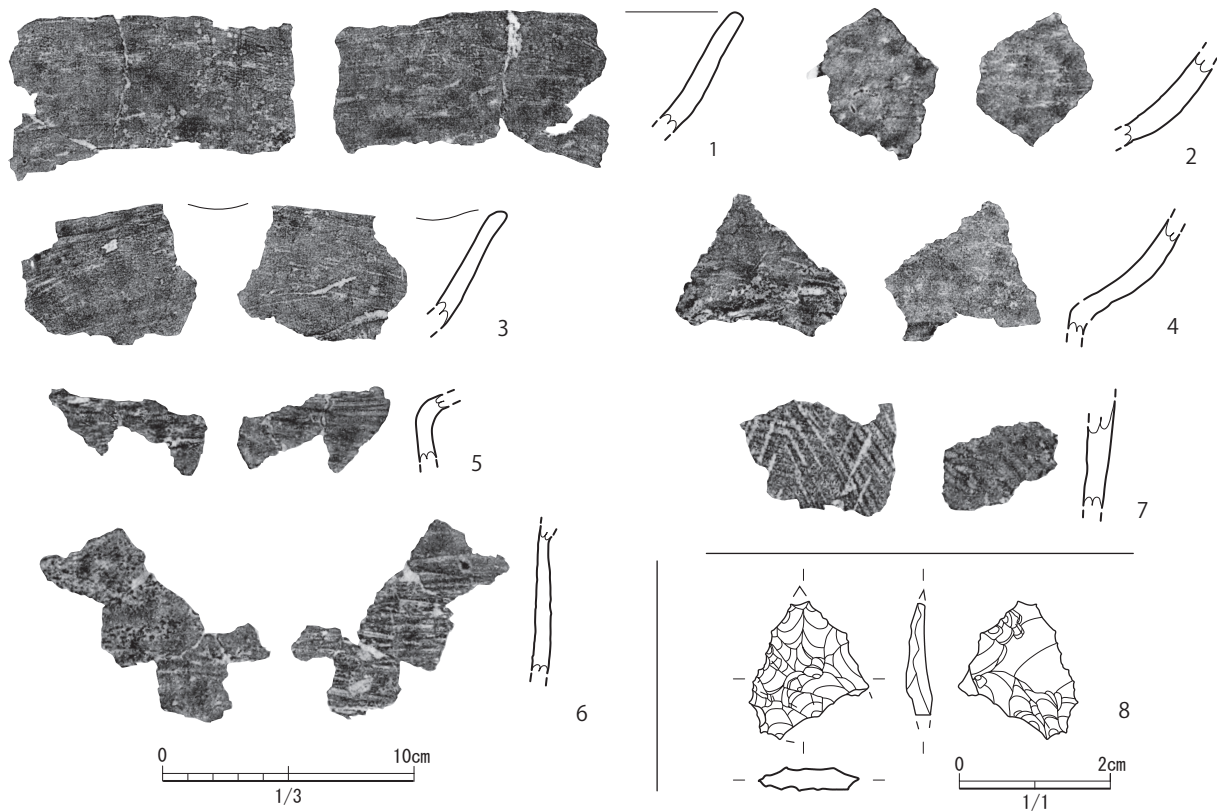


图15 X I ~ X IV層出土遺物

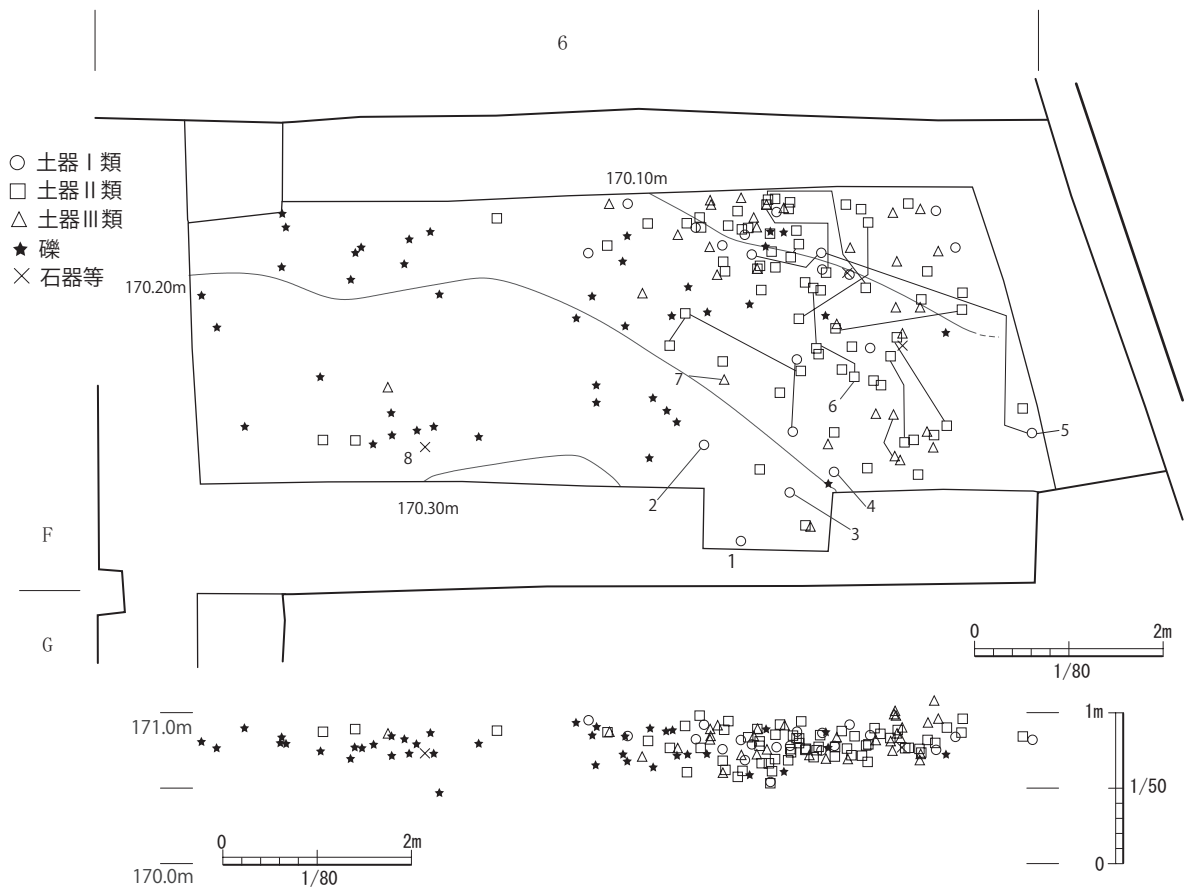


图16 X I ~ X IV層遺物出土狀況

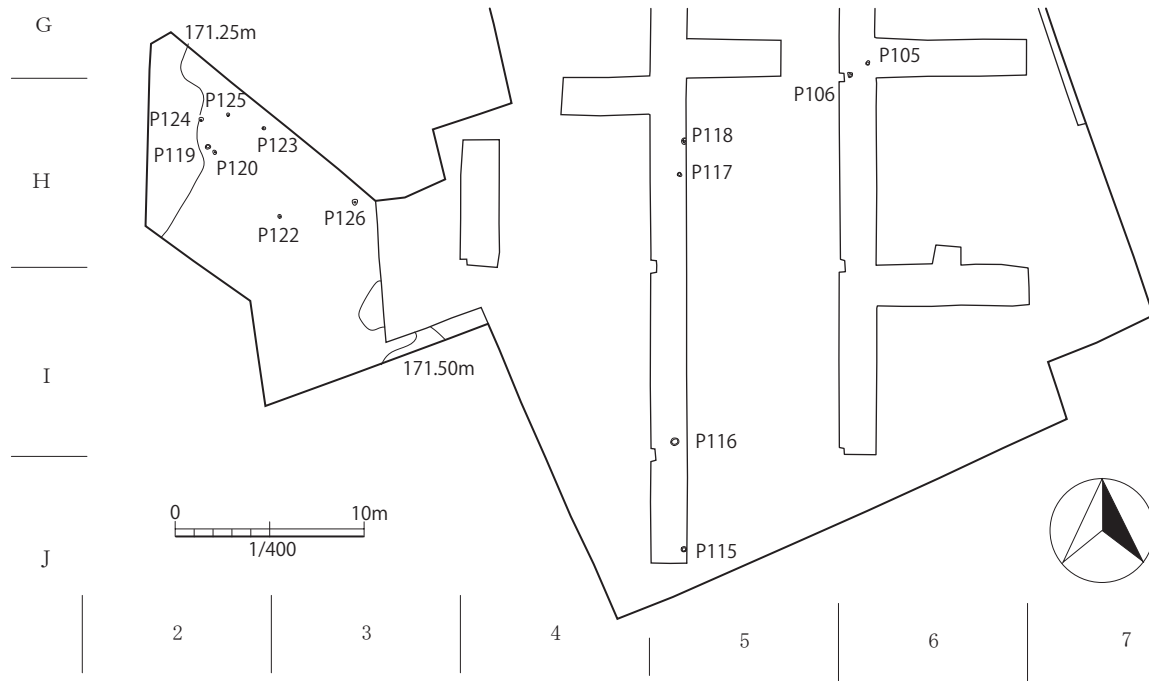
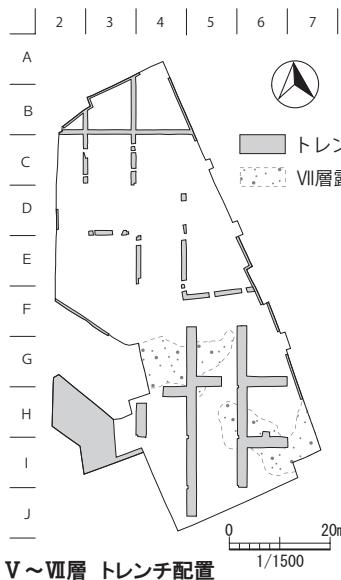


図17 VII層上面遺構出土状況



V～VII層 トレンチ配置

(2) IV～VI層の遺構と遺物（縄文時代～古墳時代）

VII層上面までのトレンチ調査を中心に確認された遺構・遺物である。

遺構 ピット 13 基が確認された。記録に不備があり未掲載となったが、D-3、F-5グリッドでもピット各1基が確認されている。P119・120は中世土師器が出土しており、上層から掘り込まれたピットと考えられる。

遺物 縄文時代（早期を除く）～古墳時代に該当すると考えられる遺物は850点近くが出土している。出土座標を記録した遺物の集計（p.30表2）ではIV層282点、V層75点となる。削平された調査区南東部を除く、調査区のほぼ全域で出土がみられるが、濃密な集中域などは検出できず、IV層下位よりV層

中位にかけて、まばらに出土が確認される状況であった。

9は深鉢胴部と考えられる。文様がなく、内外面の調整はナデ。外面は剥離が進む。10は台付皿型土器の皿口縁部と考えられる。内面に連続刺突文を施す。補修孔と考えられる焼成後の穿孔が施される。11.12.13は屈曲し大きく開く深鉢口縁部である。11は内外ナデ、12は粗いミガキ、13はミガキである。13は端部内面に一条の沈線を施す。14は摩消縄文を施す浅鉢口縁部である。15.16.17は精製土器であり、15.17は鉢、16は浅鉢と考えられる。18は孔列文土器、19.20は突帯文土器の口縁部である。111は組織痕土器底部である。

縄文時代後期後半から晩期にかけての土器群と把握される。

22～25は「く」の字状に屈曲する甕口縁部である。23・25は外反し、22.24は直線的である。弥生時代後期に該当すると考えられる。

26は高坏脚部、27は平底の甕底部と考えられる。いずれも古墳時代の土師器と考えられる。

28は薄い器壁で大きく開く口縁部である。小型壺の口縁部と考えられる。29は平面形が二等辺三角形の磨製石鎌である。P74より出土した。

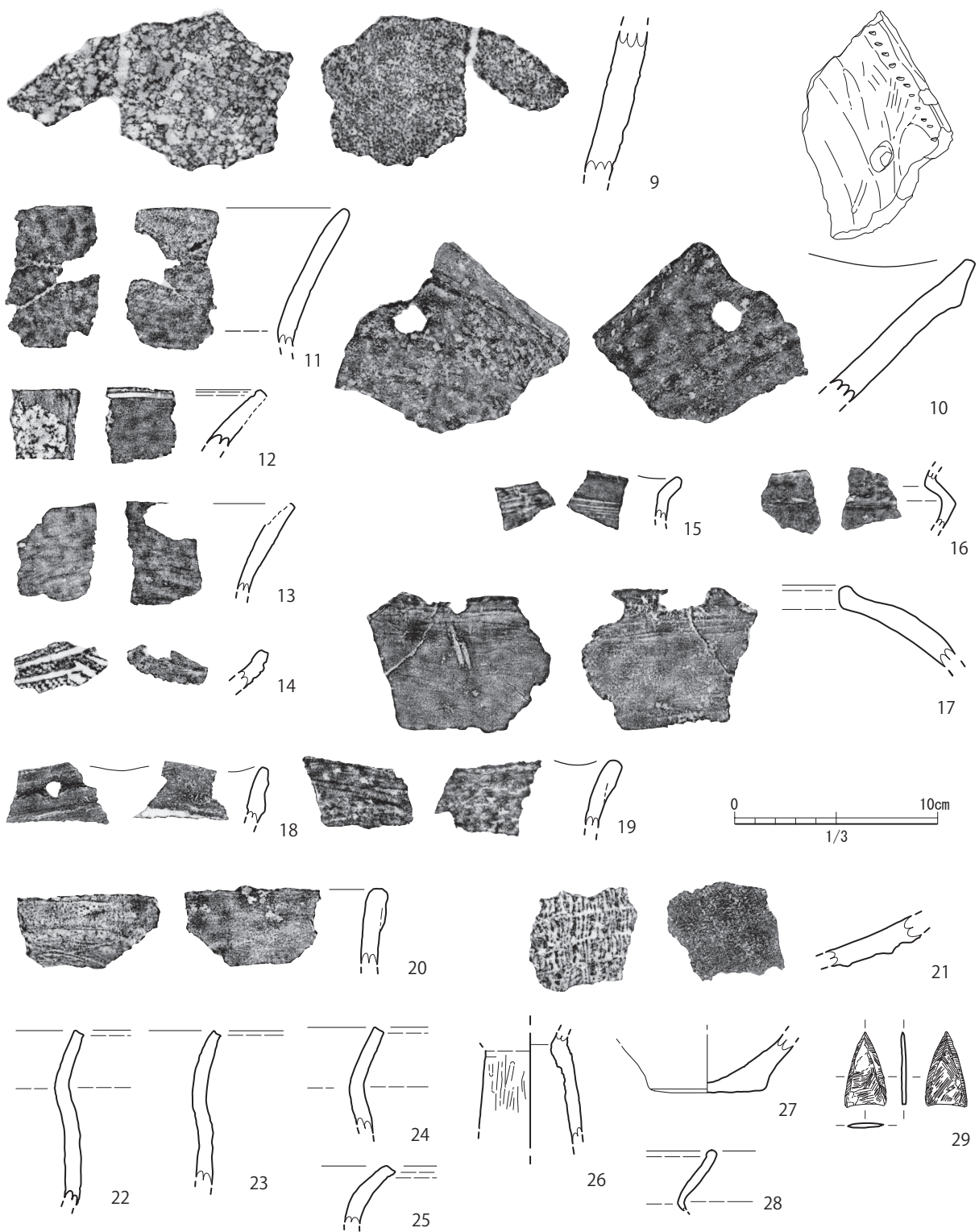


图18 IV~VI層出土遺物

(3) IV～V層の遺構と遺物（古代～中世）

調査区中位より北側を中心に多くの遺構・遺物が確認された。遺構検出はV層上面を基本とし、削平された部分についてはV層中・VI層上面で検出した。掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・道路状遺構が確認された。遺物包含層の主体はIV層であり、多量の土師器のほか、黒色土器・白磁・青磁・滑石製品などが出土した。

掘立柱建物跡（SB01～07：図20～26）

SB01～05・07 C・D-4・5グリッドで検出された。**SB02**を中心として、北に**SB01・07**、東に**SB03～05**が位置している。柱穴の埋土よりIVb層に近い黒色土・黒褐色土の**SB01～05**と、IVa層に近くやや明るい黒褐色土の**SB07**とに大別される。

SB01 長軸方向は東西、桁行3間、梁間3間、北側に庇をもつ。桁行柱間は平均2.2m、梁行柱間は平均2.0mである。北東隅の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。柱穴の掘方は円形～楕円形で先細り状の断面形が多い。柱穴より土師器片などが出土している。**P11**が24点、**P10**が20点と多く、**P08**が2点、**P07・09**が各3点と少ない。土師器の底部切離し技法はヘラ起しが多い。**30～55**は土師器である。坏・小皿共に1a類（以下、土師器分類についてはp.28「出土遺物」参照）はなく、1b類が主体となる。坏形態からは**30.42.53**が1b-ウ類、**43.44.49**が1b-イ類、**31.35**が2-ア類に分類される。小皿では**32.34.36.37.39.45.46.47.50.54.55**が1b-ア類、**40.51.52**が1b-イ類、**33.38.48**が2-ア類に分類される。**36**は完形である。

SB02 長軸方向は東西、桁行5間、梁間4間、南北2面に庇をもつ。調査区内で最も大きな建物跡である。桁行柱間は平均2.2m、梁行柱間は平均2.1m。身舎東側、**P25～P30**間の柱穴は確認できず、**P29～30**、**P74～P32**間の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。柱穴の掘方は円形～楕円形で先細り状の断面形が多い。径の平均は55cm程度、深さ70cm程度と、他の建物跡の柱穴と比べ大きく深い。他遺構との重複関係は土層断面の観察などより**P22→SC04**、**P27→SF06**と把握された。柱穴より土師器等が出土している。**P28**が128点、**P27**が82点、**P14**が67点、**P31**が43点、**P74**が31点、**P21**が32点と多く、**P32**が2点、**P17**が1点、**P16**が0点と少ない。**P27・28・31・74**は建物跡の南西角にあたり、**P73**と合わせ、遺物量が非常に多くなっている。土師器の底部切離し技法はヘラ起しが多い。

56～71・73～92は土師器である。坏・小皿共に1b類が主体となり2類が続く。1a類は図化はならなかったが**P27・31**で小片1点づつが出土している。坏形態からは**56.59.60.66.79.81.86.89.90**が1b-ア類、**68.87**が1b-イ類、**67.74.75.78.80.82**が1b-ウ類に分類される。小皿では**61.62.65.83.85**が1b-ア類、**73**が1b-イ類、**63.71**が1b-ウ類、**70.84**が2-ア類に分類される。**56**は坏1b-ア類としたが、体部の立ち上がりやや急であり、断面形が箱状に近い。**72**は白磁椀底部である。高台無釉で内面を斜めに削る。椀Ⅱ類に該当すると考えられる。

SB03・04 重複する2棟の建物跡であり、東側は調査区外へ広がる。桁行5間、梁間2間もしくはそれ以上の規模と考えられる。いずれも長軸方向は南北だが、**SB03**は**SB04**に比べわずかに東に振れる。**SB04**の**P75・76**と**P33・34**との柱間距離は、他の柱間と比べかなり広く、**P33・34**を構成柱穴とするには不確実性が残る。桁行柱間は平均2.1～2.5m、梁行柱間は平均1.8mであり、**SB01・02**と比べ桁行柱間はほぼ同規模だが、梁行柱間はやや狭い。柱穴の掘方は円形が多く、先細り状と箱状で平底の断面形がみられる。

各柱穴より土師器片等が出土している。**P33・34**が31点、**P44**が16点と比較的多い他は、いずれも10点以下である。土師器の底部切離し技法はヘラ起しが多いが、**P39**では糸切離しのみである。また、**P39**では土師器の他、硯・滑石製品が出土している。**93～102・106～110**は土師器である。坏・小皿共に1b類が主体となり2類が続く。1a類は図化はならなかったが**P33・44・45**で小片1点づつが出土している。坏形態からは**93.96.97**は1b-ア類、**98**は1b-イ類、



图19 V層上面遺構出土狀況

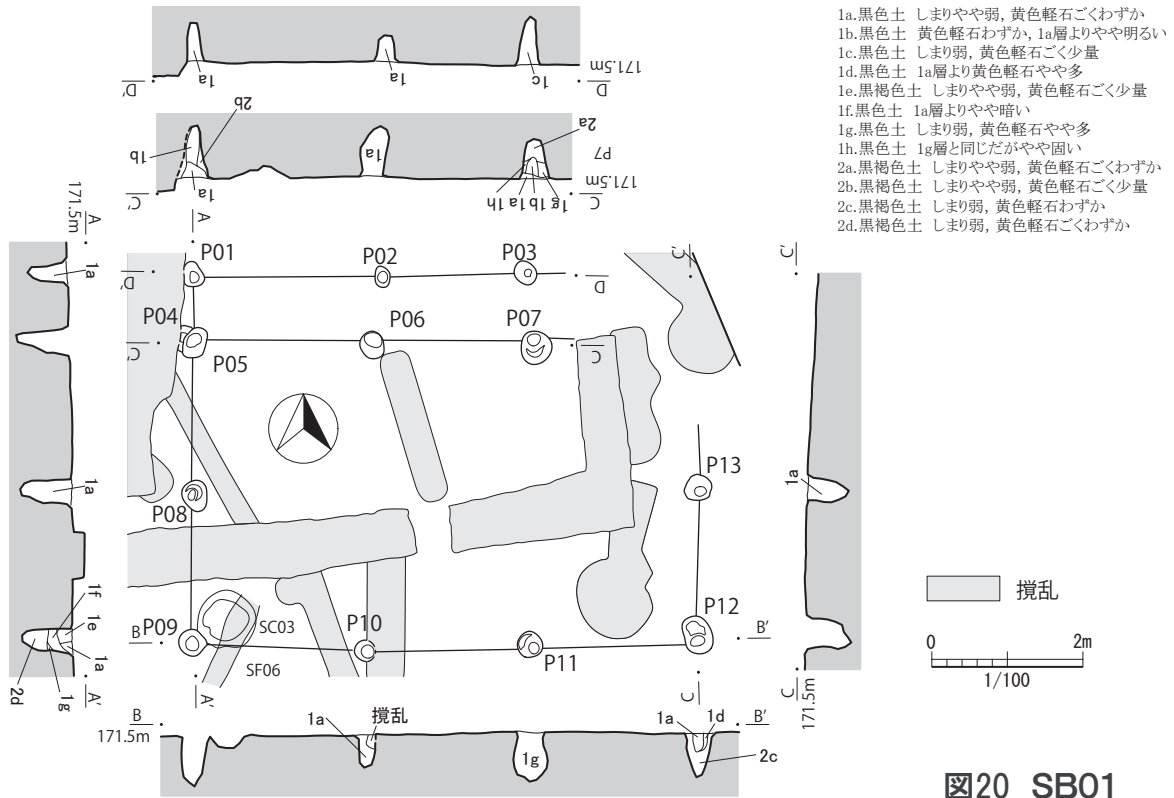


図20 SB01

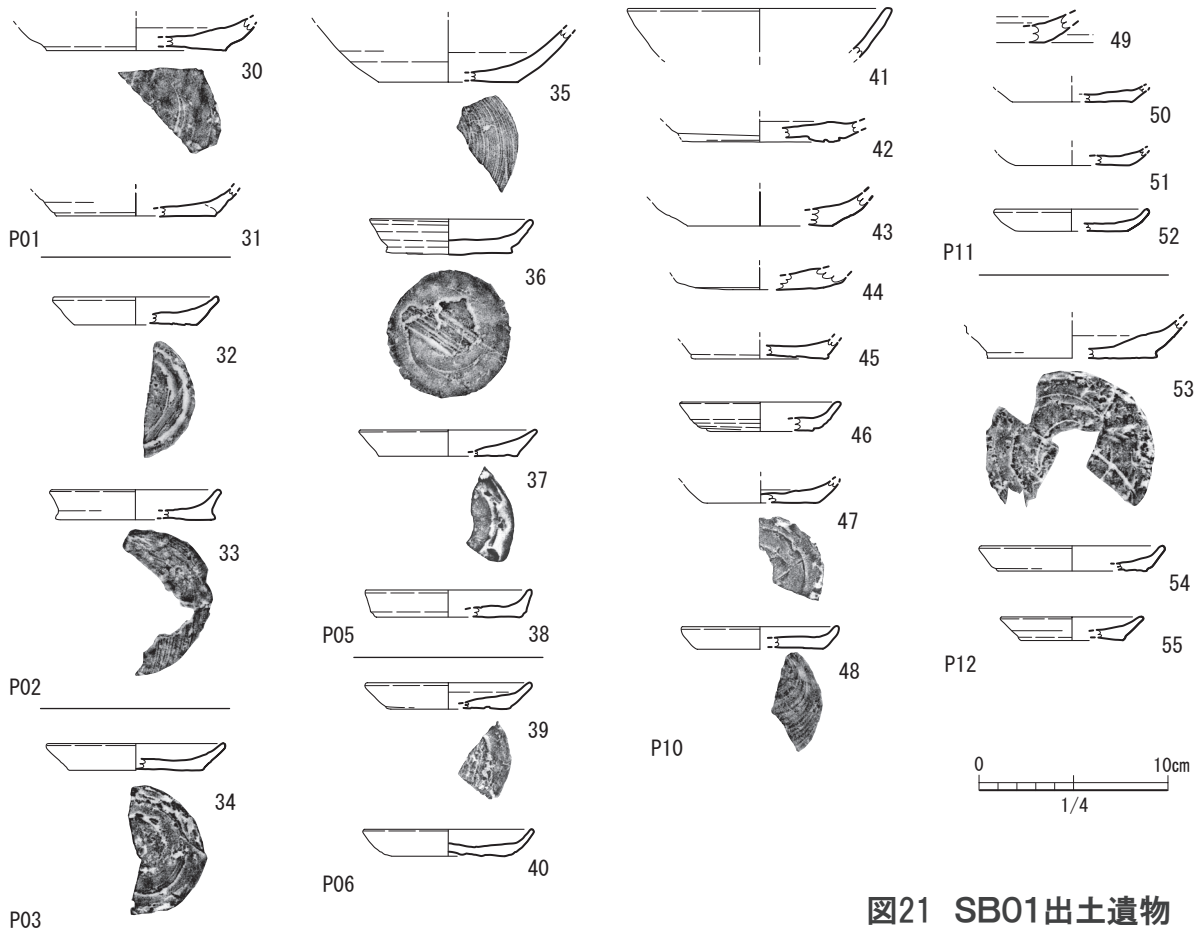


図21 SB01出土遺物

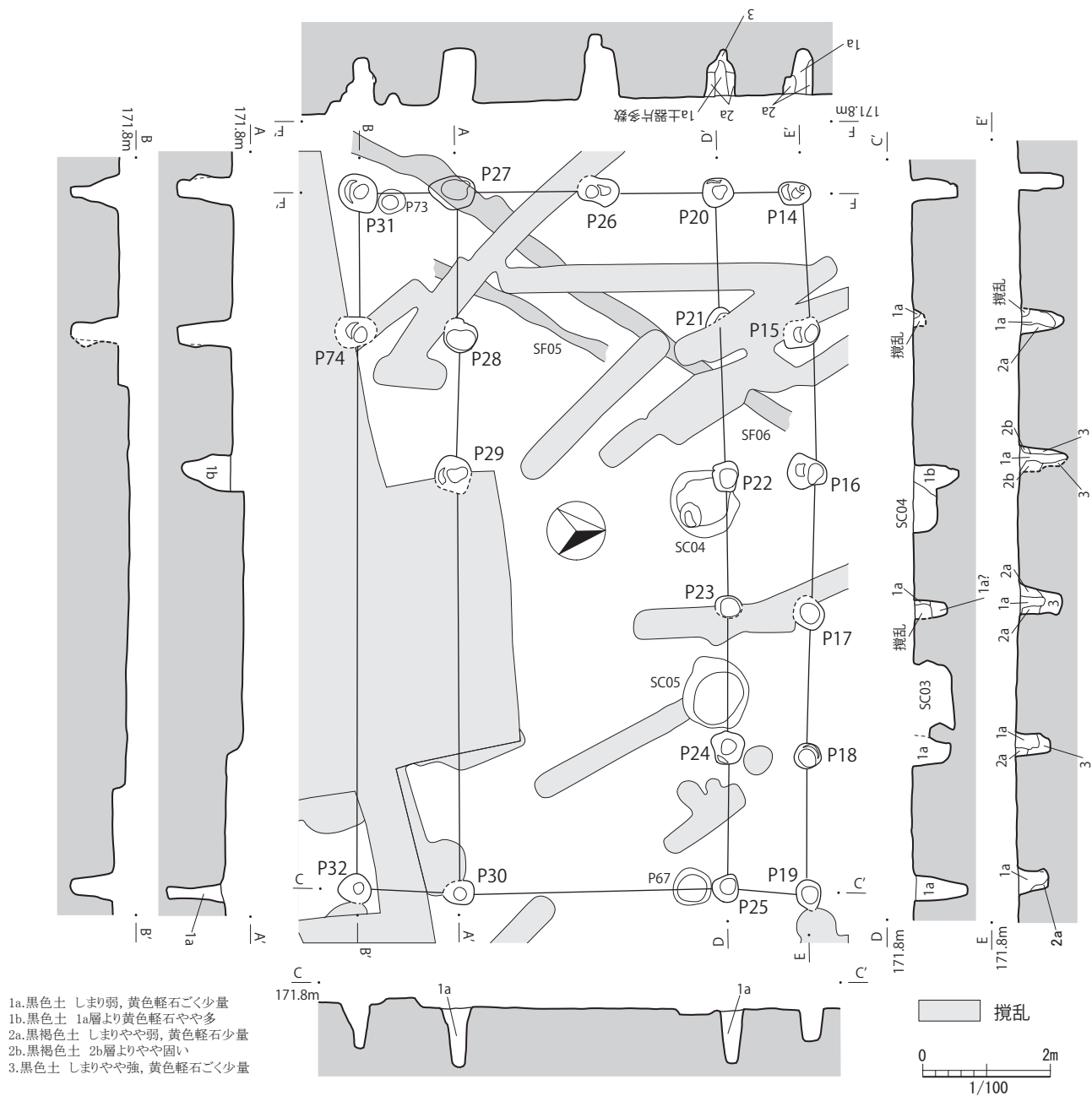


図22 SB02

109 は 1b- ウ類、100 は 2- イ類に分類される。小皿では 99.106.107.110 は 1b- ア類、95.101 は 2- ア類に分類される。103 は硯である。海部を欠損し、陸部には縦・斜め・半円状の擦痕が残る。104 は滑石製品である。船のような形をした双口の製品であり、片側にツマミを造り出している。105 は小さな玉縁をもつ白磁碗の口縁部で、碗Ⅱ類に該当すると考えられる。

SB05 東側は調査区外へと広がる、桁行3間、梁間2間もしくはそれ以上の規模と考えられる。長軸方向は南北である。桁行柱間が平均1.1mと非常に狭く、SB01・02の半分程度となる。柱穴の掘方は円形が多く、50cm程度のやや深い例(P47・49・51)と30cm程度のやや浅い例(P46・48)がある。各柱穴より土師器片等が出土しているが、0~4点と少ない。111は土師器環で1b-ア類に分類される。

SB07 長軸方向は東西、桁行2間、梁間1間、南東隅の柱穴は攪乱により破壊されたと考えられる。桁行柱間が平均2.4m、梁行柱間が3.1mと、他の建物跡に比べ広い。柱穴の掘方は円形で、

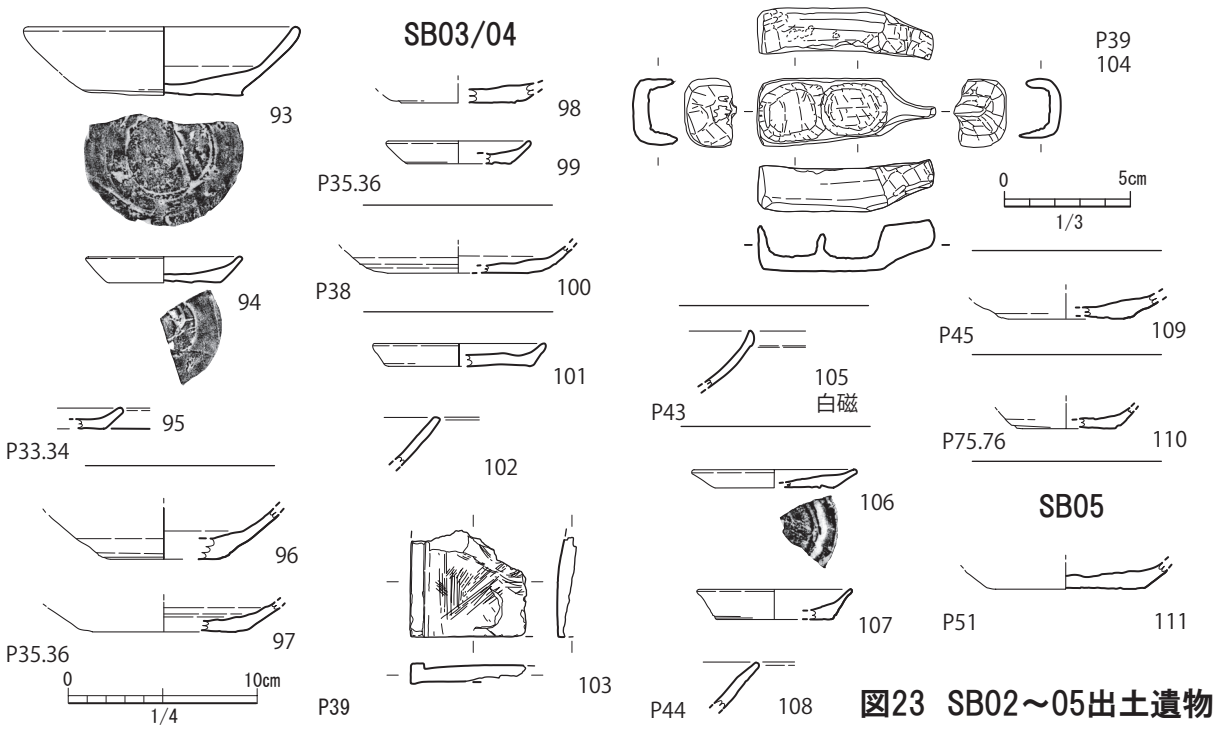
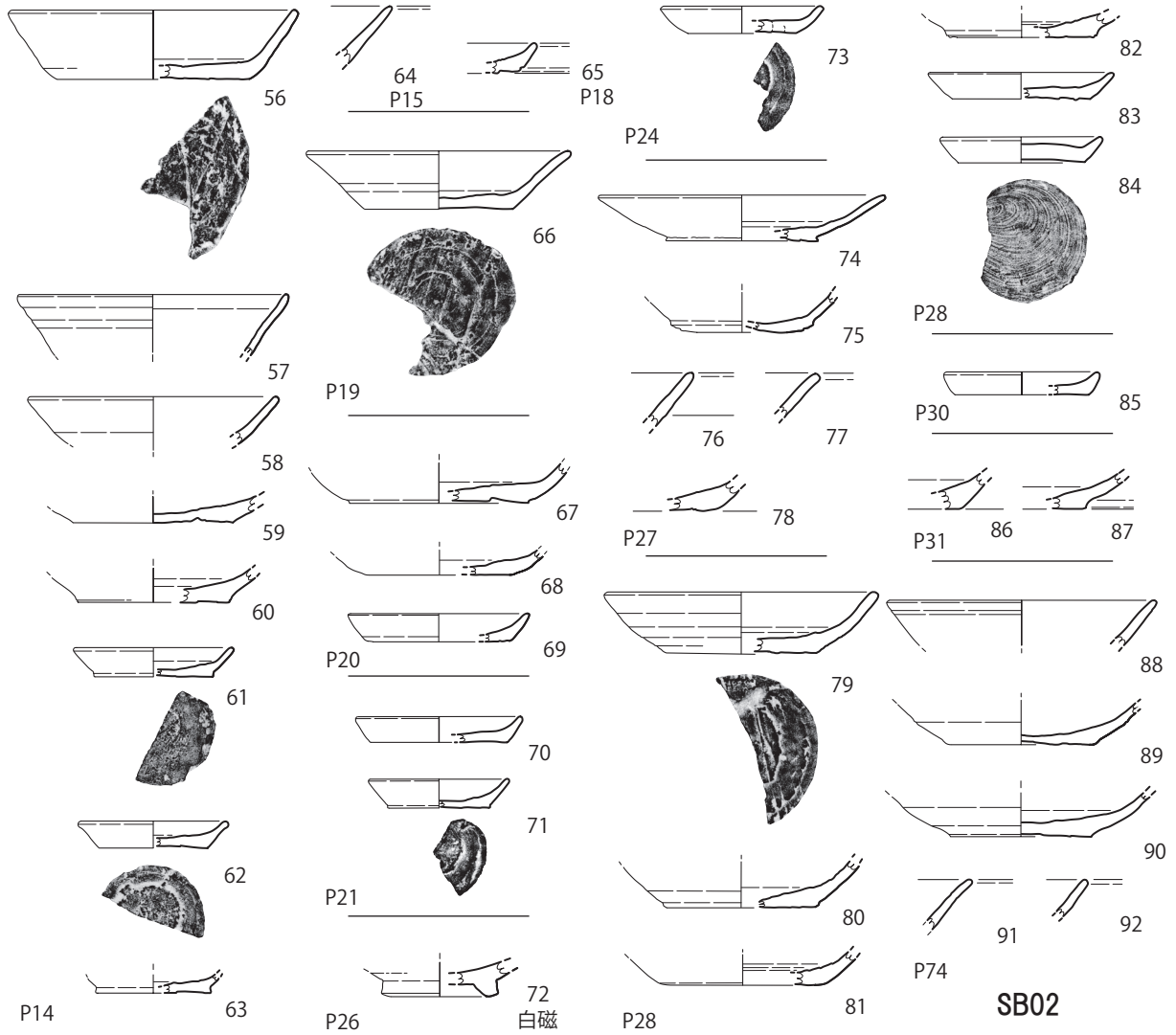


图23 SB02~05出土遺物

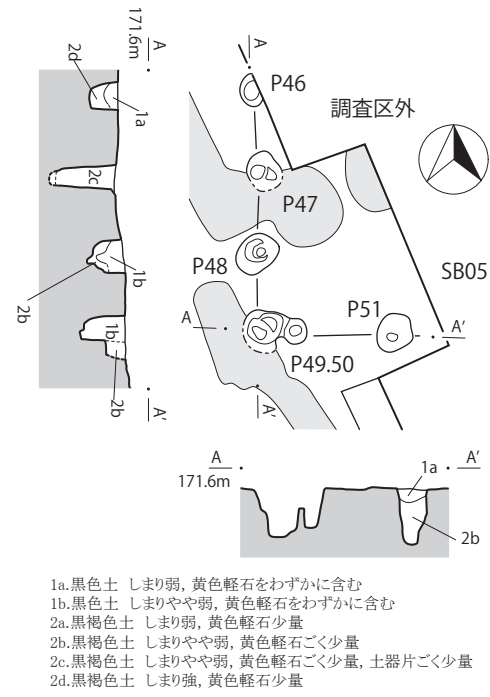
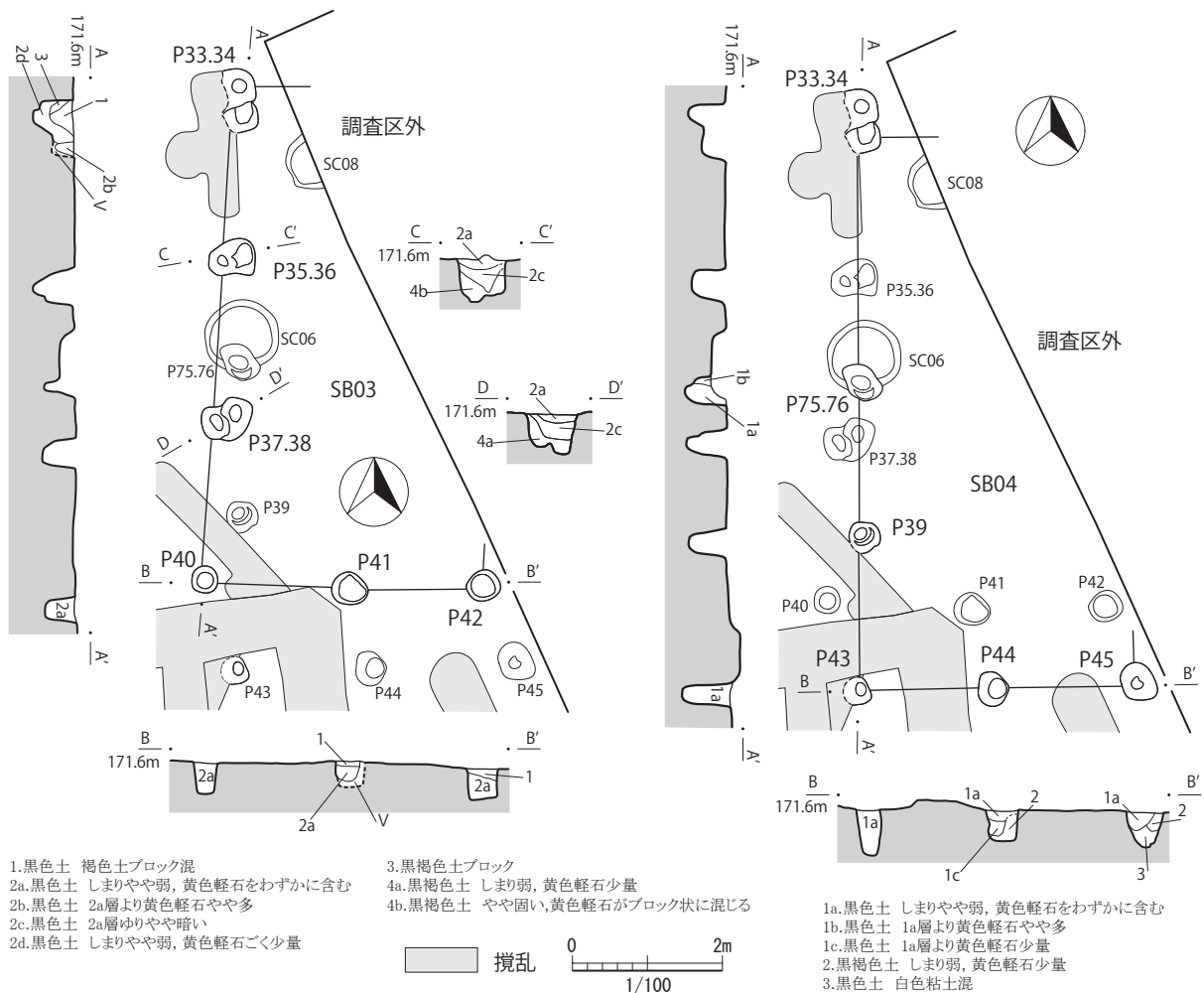


図24 SB03~05

径が 24cm 程度とやや小さい。P57から土師器片 3 点が出土した。底部切離し技法は全て糸切離しである。112.113 は小皿 2-ア類に分類される。底径が 8.4 ~ 9.0cm と広い。埋土・規格・遺物の様相より、SB01 ~ 05 との間に時期差が考えられる。

SB06 H・I-3・4 グリッドにて検出された。長軸方向は南北、桁行 2 間、梁間 2 間の総柱建物と考えられるが、P92 を含め桁行 3 間、梁間 2 間であった可能性もある。柱穴の掘方は円形で、径が 25cm 程度とやや小さい。P87 より土器小片 1 点が出土している。

Pit 出土遺物 建物の構成がなかった柱穴の出土遺物、出土柱穴が不明となった遺物である。P73 では完形小皿を含め 10 点の土師器片が出土したが、他の柱穴は数点程度の出土である。114 ~ 128 は土師器である。環形態では 114.123.124 は 1b-ア類、126 が 1b-ウ類、120 が 2-イ類、118 が 2-ウ類に分類される。小皿では 115.121.122 が 1b-ア類、127.128 が 1b-イ類、116.117 が 2-ア類に分類される。

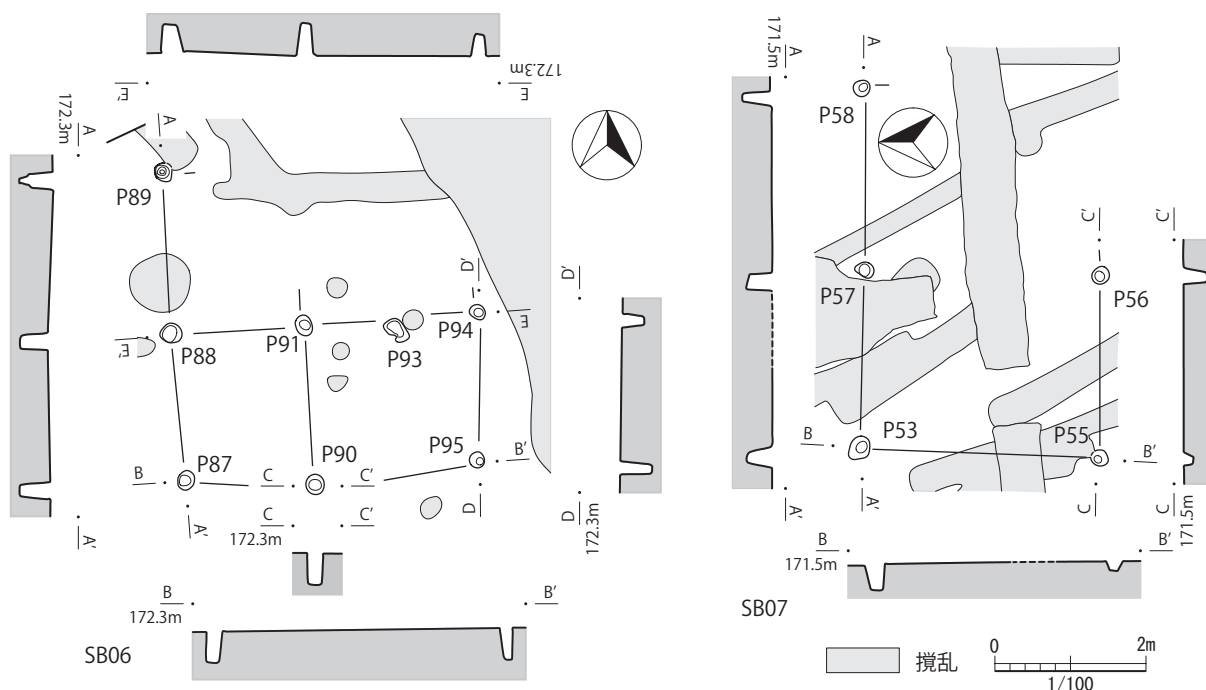


図25 SB06~07

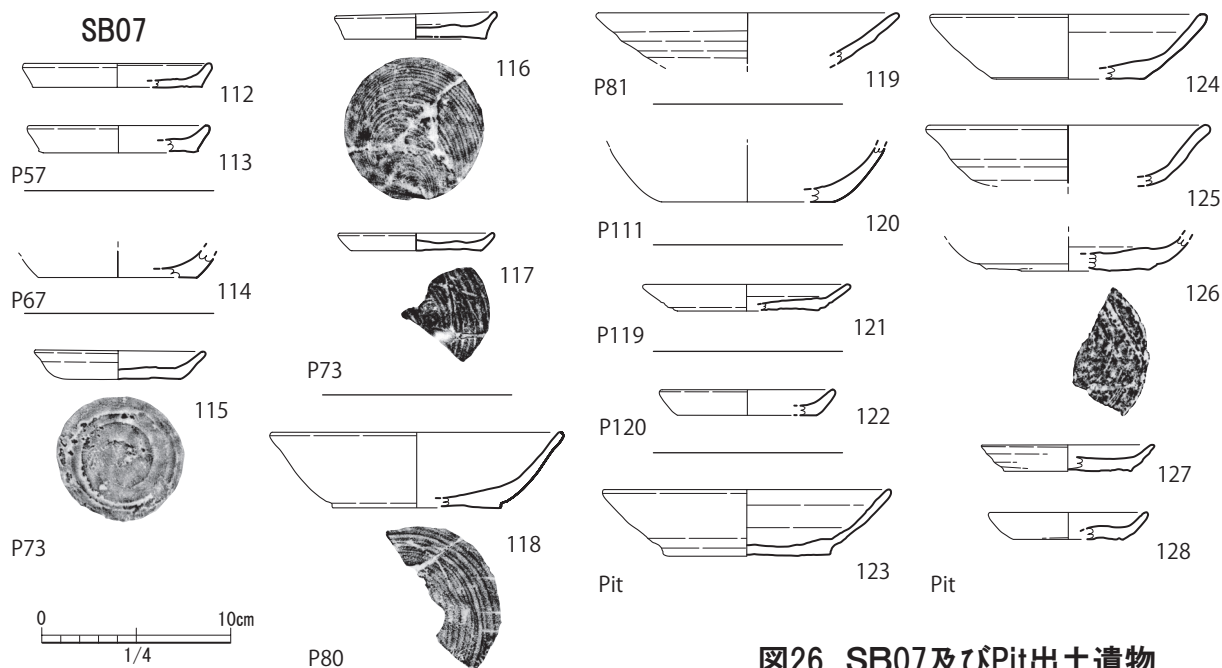


図26 SB07及びPit出土遺物

土坑 (SC 01~36: 図27~30)

C~E-4・5グリッドを中心に26基が確認された。長方形基調のSC36を除き、いずれも平面形が円形基調となる。土坑墓と考えられるSC36以外は用途不明である。径1m以上を大型、50~99cmを中型、49cm以下を小型として分類した。

大型土坑 SC04・05・12 C-4・5、D-5グリッドにて検出された。平面形は円形、箱状に近い断面形である。SC05は深さが58cmとやや深い。いずれの埋土も、黄色軽石やV層がわずかにブロック状に混じる黒褐色土・黒色土で構成される。他遺構との重複関係は、土層断面の観察よりSB01・P22→SC04と把握される。SC05では白磁片を含め46点と遺物量

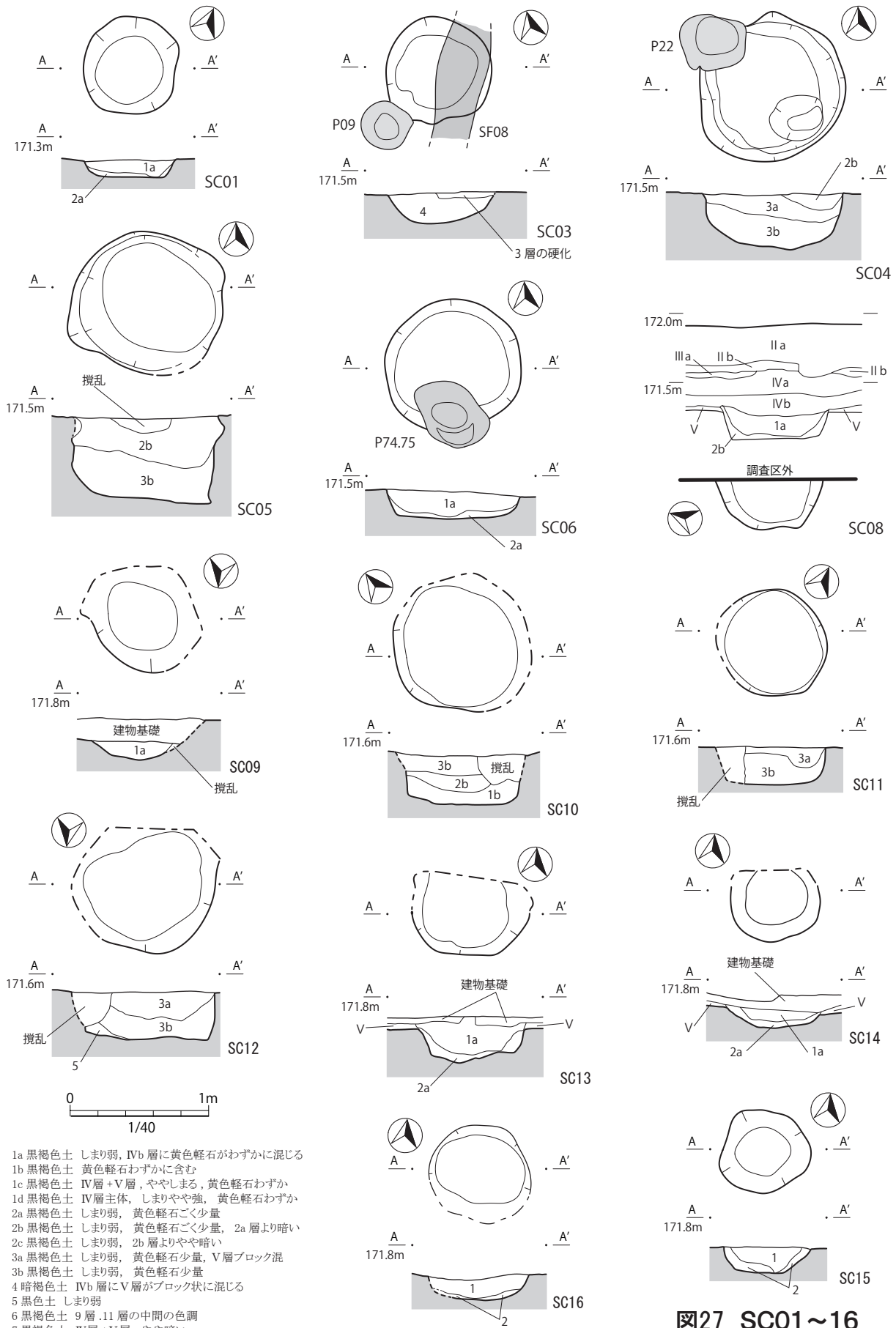
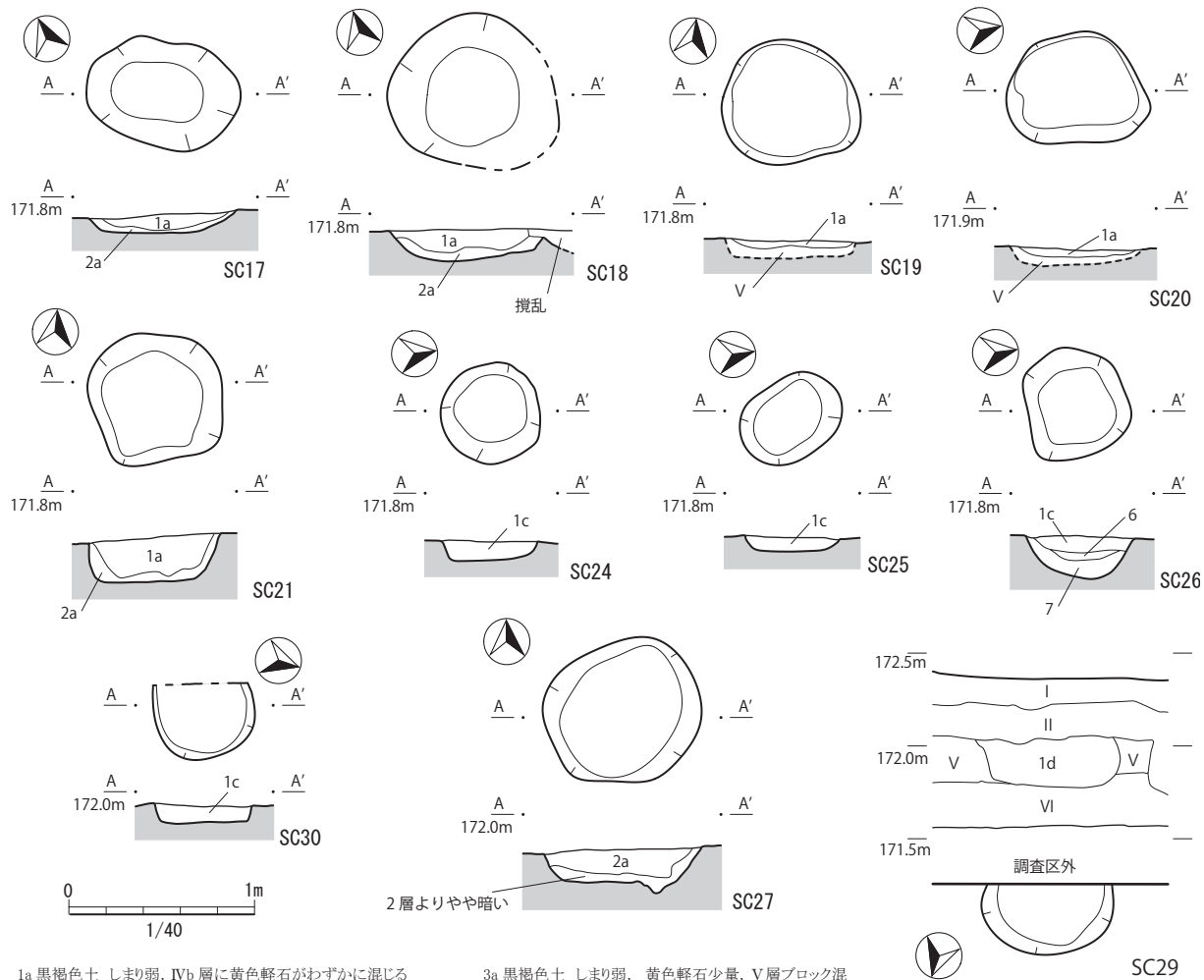


図27 SC01~16

- 1a 黒褐色土 しまり弱, IVb層に黄色軽石がわずかに混じる
- 1b 黒褐色土 黄色軽石わずかに含む
- 1c 黒褐色土 IV層+V層, ややしまる, 黄色軽石わずか
- 1d 黒褐色土 IV層主体, しまりやや強, 黄色軽石わずか
- 2a 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石ごく少量
- 2b 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石ごく少量, 2a層より暗い
- 2c 黒褐色土 しまり弱, 2b層よりやや暗い
- 3a 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石少量, V層ブロック混
- 3b 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石少量
- 4 暗褐色土 IVb層にV層がブロック状に混じる
- 5 黒色土 しまり弱
- 6 黒褐色土 9層, 11層の中間の色調
- 7 黒褐色土 IV層+V層, やや暗い



1a 黒褐色土 しまり弱, IVb層に黄色軽石がわずかに混じる
 1b 黒褐色土 黄色軽石わずかに含む
 1c 黒褐色土 IV層+V層, ややしまる, 黄色軽石わずか
 1d 黒褐色土 IV層主体, しまりやや強, 黄色軽石わずか
 2a 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石ごく少量
 2b 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石ごく少量, 2a層より暗い
 2c 黒褐色土 しまり弱, 2b層よりやや暗い

3a 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石少量, V層ブロック混
 3b 黒褐色土 しまり弱, 黄色軽石少量
 4 暗褐色土 IVb層にV層がブロック状に混じる
 5 黒色土 しまり弱
 6 黒褐色土 9層, 11層の中間の色調
 7 黒褐色土 IV層+V層, やや暗い

図28 SC17~30

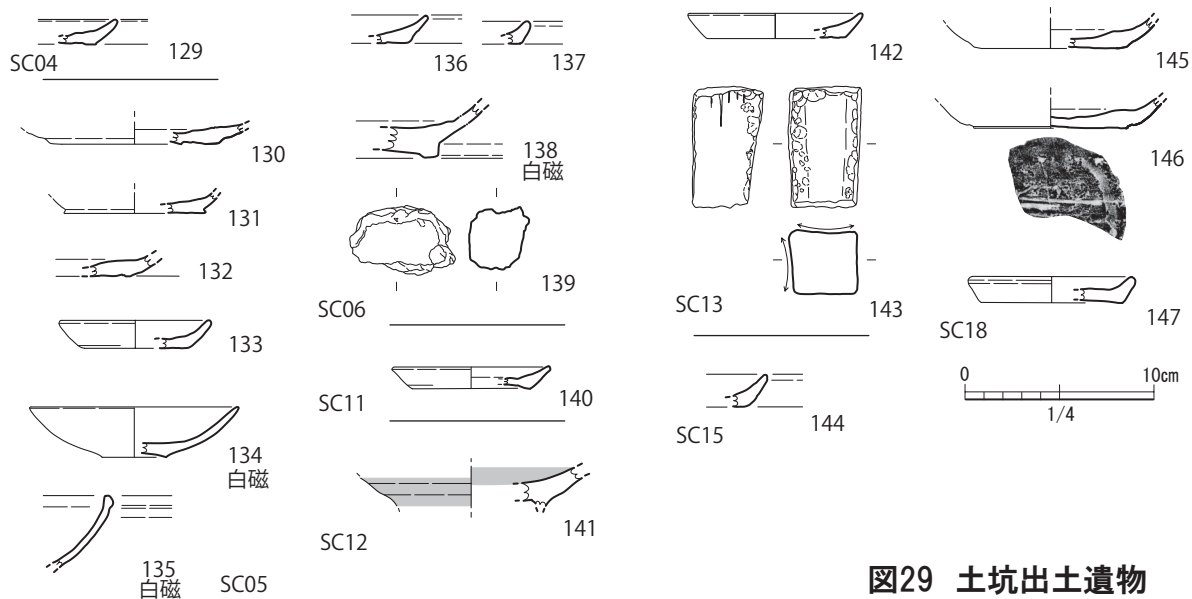
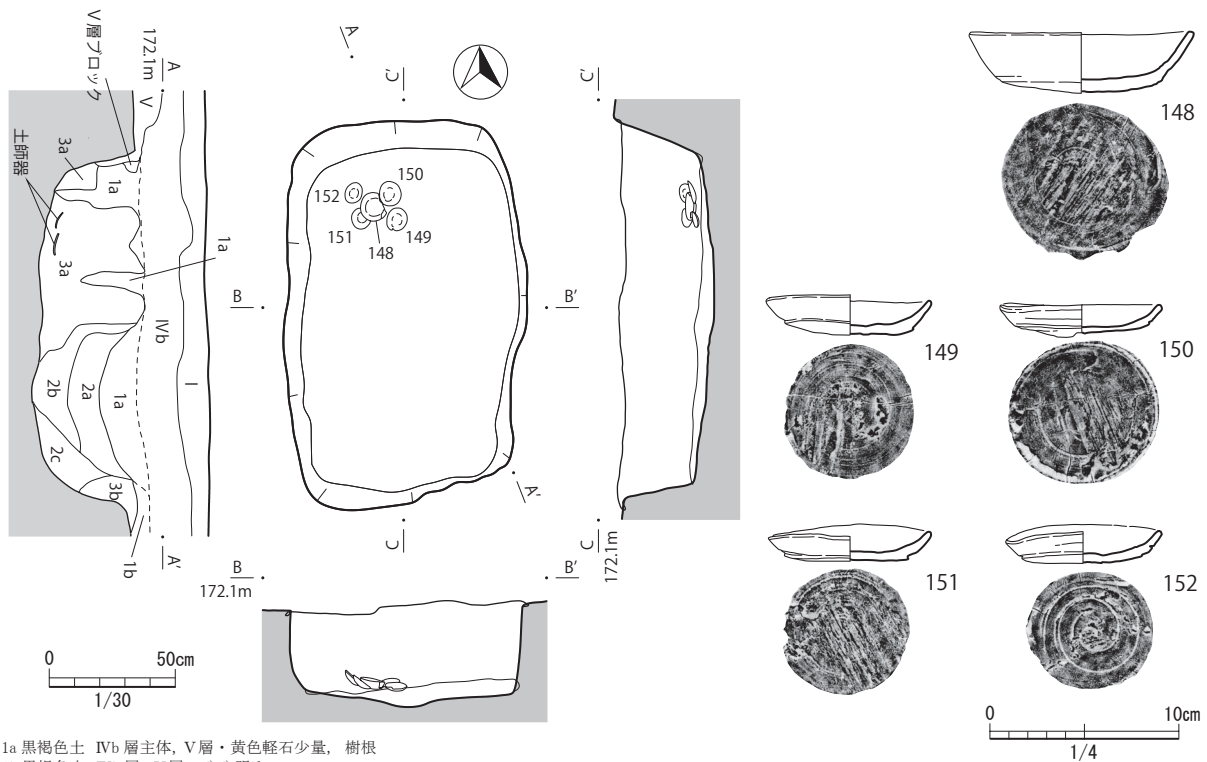


図29 土坑出土遺物



1a 黒褐色土 IVb層主体, V層・黄色軽石少量, 樹根
 1b 黒褐色土 IVb層+V層, やや明るい
 2a 黒褐色土 やややわらかい, 砂質, 黄色軽石微量, V層がブロック状に混じる, 根少量, 樹根?
 2b 黒褐色土 やや固い, 砂質, 黄色軽石微量, V層混, 根ごく微量, 樹根?
 2c 黒褐色土 砂質, 2a・b層よりやや明るい, 黄色軽石ごく微量, 樹根?
 3a 暗褐色土 やや固い, V層に黒色土が混じる, 黄色軽石少量
 3b 暗褐色土 固い, 3a層とほぼ同じだが, 黄色軽石がやや少ない

図30 SC36

がやや多い。SC04出土の129は小皿1b-イ類に分類される。SC05出土の130.131は坏1b-ウ類、132は坏1b-イ類に分類される。134.135は白磁である。134は口縁部が直口し、底部はわずかに上げ底状となる。皿VI類に該当すると考えられる。135は小さな玉縁をもつ口縁部で、椀II類に該当すると考えられる。SC12出土の141は両黒の黒色土器であり、高台付碗である。

中型土坑 SC01・03・06・08・09・10・11・13・16～21・27 調査区中位より北側を中心に検出された。SC27は南側I-3グリッドの検出である。いずれも平面形は円形で、SC01・06・08・10・11・13・16・21は断面形が箱状に近く、SC03・09・17～20・27は皿状である。SC17～20はV層が大幅に削平を受けている部分で検出されたためか、深さが数cmと非常に浅い。埋土は黄色軽石やV層がわずかにブロック状に混じる黒褐色土・黒色土で構成される。他遺構との重複関係は、土層断面の観察より、P09→SC03→SF08、P74.75→SC06と考えられた。

いずれも数点から数十点の土師器片等の遺物が出土している。SC06出土の136は小皿1b-ア類、137は2-ア類に分類される。138は削り出しの浅い高台の白磁椀底部である。椀IV類に該当すると考えられる。139は壁土と考えられる粘土塊である。植物繊維痕を多量に含む。SC13出土の142は小皿1b-ア類に分類される。143は砥石と考えられ、上面・左面に擦痕が残る。SC15出土の144は小皿1b-ア類、SC18出土の145.146は坏1b-イ類、147は小皿2-ア類に分類される。

小型土坑 SC14・15・24・25・26・29・30 調査区中位より北側を中心に検出された。SC24～30は南側H・I-2～4グリッドからの検出である。いずれも、平面形は円形で、断面形は箱型に近いSC30以外は、いずれも皿状である。SC14・15より土師器小片が出土している。

土坑墓 SC36 G-6グリッドで検出された。平面形は隅丸長方形、断面形は箱状で、東西の壁面はほぼ真直ぐ、南北の壁面はわずかに傾斜している。底面は中央部がやや低くなる。埋土は

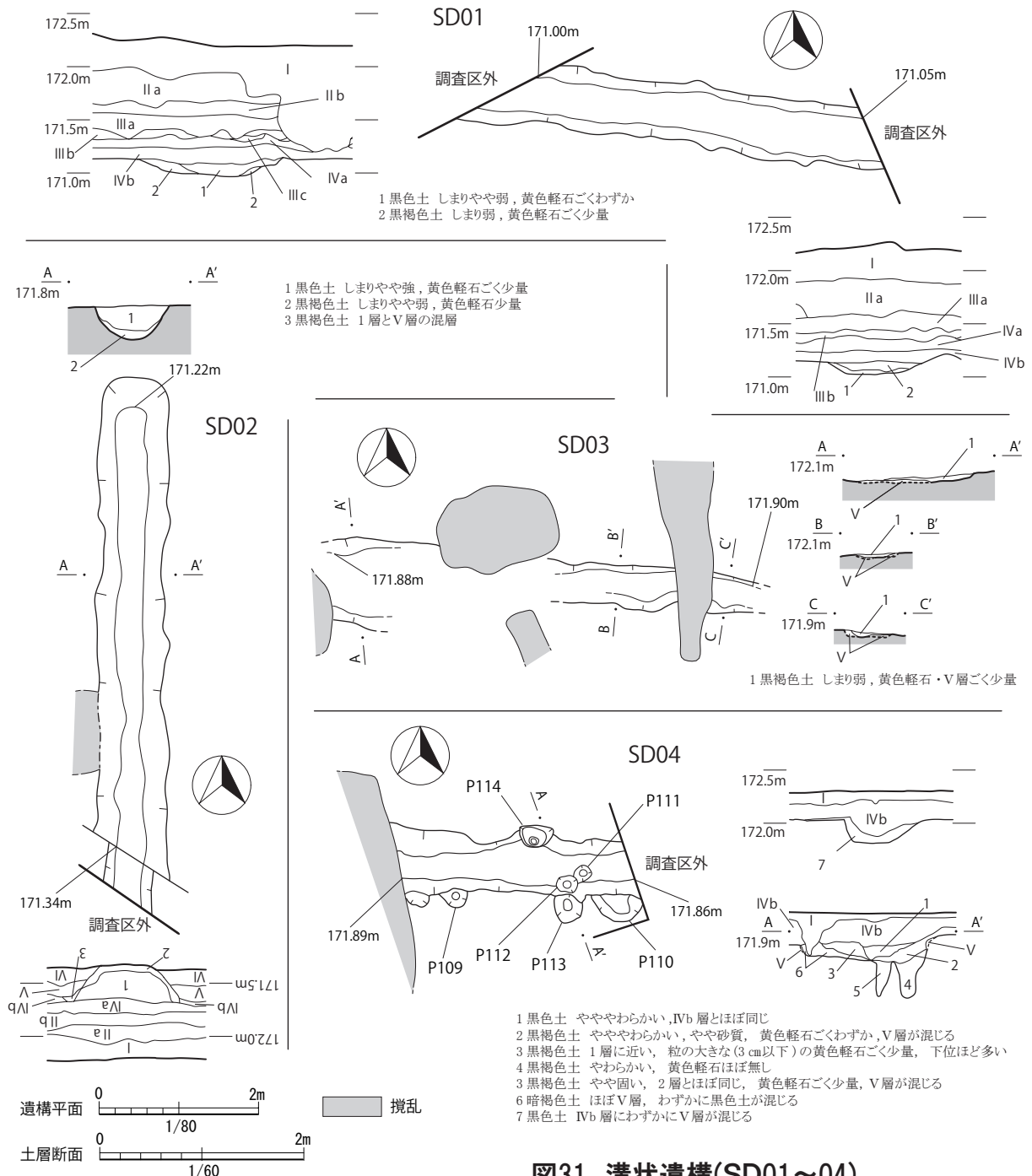


図31 溝状遺構(SD01~04)

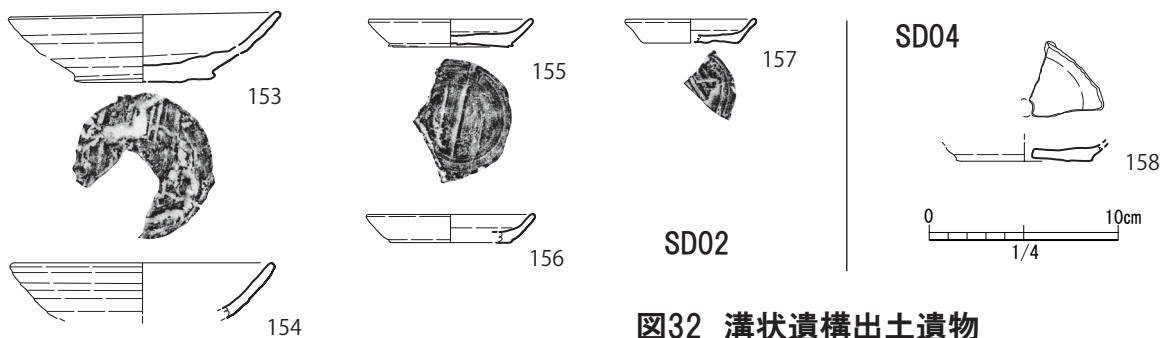
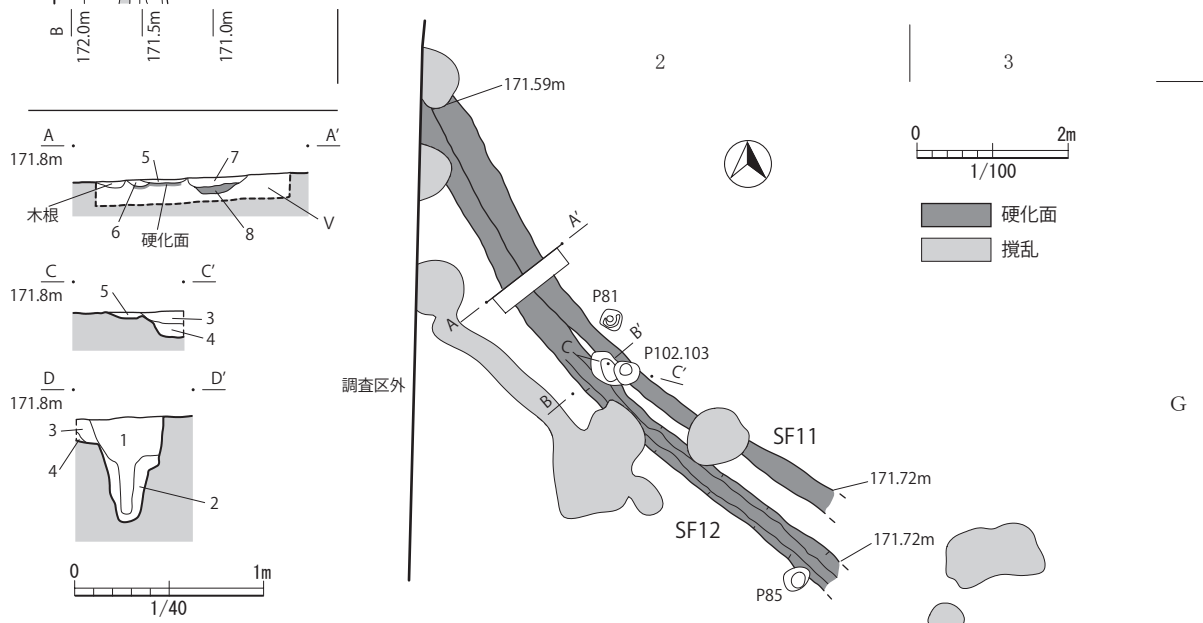
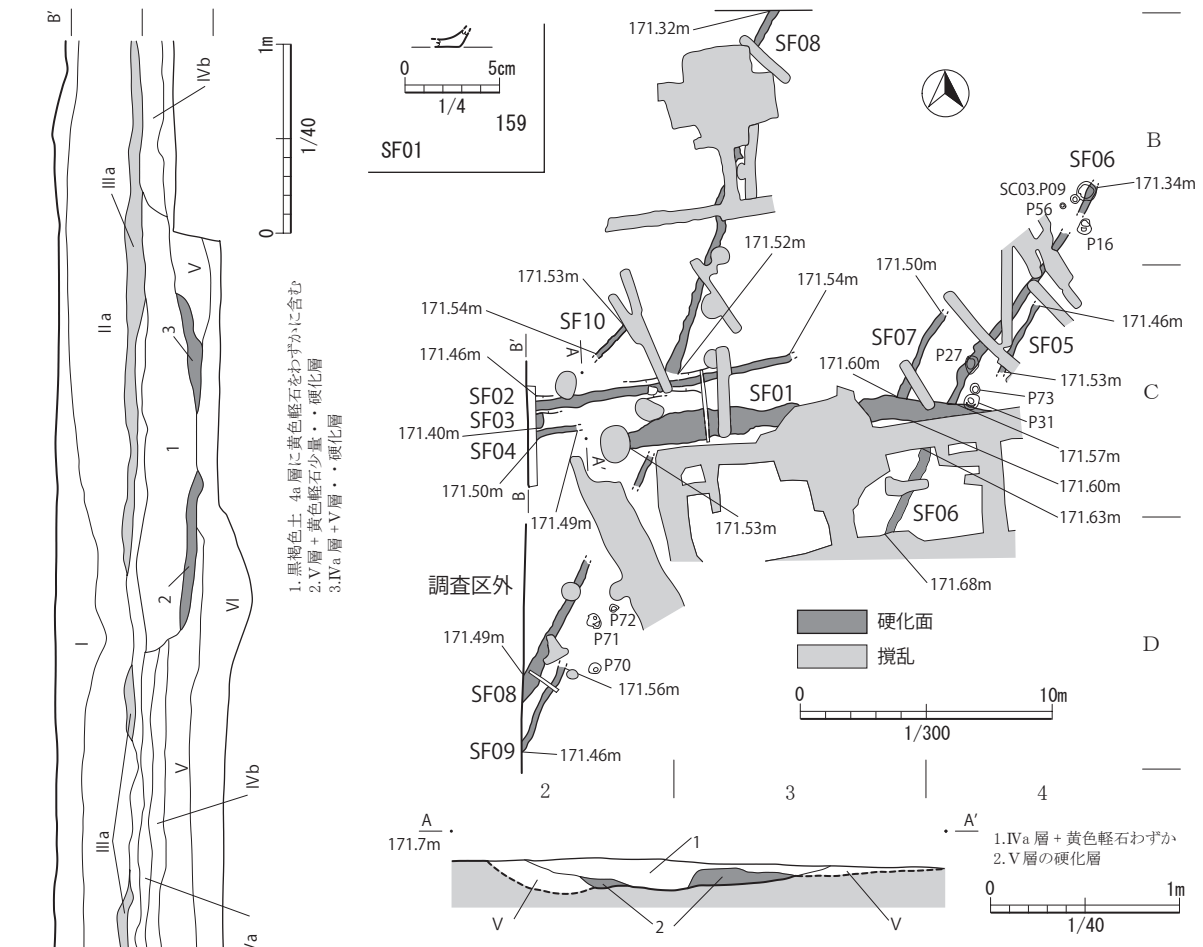


図32 溝状遺構出土遺物



1. 黒褐色土 IVa 層に黄色軽石ごく少量
2. 黒褐色土 IVa 層に黄色軽石やや多
3. 黒褐色土 やや固い, IVa 層に黄色軽石ごくわずか
4. 黒褐色土 やややわらかい, IVa 層にブロック状のV層が混じる
5. 黒褐色土 やや固い, IVa 層に黄色軽石ごくわずか, 下部に硬化面
6. 黒褐色土 やや固い, IVa 層にブロック状のV層が混じる, 下部に硬化面
7. 黒褐色土 固い, IVa 層 + V層, 黄色軽石ごくわずか
8. V層の硬化層

図33 SF01~12

V層に黒色土がブロック状に混じる土（3a層）が主体となる。1、2層は3層とIV b層とが混じる土であり、木根等の影響により形成された層と考えられる。

底面東南部、底面より数cm上にて、完形土師器5点が出土した。全て表向きで、坏を中心に置き、周囲に小皿4枚が配置される。遺物出土状況より土坑墓と考えられる。**148**は坏で1a類に分類される。歪みが少なく整った器形である。切離し時のへら跡と考えられる切れ込みが胴部下端を半周している。切離し後、全体をナデており、底面や板状圧痕の一部もナデ消されている。**149～152**は小皿1a類に分類される。いずれも切離し時のへら跡と考えられる切れ込みが胴部下端を半周している。**149～151**は板状圧痕が残る。**149**は切離し後、底面を回転ナデで調整している可能性がある。**152**は板状圧痕が無く、器形が大きく歪んでいる。

溝状遺構（SD01～04：図31～32）

SD01 A-4グリッドで検出された。幅80cm弱の真直ぐな溝で、深さ20cm程度、皿状の断面形で底面はほぼ平坦である。長軸方向は西東、両側とも調査区外へと延びる。IV b層直下に位置し、V層を掘り込む。遺物は出土していない。

SD02 E・F-2グリッドで検出された。幅90cm弱の真直ぐな溝で、断面形は台形状、深さ30～40cm程度。地形に沿うように、北→南へわずかに傾斜している。長軸方向は北南、南側は調査区外へと延びる。IV a層直下に位置し、IV b層・V層を掘り込む。埋土中より土師器片など40点弱が出土している。**153～157**は土師器である。**153**は坏1b-ウ類に分類される。**153.154**は同一個体の可能性がある。**155～157**は小皿1b-ア類に分類される。

SD03 J-5グリッドで検出された。幅40～100cm弱のほぼ真直ぐな溝で、断面形は皿状、深さが5cm以下と非常に浅い。長軸は東西、両端とも消失している。遺物は出土していない。

SD04 G-6グリッドで検出された。**SC36**に隣接する。幅1m弱のほぼ真直ぐな溝で、断面形は台形状、深さは30cm程度である。長軸は東西、東側は調査区外へ延び、西端は攪乱により破壊されている。IV b層直下に位置し、IV層を掘り込む。**P109～114**と重複するが、土層断面の観察ではPit→SDの順と考えられた。埋土中より土師器片が出土している。**158**は土師器小皿底部である。底面中央に穿孔が半分残る。

道路状遺構（SF01～12：図33）

硬化面のつながりを検出指標とした道路状遺構である。調査区のほぼ全域より計12本が確認された。検出面はV層上面である。**SF01**は硬化面の幅が1m程度、厚さ10cm程度と規模がやや大きい。その他は幅30cm以下で、厚さ数cm～数mmの硬化面が途切れながら連続する。土層断面の観察やSF02・12の断面形状より、IV a層・IV b層中より掘り込まれた溝の底面に形成された硬化面と考えられる。埋土はIV a層に近い色合いの黒褐色土層が中心で、ごくごく小さな土師器片が混じる。道路状遺構同士の切り合いは、**SF11→12**以外は不明であるが、埋土の状況より大きな時期差は無いと考えられる。その他の遺構との重複関係は**SB01・P09→SC03→SF06**、**SB02・P27→SF06**、**SF11→SF12→P102→P103**の順であり、**SF06**については相対的に新相を示している。**159**は土師器小皿2類底部である。

出土遺物（表2．図34～36）

出土遺物の総点数は7,600点余りである。遺構内出土が1,500点弱、出土座標を記録したものが約2,000点、グリッドや層一括での記録が約4,100点である。土師器類が6,200点弱と最も多い。

古代～中世と考えられる遺物はIV層を中心に、その上下層から出土した。出土座標を記録した遺物の集計は表2のとおりである。平面的には遺構が集中するC・Dグリッドに遺物も集まる傾向がある。また、遺物集中部の直下より柱穴・土坑等が検出され、集中部遺物と遺構出土遺物の接合例

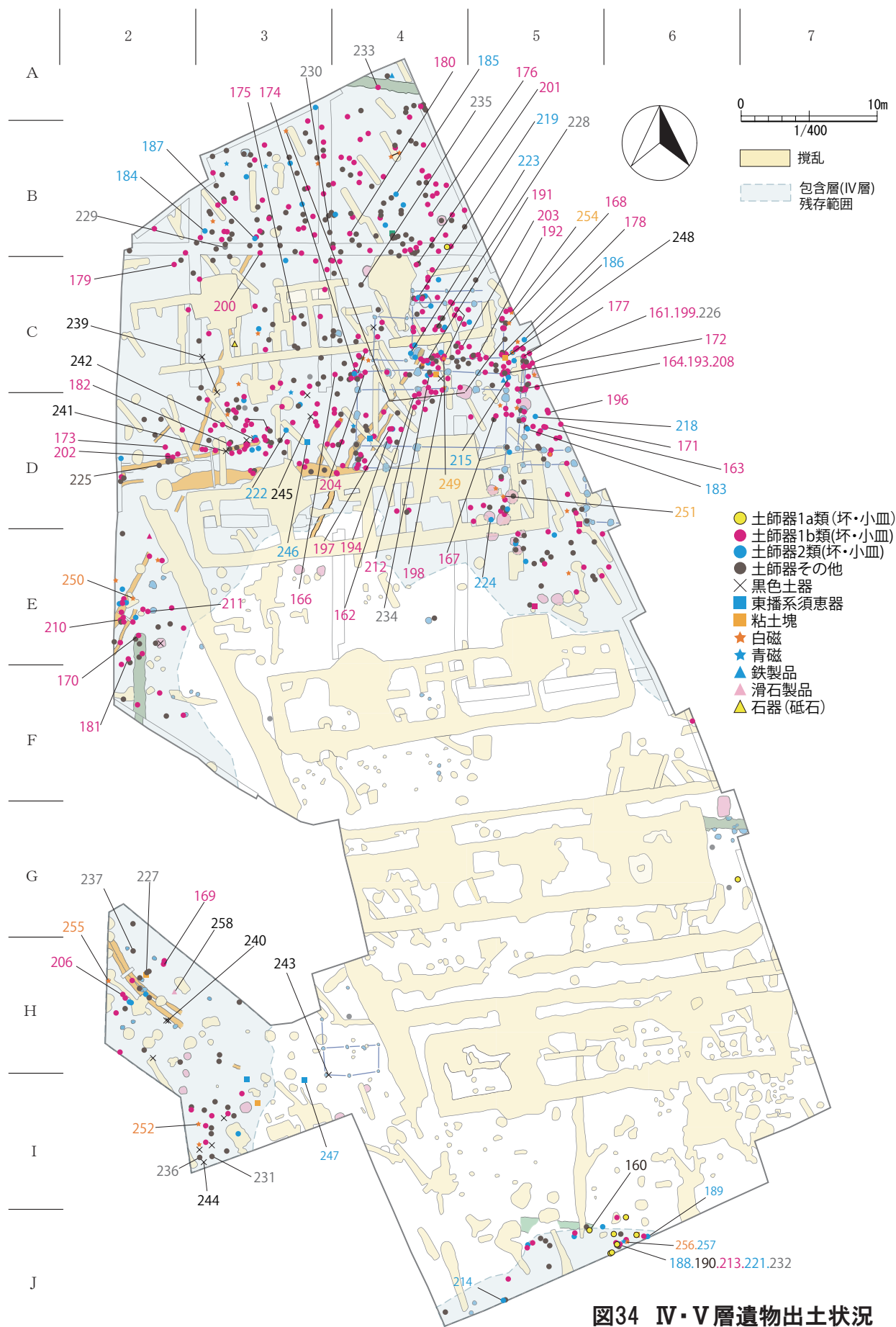


図34 IV・V層遺物出土状況

表2 I～VI層出土遺物集計

単位:個

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	備考
	土師器	黒色土器	白磁	青磁	東播系須恵器	陶器	鉄滓	鉄製品	滑石	軽石	石器	粘土塊	その他	礫	土器類	
I層	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1	-	
III層	3	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	2	
IV層	867	17	33	5	4	6	1	1	3	1	4	9	3	23	282	
V層	14	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	6	75	
VI層	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	

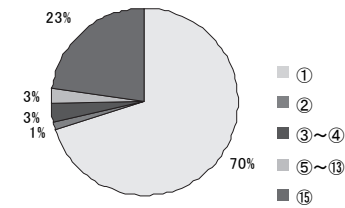
※⑮土器類は「III 2 (2) IV～IV層の遺構と遺物(縄文時代～古墳時代)」に掲載している。

※本表は出土位置の座標を記録した遺物を集計したものであり、層一括として記録した遺物は含まれていない。

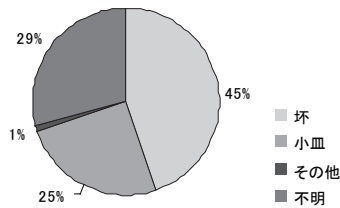
表3 土師器集計

分類	点数	器種	点数	へら	糸	不明	計	分類	点数		
①	867	坏	390	坏	172	24	11	207	坏 1a類	2	
②	17	小皿	218	小皿	151	38	19	208	坏 1b類	170	
③～④	38	その他	7	不明	76	17	57	150	坏 2類	24	
⑤～⑬	32	不明	252	計	399	79	87	565	計	196	
⑮	282	計	867	VI層出土土師器底部切離し技法集計				小皿 1a類	5		
計	1236	VI層出土土師器器種集計				小皿 1b類	146	小皿 2類	38		
※ 表6を集計。礫を除く										計	189

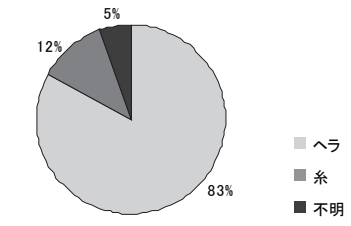
IV層出土遺物分類集計



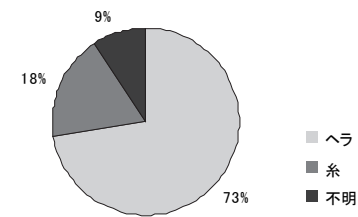
IV層出土遺物分類



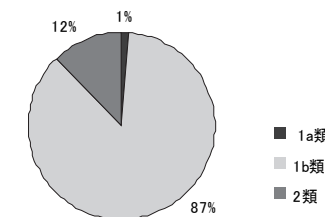
IV層出土土師器器種



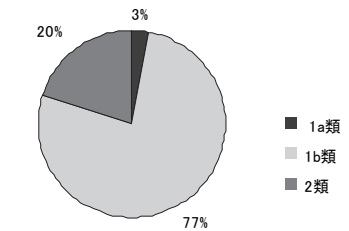
IV層出土土師器底部切離し技法(坏)



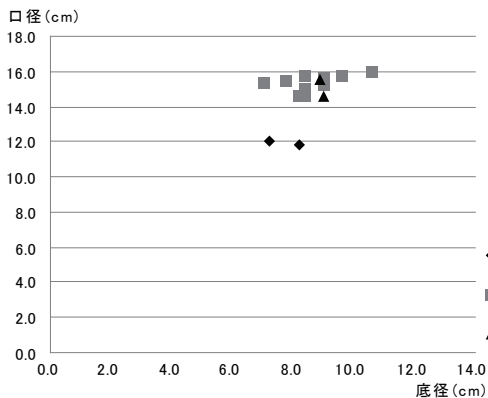
IV層出土土師器底部切離し技法(小皿)



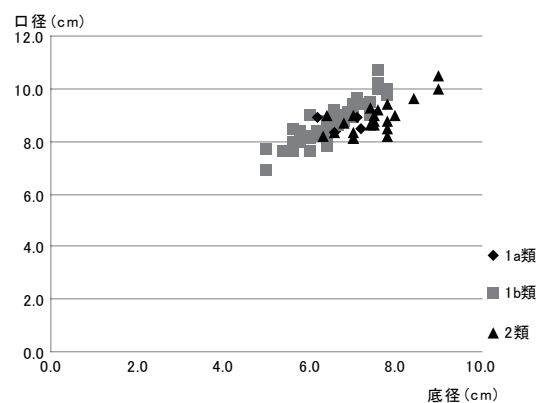
IV層出土土師器分類(坏)



IV層出土土師器分類(小皿)



掲載土師器法量分布(坏)



掲載土師器法量分布(小皿)

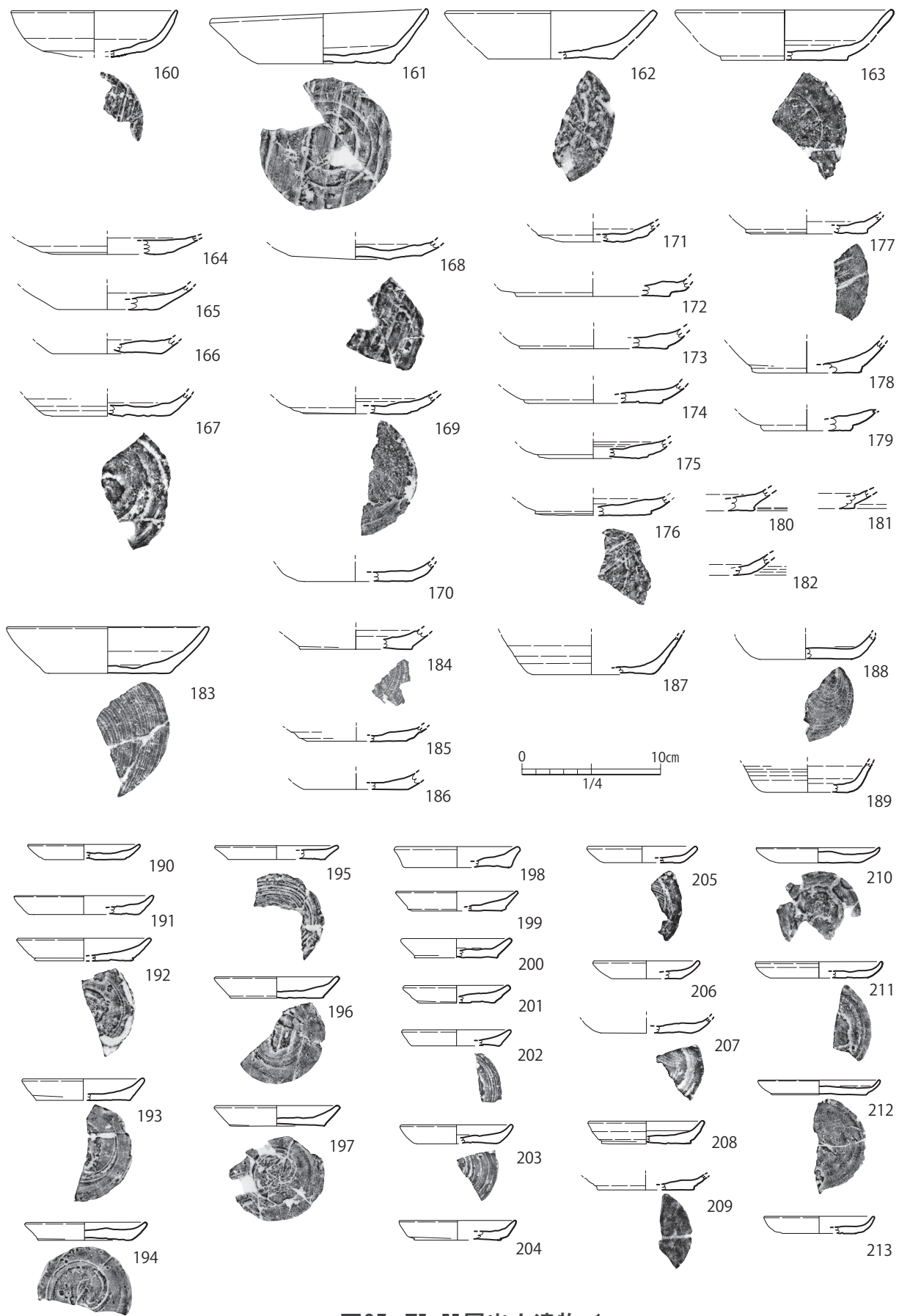


图35 IV·V层出土遗物:1

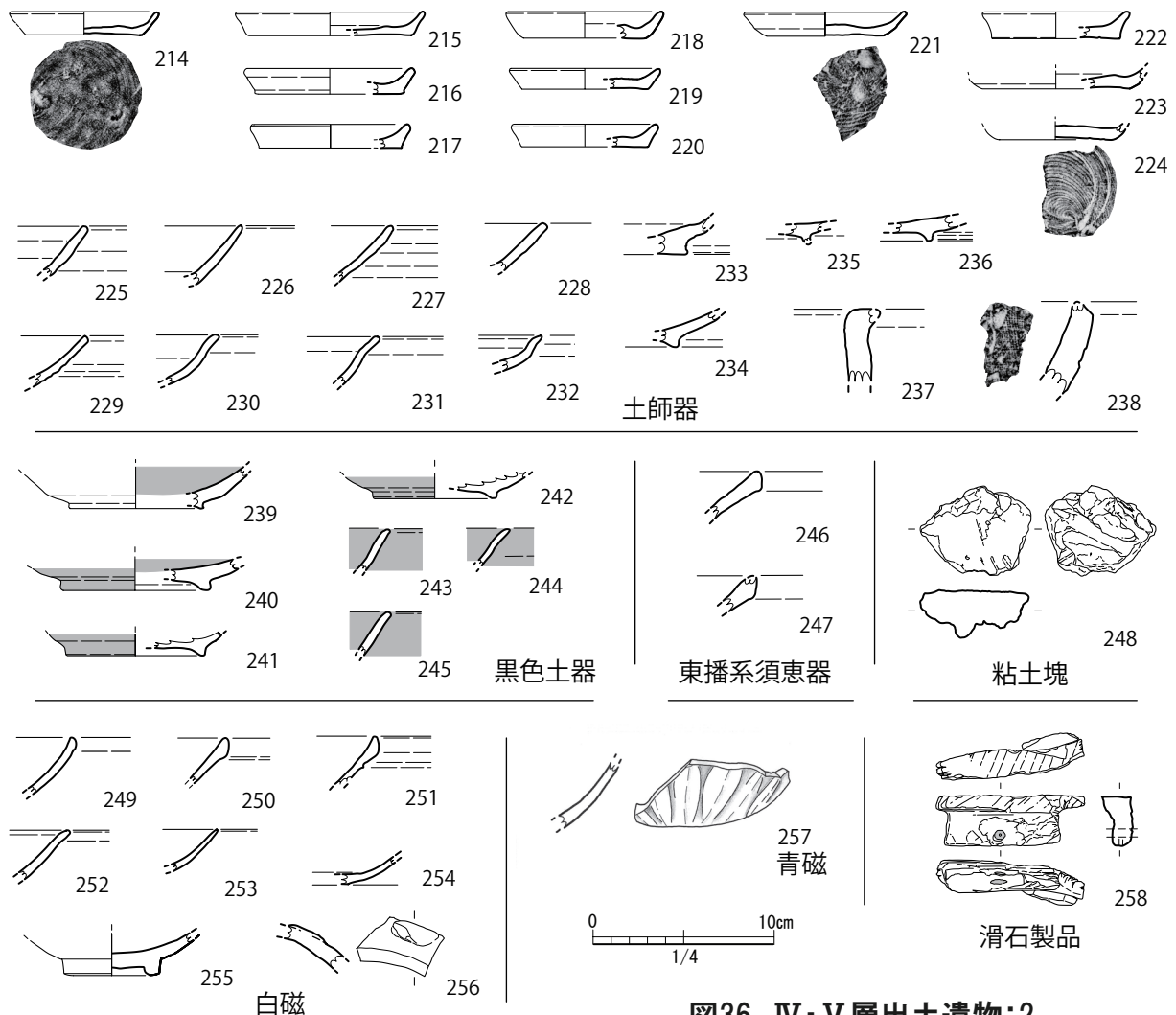


図36 IV・V層出土遺物：2

も数例みられている。

土師器 総計 6,200 点弱もの点数が出土しているが、重量 1g 以下～1g 台のきわめて小さな破片が約 2,300 点、2～5g の小破片が約 3,000 点と、小破片が 85% を占めており、接合状況は非常に悪い。IV 層出土で出土座標を記録した土師器の集計が表 3 である。器種では坏 45%、小皿 25% と坏が多い。甕は破片 5 点のみと非常に少ない。底部切離し技法には「へら起し」「糸切離し」⁽¹⁾ の 2 種があり、へら起しが坏では 83%、小皿では 73% と大多数を占める。色調は大多数が褐色系であり、ごくわずかに橙色系がみられる。底部切離し技法、色調、器形より 3 種類に分類し、底部形状などにより更に数種に細分した。

坏 1a 類 160.182 へら起し。橙色系の色調。比較的薄い器壁。底部と体部との境がやや不明瞭で、レンズ状に膨らむ底部からわずかに丸味を帯びた体部へと緩やかに続く。**SC36** にて集中的に出土した。表 3 では 2 点、全体でも坏・小皿合わせ 20 点程度と出土量はごくわずかである。

坏 1b 類 161～181 へら起し。褐色系の色調。器壁が厚く、平らな底部から口縁部に向かい大きく開く。表 3 では 170 点 87% を占める。土師器の主体となる類である。底部～体部の特徴より 3 種に細分された。**A:161.162.164～168** 底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。**I:169～171** 底部と体部との境がやや不明瞭で丸味を帯びる。**ウ:163.172～181** 薄い円盤高台状の底部から、丸味を帯びた体部が大きく開く。

坏 2 類 183～189 糸切離し。褐色系の色調。器壁がやや厚く、平らな底部から口縁部に向か

いやや開く。表3では24点12%と一定量を占める。底部～体部の特徴より2種に細分される。**ア:183～187** 底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。**イ:187～189** 底部と体部との境がやや不明瞭で丸味を帯びる。

小皿1a類 190 ヘラ起し。橙色系の色調。坏と同様、底部と体部との境がやや不明瞭で、レンズ状に膨らむ底部からわずかに丸味を帯びた体部へと緩やかに続く。坏と同様、出土量はごくわずかである。

小皿1b類 191～213 ヘラ起し。褐色系の色調。器壁がやや厚く、平らな底部から口縁部に向かい開く。底部～体部の特徴より4種に細分される。表3では146点77%と大勢を占める。**ア:191～202** 底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。口径・底径に大小の差がみられる。**イ:203～207** 底部と体部との境がやや不明瞭で丸味を帯びる。口縁部はやや内湾する。**ウ:208.209** 薄い円盤高台状の底部となる。**208**の口縁部はやや内湾する。**エ:210～213** 底部と体部との境がやや不明瞭で丸味を帯び、口縁部は内湾する。器壁はごく薄く、器高が低い。

小皿2類 214～224 糸切離し。褐色系の色調。器壁がやや厚く、平らな底部から口縁部に向かい、やや開く。坏2類と同様に2種に細分される。**ア:214～220** 底部と体部の境が明瞭で、体部は直線的に開く。**イ:221～224** 底部と体部との境がやや不明瞭で丸味を帯びる。

底部外面の調整には、ヘラ起しでは板状圧痕が残る例が多いが、きれいにナデ消す例(177など)やらせん条痕の幅が狭い例(195.202など)もみられる。糸切離しでは圧痕の残る例はみられない。

225～232は坏もしくは高台付碗の体部～口縁部である。**225～229**はやや内湾する。**230～232**は口縁下部で屈曲し、口縁部が外反する。**233～236**は高台付碗と考えられる。**235.236**は低い輪高台である。いずれもミガキは施していない。**237**は甕口縁部と考えられる。**238**は内部に布目が残る。製塩土器と考えられる。

黒色土器 239～245 総計30点が出土している。内黒・両黒の内訳は両黒が18点とやや多い。確認された底部片はすべて低い高台の高台付碗であった。

その他の遺物 246.247は東播系須恵器片口鉢口縁部と考えられる。**248**は壁土と考えられる粘土塊である。胎土に植物繊維痕を多量に含む。**249～256**は白磁である。総計70点が出土している。**249**は小さな玉縁をもつ。椀Ⅱ類に該当すると考えられる。**250.251**は肉厚でやや太い玉縁をもつ。椀Ⅳ類に該当すると考えられる。**252.253**は口縁部～体部であり、口縁部は真口、体部はやや丸味を帯びる。**254**はやや上げ底状の底部である。**253.254**は皿Ⅵ類に該当すると考えられる。**255**は削り出しの浅い高台の椀底部である。椀Ⅳ類に該当すると考えられる。**256**は四耳壺の肩部と考えられる。**257**は鎬蓮弁文を施す青磁椀体部である。椀Ⅱ－b類に該当すると考えられる。青磁片は総計7点を確認された。**258**は石鍋転用と考えられる滑石製品である。断面が丁字形をなし、下に突き出した分には炭化物が付着、釘様の鉄製品が水平・垂直にはめ込まれている。石鍋の破損部にはめ込む補修具(パレン状製品)の可能性が考えられる。

(1) 大川清 1996「土器の名どころ」『日本土器事典』雄山閣

(4) Ⅲ～Ⅳ層の遺構(中世)

畠跡(図37・図版1)

A・B-2～5グリッドにて検出された。文明軽石層(Ⅲ層)を検出指標とした畠状遺構である。

Ⅲ層は上からⅢa層・文明軽石を含む黒灰褐色砂質土(層厚20cm程度)、Ⅲb層・文明軽石を主体に上下の黒灰褐色土、黒色土が混じる層(層厚10cm以下)、Ⅲc層・文明軽石を含む黒褐色砂質土層(層厚数cm)に細分される。Ⅲa層は文明軽石降下災害復旧後の耕作土層と考えられ、Ⅲb層は文明軽石を主体としながらも、上下層が混ざる部分もみられるため、降下軽石の一次堆積層ではなく、復旧により生じた層と考えられた。Ⅲc層はⅣa層に文明軽石が混じる層であり、復旧過程の形成層もしくはⅢb層を形成する大規模噴火の前に降下した軽石⁽¹⁾を含む層と考えられる。

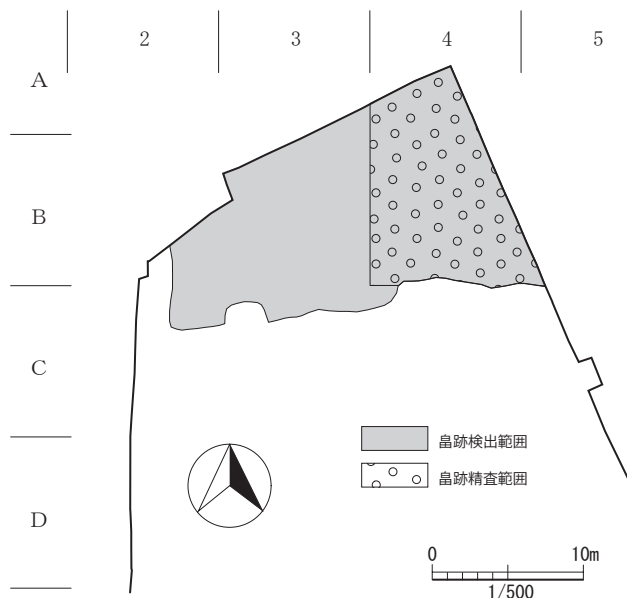


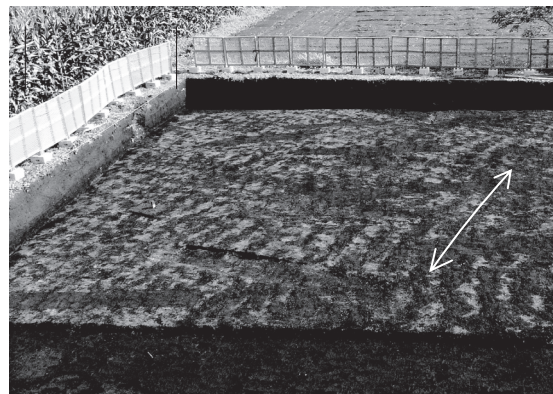
図37 III・IV層遺構検出範囲

調査はA-4グリッドにて、全体を薄く剥ぎ取りながら掘り下げ、III b層上面、III b層中位、III b層下位、IV a層上面の4面において検出状況を写真にて記録した。

III b層上面では、幅30cm、長さ2~3m程度の文明軽石の「すじ」(III b層)が東西方向に縞状となって検出された。この「すじ」の周囲はIII a層であり、文明軽石の「すじ」が復旧後に形成された畝の基部、その周囲が畝間と考えられた。この「すじ」は、5cm程下のIII b層中位にて消失し、III b層下位より南北基調の「すじ」(III b・c層)へと変化し始め、最終検出面であるIV a層上面では、南北方向を基調とした幅30cm程度のごく薄い縞状の堆積となる。最終検出された遺構は、復旧痕もしくは降下前の畝間の2種と考えられた。

自然科学分析ではIV a・b層からIII c層にかけては稲作(陸稲)の存在が推定されたが、III a層からは認められていない。

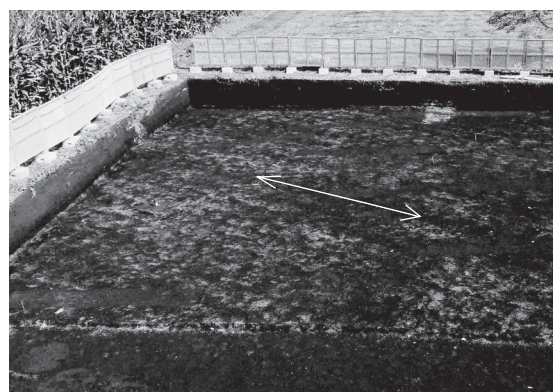
(1) 杉山真二氏(株式会社古環境研究所)のご教授による。



III b層上面



III b層中位



III b層下位



IV a層上面

図版1 III・IV層畝跡

表4 掘立柱建物跡

No.	主軸	構造	柱間数(桁×梁)	規模(m)	桁柱間(m,平均標準偏差)	梁柱間(m)	面積(m ²)	柱穴径(cm)	柱穴深(cm)
SB01	N-90° -E	側柱・一面庇	3×3	身舎・6.7×4.0 庇・(4.4)×0.9	身舎・2.2±0.1 庇・2.2±0.4	身舎・2.0±0.01 庇・0.9	身舎・(26.3)復元 庇・6.2	37±6 30±2	62±6 49±14
SB02	N-90° -E	側柱・二面庇	5×4	身舎・11.0×4.2 北庇・11.0×1.3 南庇・11.0×1.4~1.6	身舎・2.2±0.1 北庇・2.2±0.04 南庇・2.3	身舎・西2.1±0.2 東4.2 北庇・1.3±0.01 南庇・1.5±0.1	身舎・45.9 庇・14.2 庇・16.6	56±10 55±7	76±14 66±13
SB03	N-10° -E	側柱	3×2?	(6.6)×(3.7)	2.1±0.1	1.8±0.1	(24.3)復元	(65)~36	24~62
SB04	N-1° -E	側柱	3×2?	(7.4)×(3.7)	2.5±0.7	1.8±0.05	(26.9)復元	(53)~(39)	25~63
SB05	N-20° -E	側柱	3×2?	(3.2)×(1.8)	1.1±0.01	1.8	-	(60)~(39)	37~82
SB06	N-11° -W	総柱?	2×2?	(4.1)×(3.9)	2.1±0.1	2.1±0.1	(16.0)復元	25±3	39±6
SB07	N-90° -E	側柱	2×1?	(4.8)×(3.1)	2.4±0.05	3.1	(15.3)復元	24±2	29±9

表5 土坑

※底部 = 出土土師器底部切離し：1.ヘラ/2.糸/3.ヘラ.糸

No.	長径	短径	深さ	底部	備考	No.	長径	短径	深さ	底部	備考
1	0.69	0.67	0.12		土師器小片	16	(0.74)	(0.73)	0.13	3	土師器小片・粘土塊
3	0.75	0.70	0.19	1	土師器小片	17	0.81	0.54	0.10	1	土師器小片・粘土塊
4	1.10	1.00	0.37	1	土師器小片・粘土塊・鉄片	18	(0.93)	(0.79)	0.18	3	土師器小片
5	1.05	1.01	0.58	3	土師器小片・粘土塊・鉄滓	19	0.72	0.69	(0.06)		
6	0.96	0.77	0.20	3	土師器小片・白磁小片・粘土塊	20	(0.73)	(0.54)	(0.06)		
8	0.72	(0.37)	0.23	1	土師器小片	21	0.70	0.70	0.25		土師器小片・礫
9	0.87	0.75	0.13	3	土師器小片	24	0.53	0.56	0.10		
10	0.98	0.97	0.34	3	土師器小片・礫	25	0.58	0.42	0.08		
11	0.79	0.74	0.27	3	土師器小片	26	0.64	0.61	0.23		
12	(1.14)	(1.06)	0.36	1	土師器小片・黒色土器・粘土塊	27	0.85	0.79	0.24		
13	(0.87)	(0.71)	0.34		土師器小片・磁石	29	0.69	(0.38)	0.28		
14	(0.64)	(0.49)	0.12	1	土師器小片	30	0.55	(0.37)	0.10		
15	0.64	0.62	0.18	1	土師器小片	36	1.52	0.96	0.67		土坑墓・土師器

表6 溝状遺構

単位:cm

No.	主軸	長さ(m)	上幅	下幅	深さ	傾斜	備考
SD01	N-98° -E	4.7+	68~77	42~56	7~16	1% (0.6°)	
SD02	N-1° -E	6.5+	74~89	20~36	29~39	1.9% (1°)	土師器片,土器片,礫/底部ヘラ.糸
SD03	N-92° -E	5.3+	38~100	20~87	1~5	0.9% (0.5°)	
SD04	N-91° -E	3.0+	59~90	28~57	11~33	1% (0.6°)	土師器片,土器片

表7 柱穴

単位:cm

No.	長径	短径	深さ	底部	備考	No.	長径	短径	深さ	底部	備考	No.	長径	短径	深さ	底部	備考	
1	32	23	52	3	SB01/土師器小片	41	48	43	24	SB03	82	28	26	40				
2	27	20	34	3	SB01/土師器小片	42	45	42	40	SB03	83	33	29	57				
3	32	26	62	1	SB01/土師器小片	43 (39)	(38)	63		SB04	85 (37)	(29)	42				SF12と重複	
4	41	30	15		P5と重複	44	47	41	41	1	SB04/土師器小片,土器小片,粘土塊,礫	86	31	25	60			
5	33	-	67	3	SB01/P4と重複/土師器小片	45	52	44	40	1	SB04/土師器小片,粘土塊	87	26	22	41			SB06/土器小片
6	35	30	64	3	SB01/土師器小片	46 (43)	(28)	37		SB05/土師器小片	88	29	26	31			SB06	
7	43	41	62		SB01/土師器小片	47 (53)	(50)	82	2	SB05/土師器小片	89	26	24	45			SB06	
8	39	35	67	3	SB01/土師器小片	48	60	45	46	SB05	90	26	25	42			SB06	
9	33	31	56	3	SB01/土師器小片,軽石	49 (60)	(59)	60		SB05/P50と重複	91	28	22	43			SB06	
10	28	26	59	3	SB01/土師器小片	50 (39)	(30)	50	2	SB05/P49と重複/土師器小片	92	24	21	32				
11	33	32	74	3	SB01/土師器小片	51	51	48	71	1	SB05/土師器小片	93	35	23	24			
12	51	37	57	1	SB01/土師器小片	52	66	56	15	土師器小片	94	22	18	29			SB06	
13	36	34	54		SB01/土師器小片,礫	53	34	28	33	SB07	95	21	20	42			SB06	
14	50	35	71	3	SB02/土師器小片	54	52	45	6	土師器小片	96	32	32	63				
15	56	41	75	1	SB02/土師器小片,粘土塊	55	23	21	13	SB07	97	32	32	7				
16	61	50	86		SB02/土器小片	56	24	21	31	SB07	100	28	24	30				
17	(52)	(44)	62	1	SB02/土師器小片	57	27	19	29	2	SB07/土師器小片	101	47	40	61			
18	43	39	52	1	SB02/土師器小片	58	22	22	37	SB07	102 (36)	(32)	51				SF11.12と重複	
19	50	39	47	1	SB02/土師器小片	59	24	23	23		103 (55)	(36)	10					
20	48	46	71	1	SB02/土師器小片	60	33	27	10		105	26	24	55				
21	-	-	(16)	3	SB02/土師器小片,礫	61	28	24	15		106	24	20	23				
22	50	44	69		SC04と重複/土師器小片,粘土塊	62	31	29	25		109	36	(26)	18			SD04と重複/土器小片	
23	(43)	(35)	47		SB02	63	28	24	27		110	68	(36)	45			SD04と重複	
24	55	54	57	1	SB02/土師器小片	64 (34)	29	20			111 (22)	19	11	3			SD04.P112と重複/土師器小片	
25	45	43	82		SB02/土師器小片	65	36	32	27	土師器小片	112	28	21	34			SD04.P111と重複/土器小片,礫	
26	65	39	95		SB02	66 (26)	22	40			113 (38)	37	10				SD04と重複/土師器小片	
27	73	53	86	3	SB02/土師器小片多量,土器片,礫	67	61	61	9	2	土師器小片	114 (45)	(29)	29			SD04と重複	
28	53	51	83	3	SB02/土師器小片多量,礫	68	47	45	11		115	28	29	27				
29	(64)	(58)	77		SB02/土師器小片	69	37	28	26		116	44	40	25				
30	(49)	38	88	2	SB02/土師器・黒色土器小片	70	51	44	71		117	24	21	28				
31	62	55	75	1	SB02/土師器小片多量,礫	71	63	53	64		118	35	(25)	52				
32	52	48	57	1	SB02/土師器小片	72	37	32	24	土師器小片	119	28	24	9				
33	(50)	(40)	55	3	SB03/P34と重複/土師器小片,軽石	73	43	38	17	3	土師器小片	121	24	18	18			
34	(43)	(35)	25	3	SB04/P33と重複/土師器小片,軽石	74	65	49	70	3	SB02/土師器小片多量	122	21	18	33			
35	(65)	(53)	45	1	SB03/P36と重複/土師器小片,粘土塊	75 (53)	(41)	57	1	SB04/P76と重複/土師器小片,土器小片	123	19	16	24				
36	(65)	(53)	55	1	SB03/P35と重複/土師器小片,粘土塊	76 (53)	(41)	40	1	SB04/P75と重複/土師器小片,土器小片	124	23	22	36				
37	(45)	(34)	48	3	SB03/P38と重複/土師器小片	78	35	32	58		土器小片,土師器小片	125	17	16	11			
38	(51)	(39)	62	3	SB03/P37と重複/土師器小片	79	31	30	49			126	29	22	20			
39	(42)	41	50	3	SB04/土師器小片,滑石製品,軽石,硯	80	36	36	63	2	土師器小片							
40	36	36	41		SB03/土師器小片,白磁小片,粘土塊	81	31	30	52		土師器小片							

表8 出土遺物：1

上・土器等／下・石器等 単位：cm

No.	遺構/層位	材質	器種	口径長さ	底径幅	器高厚さ	分類	色調	胎土	整形・調整	備考	取上番号
1	XⅢ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	茶褐色	1mm以下の白・灰・赤褐色粒	内：ナデ/外：ナデ	-	1164
2	XⅡ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	黒褐色	1mm以下の白・灰色粒/2mm以下の赤褐色粒含む	内：ナデ・ケズリ/外：ナデ	-	1140
3	XⅢ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	茶褐色	1mm以下の白・灰色粒/2mm以下の赤褐色粒含む	内：ナデ・ケズリ/外：ナデ	-	1166
4	XⅢ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	茶褐色	1mm以下の白・灰色粒/2mm以下の赤褐色粒含む	内：ナデ・ケズリ/外：ナデ	-	1168
5	XⅡ・XⅢ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	茶褐色	1mm以下の白・灰・赤褐色粒	内：ナデ/外：ナデ	-	113,511,831,254
6	XⅢ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅰ	黒褐色	1mm以下の白・灰・赤褐色粒	内：ナデ・ケズリ/外：ナデ	-	1174,1177,1180,3tr_1
7	XⅡ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	早期Ⅲ	黒灰色	2mm以下の白色粒多量/雲母	内：ナデ/外：貝殻条痕→貝殻刺突	-	1141
8	XⅣ層	石器	石鏃	1.8	1.6	0.3	-	-	-	-	下部欠損・黒曜石	1249
9	V層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	茶褐色	1mm以下の白色・黒色粒・褐色粒多	内：ナデ/外：剥落	-	567,568
10	V層	縄文土器	皿	-	-	-	-	茶褐色	微細な白・黒色粒やや多/雲母	内：ナデ・刺突文/外：ナデ	-	1284
11	Ⅵ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	暗茶褐色	2mm以下の白色粒やや多	内：ナデ/外：ナデ	-	907
12	V層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	暗茶褐色	1mm以下の白色粒やや多/雲母	内：粗いミガキ/外：粗いミガキ	-	1107
13	Ⅳ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	黒褐色	2mm以下の白・赤褐色粒	内：ミガキ/外：ミガキ	-	694
14	V層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	茶褐色	1mm以下の白・灰色粒含む	内：ナデ・ケズリ/外：沈線・摩消縄文・刺突文	-	1090
15	V層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	黒褐色	微細な白色粒わずか	内：ミガキ/外：ミガキ	精製土器	1293
16	Ⅳ層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	黒褐色	微細な白色粒微量	内：ナデ/外：ミガキ	精製土器	885
17	-	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	黒褐色	1mm以下の白・黒色粒含む	内：ナデ/外：ミガキ	精製土器	一括
18	Ⅳ層	縄文土器	浅鉢	-	-	-	-	茶褐色	1mm以下の白・黒色粒やや多	内：ナデ/外：回線文・刺突文	孔列土器	250
19	Ⅳ層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	茶褐色	2mm以下の白・灰色粒やや多	内：ナデ/外：ナデ	-	1055
20	V層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	茶褐色	1mm以下の白・黒色粒やや多	内：ナデ/外：ナデ・突帯	-	J5区tr一括
21	V層	縄文土器	深鉢	-	-	-	-	褐色	2mm以下の白・黒色粒多	内：ケズリ/外：組織痕	組織痕土器	1073
22	Ⅳ層	土器	甕	-	-	-	-	褐色	3mm以下の赤褐色粒多量	内：ナデ/外：ナデ	-	1044
23	V層	土器	甕	-	-	-	-	褐色	3mm以下の赤褐色粒多量	内：ナデ/外：ナデ	-	947,1086
24	V層	土器	甕	-	-	-	-	褐色	3mm以下の赤褐色粒多量	内：ナデ/外：ナデ	-	946,1042
25	V層	土器	甕	-	-	-	-	褐色	3mm以下の赤褐色粒多量	内：ナデ/外：ナデ	-	948
26	Ⅳ層	土師器	高坏	-	-	-	-	褐色	3mm以下の赤褐色粒多量	内：ケズリ/外：ミガキ・ナデ	-	1016,1036,142区Ⅳ層
27	Ⅳ層	土師器	甕	-	5.6	-	-	にぶい黄褐色	3mm以下の赤褐色・黒色粒多量	内外：ナデ	-	989
28	Ⅳ・V層	土器	壺?	-	-	-	-	茶褐色	2mm以下の白・灰色粒含む	内：ナデ/外：ナデ	-	395,749
29	P74	石器	磨製石鏃	3.7	2.0	0.3	-	-	-	真岩	-	-
30	SB01:P1	土師器	坏	-	9.4	-	1b類	明褐色	2mm以下の赤褐色・白色・黒色粒	内外：回転ナデ	板状圧痕	P1_4
31	SB01:P1	土師器	坏	-	8.4	-	2類	灰黄褐色	ごく微小な黒色粒	内外：回転ナデ	-	P1_5
32	SB01:P2	土師器	小皿	8.7	6.4	1.5	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色粒	内外：回転ナデ	板状圧痕	P2_1
33	SB01:P2	土師器	小皿	9.0	8.0	1.6	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・赤褐色・白色粒	内外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ	P2_2
34	SB01:P3	土師器	小皿	9.4	7.0	1.5	1b類	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐色粒/微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	P3-1
35	SB01:P5	土師器	坏	-	7.4	-	2類	浅黄褐色	ごく微小な黒色・灰色粒	内外：回転ナデ	-	P5_1
36	SB01:P5	土師器	小皿	8.7	6.7	2.0	1b類	にぶい黄褐色	2mm以下の赤褐色・白色・灰色粒	内外：回転ナデ	内底丁寧なナデ	P5_7
37	SB01:P5	土師器	小皿	9.4	7.3	1.4	1b類	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?	P5_8
38	SB01:P5	土師器	小皿	8.8	7.8	1.4	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	内一部ス	P5_3
39	SB01:P6	土師器	小皿	8.8	6.4	1.4	1b類	浅黄褐色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?	P6_1,7
40	SB01:P6	土師器	小皿	9.0	6.0	1.4	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・灰色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ/外：回転ナデ	-	P6_4
41	SB01:P10	土師器	坏	14.0	-	-	-	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外：回転ナデ	-	P10_13,14
42	SB01:P10	土師器	坏	-	8.5	-	1b類	浅黄褐色	微小な赤褐色・灰色粒	内：回転ナデ・ナデ	板状圧痕	P10_9/119,130
43	SB01:P10	土師器	坏	-	7.6	-	1b類	褐色	微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ	-	P10_5
44	SB01:P10	土師器	坏	-	6.8	-	1b類	明褐色	2mm以下の赤褐色・白色粒	内：回転ナデ	板状圧痕	P10_4
45	SB01:P10	土師器	小皿	-	6.8	-	1b類	にぶい黄褐色	1mm以下の白色・灰色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?	P10_3
46	SB01:P10	土師器	小皿	8.5	5.6	1.6	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P10_1
47	SB01:P10	土師器	小皿	-	6.2	-	1b類	褐色	ごく微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P10_10
48	SB01:P10	土師器	小皿	8.3	6.6	1.2	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・白色粒	内外：回転ナデ	-	P10_7
49	SB01:P11	土師器	坏	-	-	-	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な灰色・赤褐色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ/外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	P11_10
50	SB01:P11	土師器	小皿	-	6.2	-	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・白色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?	P11_12
51	SB01:P11	土師器	小皿	-	6.0	-	1b類	浅黄褐色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・丁寧なナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?	P11_11
52	SB01:P11	土師器	小皿	8.2	6.0	1.1	1b類	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内外：回転ナデ	焼成良	P11_9
53	SB01:P12	土師器	坏	-	9.0	-	1b類	浅黄褐色	1mm以下の黒・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P12_13/593
54	SB01:P12	土師器	小皿	9.8	7.8	1.4	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・透明粒	内外：回転ナデ	-	P12_12
55	SB01:P12	土師器	小皿	7.6	6.0	1.3	1b類	にぶい黄褐色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P12_11
56	SB02:P14	土師器	坏	16.0	10.6	3.8	1b類	にぶい黄褐色	1mm以下の白・赤褐色・半透明粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P14_56/D3区Ⅳ層338
57	SB02:P14	土師器	坏	15.0	-	-	-	褐色	1mm以下の赤褐色・白色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P14_44
58	SB02:P14	土師器	坏	13.8	-	-	-	灰褐色	ごく微小な赤褐色・黒色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P14_45
59	SB02:P14	土師器	坏	-	8.8	-	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な白・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	板状圧痕	P14_40,60/714
60	SB02:P14	土師器	坏	-	8.4	-	1b類	にぶい黄褐色	4mm以下の赤褐色粒/微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P14_51
61	SB02:P14	土師器	小皿	8.8	6.6	1.7	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な灰色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	切離し後ナデ?/焼成良	P14_42
62	SB02:P14	土師器	小皿	8.2	6.0	1.5	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な白色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P14_43
63	SB02:P14	土師器	小皿	-	6.4	-	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・透明粒	内：回転ナデ・ナデ	-	P14_25,39
64	SB02:P15	土師器	坏	-	-	-	-	にぶい黄褐色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	P15_1
65	SB02:P18	土師器	小皿	-	-	-	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	-	P18_5
66	SB02:P19	土師器	坏	14.6	8.2	3.3	1b類	浅黄褐色	ごく微小な白・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ/外：回転ナデ	ナデ+板状圧痕	P19_3/53

表9 出土遺物：2

上・土器等／下・石器等 単位:cm

No.	遺構/層位	材質	器種	口径 長さ	底径 幅	器高 厚さ	分類	色調	胎土	整形・調整	備考	取上番号
67	SB02:P20	土師器	坏	-	9.8	-	1b類	にふい橙色	ごく微小な灰色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ・一部ナデ	板状圧痕	P20_1,5
68	SB02:P20	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P20_2
69	SB02:P20	土師器	小皿	10.0	7.8	1.6	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色・白色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P20_3
70	SB02:P21	土師器	小皿	9.2	7.6	1.5	2類	にふい橙色	ごく微小な黒色粒	内外:回転ナデ	-	P21_30
71	SB02:P21	土師器	小皿	7.6	5.6	1.6	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P21_31
72	SB02:P26	白磁	椀	-	6.4	-	椀II類?	灰白色	微細な黒色粒ごくわずか	体部下端へ底部無軸葉/貫入	-	P26_1
73	SB02:P24	土師器	小皿	9.0	6.0	1.5	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P24_7
74	SB02:P27	土師器	坏	15.8	8.4	2.6	1b類	浅黄橙色	1mm以下の灰色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	摩耗	P27_2
75	SB02:P27	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	にふい黄橙色	微小な黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P27_4
76	SB02:P27	土師器	坏	-	-	-	-	にふい黄橙色	ごく微小な黒・赤褐色粒	内外:回転ナデ	外面指頭痕	P27_80
77	SB02:P27	土師器	坏	-	-	-	-	にふい黄橙色	ごく微小な黒・白色粒やや多	内外:回転ナデ・ナデ	-	P27_79
78	SB02:P27	土師器	坏	-	-	-	1b類	にふい橙色	ごく微小な赤褐色・灰色粒	内外:回転ナデ・ナデ	板状圧痕	P27_5
79	SB02:P28	土師器	坏	15.0	8.4	3.4	1b類	浅黄橙色	ごく微小な白・透明粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P28_65,69,195
80	SB02:P28	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	褐灰色	1mm以下の黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P28_64
81	SB02:P28	土師器	坏	-	9.0	-	1b類	灰褐色	ごく微小な黒色・白色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P28_66,86
82	SB02:P28	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	褐灰色	ごく微小な黒色・白色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P28_94
83	SB02:P28	土師器	小皿	10.2	7.6	1.5	1b類	にふい黄橙色	微小な白色・赤褐色・黒色粒	内:回転ナデ・丁寧なナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P28_71
84	SB02:P28	土師器	小皿	9.0	7.0	1.4	2類	浅黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P28_70
85	SB02:P30	土師器	小皿	8.6	7.4	1.3	2類	にふい黄橙色	ごく微小な灰色・透明粒	内外:回転ナデ	-	P30_1
86	SB02:P31	土師器	坏	-	-	-	1b類	浅黄橙色	1mm以下の赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P31_33
87	SB02:P31	土師器	坏	-	-	-	1b類	にふい橙色	ごく微小な白色・灰色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?	P31_35
88	SB02:P74	土師器	坏	-	-	-	-	浅黄橙色	1mm以下の赤褐色・黒色粒やや多	内外:回転ナデ	-	P74_21
89	SB02:P74	土師器	坏	-	7.6	-	1b類	灰褐色	ごく微小な白色・黒色・灰色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P74_1
90	SB02:P74	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	灰褐色	1mm以下の黒色・灰色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	-
91	SB02:P74	土師器	坏	-	-	-	-	にふい黄橙色	ごく微小な赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P74_23
92	SB02:P74	土師器	坏	-	-	-	-	にふい橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P74_22
93	SB03:04:P33.34	土師器	坏	14.6	8.4	3.6	1b類	にふい橙色	微小な黒色・灰色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P33_34_1/P37.6
94	SB03:04:P33.34	土師器	小皿	8.2	6.0	1.4	1b類	浅黄橙色	ごく微小な黒色粒	内:回転ナデ・丁寧なナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?	P33_34_3
95	SB03:04:P33.34	土師器	小皿	-	-	-	2類	にふい黄橙色	ごく微小な透明粒	内外:回転ナデ	-	P33_22
96	SB03:P35.36	土師器	坏	-	6.8	-	1b類	にふい橙色	1mm以下の黒色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P35_36_2
97	SB03:P35.36	土師器	坏	-	7.6	-	-	にふい黄橙色	2mm以下の赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?/底面の取離?	P35_36_1
98	SB03:P35.36	土師器	坏	-	6.0	-	1b類	にふい黄橙色	2mm以下の赤褐色・灰色・黒色粒	内:回転ナデ・ナデ	内底一部スス	P35_36_3
99	SB03:P35.36	土師器	小皿	7.6	5.4	1.2	1b類	にふい橙色	ごく微小な黒色粒	内外:回転ナデ	-	P35_36_4
100	SB03:P38	土師器	坏	-	7.4	-	2類	にふい橙色	ごく微小な赤褐色・白色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	焼成良	P38_2
101	SB04:P39	土師器	小皿	9.0	7.5	1.2	2類	にふい橙色	ごく微小な透明粒	内外:回転ナデ	-	P39_11
102	SB04:P39	土師器	坏	-	-	-	-	にふい橙色	2mm以下の赤褐色・灰色粒/微小な黒色・白色粒	内外:回転ナデ・ナデ	-	P39_5
103	SB04:P39	石器	硯	5.6	6.0	1.0	-	-	-	海部欠損	-	P39_10
104	SB04:P39	石器	滑石製品	7.2	2.2	2.0	-	-	-	舟型容器	-	P39_8
105	SB04:P43	白磁	椀	-	-	-	椀II類	灰白色	微細な黒色粒わずか	細い玉縁口縁/貫入	-	P43_1
106	SB04:P44	土師器	小皿	8.7	6.4	1.5	1b類	浅黄橙色	ごく微小な灰色粒	内:回転ナデ・丁寧なナデ/外:回転ナデ	-	P44_6
107	SB04:P44	土師器	小皿	8.2	6.2	1.6	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P44_16
108	SB04:P44	土師器	坏	-	-	-	-	にふい橙色	1mm以下の黒色・白色・赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P44_17
109	SB04:P45	土師器	坏	-	7.2	-	1b類	灰白色	1mm以下の赤褐色黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P45_2
110	SB04:P75.76	土師器	小皿	-	5.2	-	1b類	にふい橙色	1mm以下の赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?	P75.76_1
111	SB05:P51	土師器	坏	-	8.2	-	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な白色・黒色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P51_1
112	SB07:P57	土師器	小皿	10.0	9.0	1.3	2類	灰黄褐色	1mm以下の黒色・白色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P57_2
113	SB07:P57	土師器	小皿	9.6	8.4	1.5	2類	灰黄褐色	ごく微小な透明・黒色・赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P57_1
114	P67	土師器	坏	-	8.2	-	2類	にふい橙色	ごく微小な赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P67_1
115	P73	土師器	小皿	9.0	6.7	1.6	1b類	浅黄橙色	1mm以下の赤褐色粒	内:回転ナデ・丁寧なナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?	P73_1
116	P73	土師器	小皿	8.6	7.5	1.4	2類	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・白色粒	内外:回転ナデ	切離し後ナデ?	P73_2
117	P73	土師器	小皿	8.2	7.8	0.9	2類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色・褐色粒	内外:回転ナデ	内底に明瞭なクログロ目	P73_3
118	P80	土師器	坏	15.5	8.9	4.0	2類	にふい黄橙色	ごく微小な透明・黒色・赤褐色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	外面スス	P80_1/1279,1280
119	P81	土師器	坏	16.0	-	-	-	にふい橙色	ごく微小な白色粒	内外:回転ナデ	-	P81_1,2
120	P111	土師器	坏	-	9.0	-	2類	にふい黄橙色	1mm以下の黒色・灰色・赤褐色粒やや多	内外:回転ナデ・外一部ナデ	-	P111/1028
121	P119	土師器	小皿	10.7	7.6	1.4	1b類	にふい橙色	ごく微小な黒色・白色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P119,1275
122	P120	土師器	小皿	9.3	7.4	1.4	2類	にふい橙色	ごく微小な赤褐色粒	内外:回転ナデ	-	P120,1281
123	Pit	土師器	坏	15.2	9.0	3.5	1b類	にふい黄橙色	微小な黒・白色粒やや多	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	切離し後ナデ?→板状圧痕	P_1
124	Pit	土師器	坏	14.6	8.2	3.5	1b類	にふい橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内:回転ナデ・丁寧なナデ/外:回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	P_2
125	Pit	土師器	坏	15.0	-	-	-	浅黄橙色	2mm以下の赤褐色・黒色粒	内:回転ナデ/外:回転ナデ・ナデ	-	P_3
126	Pit	土師器	坏	-	9.6	-	1b類	褐灰色	1mm以下の赤褐色・白色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P_16
127	Pit	土師器	小皿	9.2	6.6	1.4	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な白色・黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	板状圧痕	P_18
128	Pit	土師器	小皿	8.4	5.8	1.3	1b類	にふい橙色	微小な白色・灰色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	P_15
129	SC04	土師器	小皿	-	-	-	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	SC04_7
130	SC05	土師器	坏	-	8.6	-	-	にふい黄橙色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内:回転ナデ・ナデ	-	SC05_5
131	SC05	土師器	小皿	-	7.4	-	1b類	にふい黄橙色	ごく微小な黒色粒	内外:回転ナデ	-	SC05_7
132	SC05	土師器	坏	-	-	-	1b類	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内:回転ナデ・ナデ/外:回転ナデ	-	SC05_8

表10 出土遺物：3

上・土器等／下・石器等 単位：cm

No.	遺構/層位	材質	器種	口径 長さ	底径 幅	器高 厚さ	分類	色調	胎土	整形・調整	備考	取上番号
133	SC05	土師器	小皿	8.0	5.6	1.5	1b類	にぶい橙色	1mm以下の白色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ／外：回転ナデ	-	SC05.1
134	SC05	白磁	皿	11.0	3.4	2.6	皿VI類	灰白色	微細な黒色粒	貫入有/底面わずかに上底	-	SC05.41/477/一括
135	SC05	白磁	椀	-	-	-	椀II類	灰白色	微細な黒色粒	細い玉縁口縁/貫入	-	SC05.42,802
136	SC06	土師器	小皿	-	-	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な赤褐色粒	内外：回転ナデ	-	SC06.1
137	SC06	土師器	小皿	-	-	-	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	SC06.3
138	SC06	白磁	椀	-	-	-	椀IV類	灰白色	微細な黒色粒	体部下半〜底部無軸	-	SC06.32
140	SC11	土師器	小皿	8.4	6.4	1.2	1b類	浅黄橙色	ごく微小な黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	SC11.1
141	SC12	黒色土器	高台付碗	-	-	-	両黒	内外：黒色	1mm以下の白色粒	内：ミガキ／外：回転ナデ・ミガキ	-	SC12.1
142	SC13	土師器	小皿	9.5	7.4	1.3	1b類	浅黄橙色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	SC13.1
143	SC13	石器	砥石	6.5	3.9	3.4	-	-	-	砂岩	-	SC13.4
144	SC15	土師器	小皿	-	-	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な黒色粒	内外：回転ナデ	-	SC15.1
145	SC18	土師器	坏	-	8.1	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕→ナデ?	SC18.4
146	SC18	土師器	坏	-	8.0	-	1b類	にぶい黄橙色	2mm以下の赤褐色粒/ごく微小な黒色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	SC18.5
147	SC18	土師器	小皿	8.8	7.5	1.3	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	SC18.1
148	SC36	土師器	坏	11.8	8.2	3.3	1a類	橙色	1mm以下の白色・黒色・赤褐色粒やや多	内外：回転ナデ・ナデ	ナデ→板状圧痕?	SC36.3
149	SC36	土師器	小皿	8.9	7.1	2.1	1a類	橙色	ごく微小な黒色・黒色粒	内外：回転ナデ・ナデ	ナデ→板状圧痕?	SC36.1
150	SC36	土師器	小皿	8.5	7.2	1.8	1a類	橙色	1mm以下の赤褐色粒	内外：回転ナデ・ナデ	板状圧痕	SC36.2
151	SC36	土師器	小皿	8.6	6.7	1.9	1a類	橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・丁寧なナデ／外：回転ナデ	ナデ→板状圧痕?	SC36.4
152	SC36	土師器	小皿	8.3	6.6	2.0	1a類	橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外：回転ナデ・ナデ	ナデ→板状圧痕?	SC36.5
153	SD02	土師器	坏	15.4	7.8	3.7	1b類	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色粒/微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	SD02.3,15,17,18,19,23
154	SD02	土師器	坏	14.0	-	-	-	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色粒/微小な赤褐色・黒色粒	内外：回転ナデ	外面強い口クロ目	SD02.16
155	SD02	土師器	小皿	8.6	6.5	1.5	1b類	浅黄橙色	1mm以下の黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	SD02.909
156	SD02	土師器	小皿	9.0	6.4	1.5	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な黒色・透明粒	内外：回転ナデ	-	SD02.5
157	SD02	土師器	小皿	6.9	5.0	1.3	1b類	浅黄橙色	ごく微小な透明粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	SD02.1
158	SD04	土師器	小皿	-	7.2	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な白色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ/底面に穿孔/周縁に加工痕	SD04.8
159	SF01	土師器	小皿	-	-	-	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な赤褐色粒	内外：回転ナデ	-	SF01.1
160	IV層	土師器	坏	12.0	7.2	-	1a類	橙色	1mm以下の赤褐色粒少量	内外：回転ナデ・ナデ	板状圧痕	964,971
161	IV層	土師器	坏	15.8	9.6	3.9	1b類	にぶい橙色	微小な白色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ・指頭痕	板状圧痕	534,535
162	IV層	土師器	坏	15.3	7.0	3.4	1b類	浅黄橙色	3mm以下の白色・黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	摩耗	546
163	IV層	土師器	坏	15.7	9.0	3.7	1b類	にぶい橙色	1mm以下の黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	12/448
164	IV層	土師器	坏	-	9.4	-	1b類	浅黄橙色	3mm以下の灰色・黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	721
165	IV層	土師器	坏	-	7.0	-	1b類	にぶい橙色	3mm以下の赤褐色・黒色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	-
166	IV層	土師器	坏	-	7.8	-	1b類	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	137
167	IV層	土師器	坏	-	9.0	-	1b類	橙色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	26,D5区IV層227
168	IV層	土師器	坏	-	9.4	-	1b類	にぶい橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ	板状圧痕	80,480,500
169	V層	土師器	坏	-	9.0	-	1b類	にぶい褐色	3mm以下の赤褐色・白色粒	内外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	1273
170	IV層	土師器	坏	-	8.0	-	1b類	灰黄褐色	2mm以下の赤褐色・白色粒	内外：回転ナデ	切離し後ナデ?	228/E2区IV層75
171	IV層	土師器	坏	-	7.2	-	1b類	にぶい橙色	2mm以下の灰色粒	内：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	447
172	IV層	土師器	坏	-	11.0	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外：ナデ?	摩耗	56
173	IV層	土師器	坏	-	10.4	-	1b類	にぶい橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	310
174	IV層	土師器	坏	-	9.4	-	1b類	にぶい黄橙色	ごく微小な黒色・赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	139/D4区IV層382/一括
175	IV層	土師器	坏	-	7.6	-	1b類	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ	-	325
176	IV層	土師器	坏	-	8.4	-	1b類	にぶい橙色	3mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	705
177	IV層	土師器	坏	-	8.8	-	1b類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色・灰色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	538
178	IV層	土師器	坏	-	7.4	-	1b類	灰白色	2mm以下の赤褐色・灰色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	へら切り後ナデ	539
179	IV層	土師器	坏	-	6.3	-	1b類	浅黄橙色	3mm以下の赤褐色・黒色粒	-	摩耗	348
180	IV層	土師器	坏	-	-	-	1b類	浅黄褐色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	764
181	IV層	土師器	坏	-	-	-	1b類	にぶい黄褐色	2mm以下の灰色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	224
182	IV層	土師器	坏	-	-	-	1a類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	301
183	IV層	土師器	坏	14.6	9.0	3.4	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・黒色・白色粒	内外：回転ナデ	外面一部スス	19
184	IV層	土師器	坏	-	8.0	-	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	415
185	IV層	土師器	坏	-	7.2	-	2類	灰黄褐色	2mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ	焼成良	850
186	IV層	土師器	坏	-	7.6	-	2類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色粒	内：回転ナデ	-	182
187	IV層	土師器	坏	-	10.0	-	2類	浅黄褐色	1mm以下の黒色粒多量	内外：回転ナデ	-	383
188	IV層	土師器	坏	-	6.8	-	2類	灰白色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	1063
189	IV層	土師器	坏	-	6.0	-	2類	にぶい橙色	1mm以下の白色粒	内外：回転ナデ	-	973
190	IV層	土師器	小皿	8.1	6.0	1.1	1a類	橙色	ごく微小な灰色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	板状圧痕	1061,1062
191	IV層	土師器	小皿	10.0	7.6	1.4	1b類	浅黄褐色	ごく微小な黒色粒	内外：回転ナデ	-	96
192	IV層	土師器	小皿	9.6	7.1	1.7	1b類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	65
193	IV層	土師器	小皿	8.8	6.8	1.6	1b類	にぶい褐色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	464
194	IV層	土師器	小皿	8.8	6.8	1.5	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	904
195	-	土師器	小皿	8.9	7.0	1.1	1b類	褐灰色	1mm以下の赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	-
196	IV層	土師器	小皿	9.0	6.8	1.5	1b類	にぶい褐色	3mm以下の赤褐色粒/ごく微小な透明・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?/板状圧痕	449
197	IV層	土師器	小皿	9.1	6.9	1.5	1b類	浅黄褐色	1mm以下の黒色粒	内外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?/板状圧痕	905-1
198	IV層	土師器	小皿	9.0	7.4	1.5	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	109
199	IV層	土師器	小皿	7.8	6.4	1.4	1b類	にぶい黄褐色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	536

表 1 1 出土遺物：4

上・土器等／下・石器等 単位：cm

No.	遺構/層位	材質	器種	口径長さ	底径幅	器高厚さ	分類	色調	胎土	整形・調整	備考	取上番号
200	IV層	土師器	小皿	8.0	5.8	1.4	1b類	にぶい橙色	ごく微小な黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	381
201	IV層	土師器	小皿	7.7	5.6	1.3	1b類	浅黄橙色	1mm以下の黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	87
202	IV層	土師器	小皿	7.9	6.4	1.2	1b類	浅黄橙色	1mm以下の黒色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	671
203	IV層	土師器	小皿	8.1	6.0	1.4	1b類	浅黄橙色	1mm以下の赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	116
204	IV層	土師器	小皿	8.4	6.2	1.4	1b類	にぶい橙色	ごく微小な黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	583
205	IV層	土師器	小皿	8.0	5.6	1.2	1b類	にぶい黄橙色	2mm以下の赤褐色粒	内外：回転ナデ	板状圧痕/ナデ?	D5区IV層224
206	IV層	土師器	小皿	7.7	5.0	1.3	1b類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	1024
207	IV層	土師器	小皿	-	6.4	-	1b類	灰黄褐色	ごく微小な黒色・白色・赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	D5区IV層274
208	IV層	土師器	小皿	8.4	6.4	1.7	1b類	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	459
209	IV層	土師器	小皿	-	6.6	-	1b類	にぶい黄橙色	1mm以下の灰色・黒色粒	内外：回転ナデ	摩耗	H2区IV層110,121
210	IV層	土師器	小皿	8.9	6.2	1.1	1b類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	底面収縮?	650/E2区IV層152,159
211	IV層	土師器	小皿	9.2	7.0	1.2	1b類	にぶい橙色	2mm以下の赤褐色・黒色粒やや多	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	240
212	IV層	土師器	小皿	8.8	6.8	1.1	1b類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色・黒色粒	内外：回転ナデ・ナデ	切離し後ナデ?	545
213	IV層	土師器	小皿	8.0	6.4	1.3	1b類	にぶい黄橙色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	底面収縮?	967
214	IV層	土師器	小皿	8.2	6.3	1.3	2類	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	1053
215	IV層	土師器	小皿	10.5	9.0	1.3	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な白色・赤褐色粒ごく微量	内外：回転ナデ	-	52
216	IV層	土師器	小皿	9.4	7.8	1.4	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な赤褐色粒	内外：回転ナデ	-	一括
217	IV層	土師器	小皿	8.5	7.8	0.8	2類	にぶい橙色	ごく微小な黒色粒	内外：回転ナデ	-	B4区IV層501
218	IV層	土師器	小皿	8.7	6.8	1.5	2類	にぶい橙色	ごく微小な白色・黒色粒	内外：回転ナデ	-	451
219	IV層	土師器	小皿	8.3	7.0	1.2	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な灰色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	491
220	IV層	土師器	小皿	8.1	7.0	1.3	2類	にぶい黄橙色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ	-	C4区IV層751
221	IV層	土師器	小皿	9.0	6.4	1.3	2類	浅黄橙色	ごく微小な黒色・白色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	1093
222	IV層	土師器	小皿	8.1	7.0	1.5	2類	にぶい橙色	ごく微小な赤褐色粒ごく微量	内外：回転ナデ	-	262
223	IV層	土師器	小皿	-	8.2	-	2類	にぶい黄橙色	1mm以下の赤褐色粒	内外：回転ナデ	-	586
224	IV層	土師器	小皿	-	6.2	-	2類	にぶい橙色	1mm以下の赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ	-	45
225	IV層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい橙色	ごく微小な白色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	666
226	IV層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい橙色	ごく微小な黒色・白色粒	内外：回転ナデ	外スス	475
227	IV層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい褐色	ごく微小な白色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	外強いワカロ目/ 内厚いスス	1100
228	V層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい褐色	ごく微小な赤褐色粒	内外：回転ナデ	外面スス	127
229	IV層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい橙色	2mm程度の赤褐色粒/ごく微小な赤褐色粒	内外：回転ナデ	体部下半に強いワカロ目	622
230	IV層	土師器	-	-	-	-	-	灰黄色	ごく微小な黒色・赤褐色粒	内外：回転ナデ・ナデ	-	787
231	IV層	土師器	-	-	-	-	-	にぶい橙色	ごく微小な白色粒	内外：回転ナデ・ナデ	-	982
232	IV層	土師器	-	-	-	-	-	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内外：回転ナデ?	摩耗	1064
233	IV層	土師器	高台付碗?	-	-	-	-	にぶい橙色	2mm以下の灰色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	切離し後ナデ?	886
234	IV層	土師器	高台付碗?	-	-	-	-	にぶい黄橙色	ごく微小な灰色・赤褐色粒	内外：ナデ	-	103
235	IV層	土師器	高台付碗?	-	-	-	-	浅黄橙色	ごく微小な赤褐色・黒色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	摩耗	149
236	IV層	土師器	高台付碗?	-	-	-	-	にぶい黄橙色	1mm以下の灰色・赤褐色粒	内：回転ナデ・ナデ／外：回転ナデ	-	977
237	IV層	土師器	甕	-	-	-	-	にぶい橙色	1mm以下の白色・茶褐色粒	内外：ナデ	外面スス	-
238	V層	製塩土器	-	-	-	-	-	橙色	1cm以下の灰色・赤褐色粒多	内：布痕/外：ナデ	-	V層一括
239	IV層	黒色土器	高台付碗	-	7.4	-	内黒	外：にぶい黄褐色	ごく微小な透明粒	内：ミガキ/外：回転ナデ・ナデ	-	297,340
240	IV層	黒色土器	高台付碗	-	8.0	-	両黒	内外：黒褐色	ごく微小な白色粒	内：ミガキ/外：回転ナデ・ミガキ	-	1010
241	IV層	黒色土器	高台付碗	-	7.6	-	両黒	外：灰白色	1mm以下の白色粒やや多	内：剥離/外：回転ナデ・ミガキ	-	684
242	IV層	黒色土器	高台付碗	-	6.7	-	両黒	外：黒褐色	1mm以下の白色粒やや多	内：剥離/外：回転ナデ・ミガキ	-	285
243	IV層	黒色土器	高台付碗?	-	-	-	両黒	内：黒色/外：灰白色	2mm以下の白色・赤褐色粒	内外：ミガキ	-	1080
244	IV層	黒色土器	高台付碗?	-	-	-	両黒	内外：黒色	ごく微小な白色粒	内外：ミガキ	-	975
245	IV層	黒色土器	高台付碗?	-	-	-	両黒	内外：黒色	1mm以下の白色粒やや多	内外：ミガキ	-	256
246	IV層	東様赤須恵器	鉢	-	-	-	-	暗灰色	1mm以下の白色粒やや多	内外：ナデ	-	259
247	IV層	東様赤須恵器	鉢	-	-	-	-	暗灰色	2mm以下の白・黒色粒	内外：ナデ	-	1041
249	IV層	白磁	碗	-	-	-	碗II類	灰白色	微細な黒色粒	細い玉縁口縁/貫入	-	199
250	IV層	白磁	碗	-	-	-	碗IV類	灰白色	微細な黒色粒	玉縁口縁/貫入	-	242
251	IV層	白磁	碗	-	-	-	碗IV類	灰白色	微細な黒色・白色粒	玉縁口縁/玉縁の下に段	-	33
252	IV層	白磁	碗	-	-	-	?	灰白色	微細な黒色粒	口縁端部わずかに外反	-	981
253	IV層	白磁	皿	-	-	-	皿VI類	灰白色	微細な黒色粒	貫入	-	C5区IV層527
254	IV層	白磁	皿	-	-	-	皿VI類	灰白色	微細な黒色粒	体部下端～底部無軸葉/貫入	-	52,84
255	IV層	白磁	碗	-	5.2	-	碗IV類	灰白色	微細な黒色粒	体部下半～底部無軸	-	1025
256	IV層	白磁	四耳壺?	-	-	-	-	灰白色	微細な黒色・白色粒	耳部欠損	-	1065
257	IV層	青磁	碗	-	-	-	碗II-III類	明緑灰色	微細な黒色粒わずか	鍔蓮弁文	龍泉窯系	781
258	IV層	石器	滑石製品	8.2	2.8	2.5	-	-	-	石鍋補修用品?	-	1351

IV 自然科学分析

王子原遺跡（第4次調査）における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO₂）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2. 試料

分析試料は、北壁地点のⅢ a 層からⅥ層までの層準から採取された計8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約 1g に対し直径約 40 μm のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6 時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散
- 5) 沈底法による 20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400 倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料 1g あたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料 1g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体 1 個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚 1 cm あたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表 12 および図 38 に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族 A（チガヤ属など）

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

[イネ科—その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

[樹木]

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

下位のⅥ層（試料7）からⅤ層（試料6）にかけては、ネザサ節型が多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ヨシ属、ススキ属型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のクスノキ科なども認められた。

Ⅳb層（試料5）から桜島文明軽石直下のⅣa層（試料3、4、8）にかけては、メダケ節型やネザサ節型が増加し、Ⅳa層（試料3、4、8）ではイネが検出された。イネの密度は1,400～2,100個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。なお、畑稲作（陸稲栽培）の場合は、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があるため、イネの密度は水田跡と比較してかなり低くなり1,000～2,000個/g程度である場合が多い（杉山，2000）。桜島文明軽石混のⅢa層（試料2）でもおおむね同様の結果であるが、ヨシ属は見られなくなっている。イネの密度は1,400個/gと比較的低い値である。

桜島文明軽石直上のⅢa層（試料1）では、ネザサ節型が多量に検出され、ウシクサ族A、メダケ節型も多く検出された。また、ススキ属型、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科なども認められた。

おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型およびメダケ節型が優勢であり、Ⅵ層やⅣa層ではヨシ属も多くなっている。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

下位のⅥ層からⅤ層にかけては、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類およびススキ属やチガヤ属などのイネ科草本類が生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が分布していたと推定される。

平安時代末～中世初頭とされるⅣb層から桜島文明軽石（Sz-3, 1471年）直下のⅣa層にかけては、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などの竹笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども生育するイネ科植生であり、部分的にヨシ属が生育するような湿潤なところも見られたと考えられる。また、桜島文明軽石直下のⅣa層の時期には、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。遺跡の立地や周辺の植生から、ここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であった可能性が考えられるが、湿地性のヨシ属も見られることから詳細は不明である。なお、ムギ類やヒエ属などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体はいずれの試料からも検出されなかった。

桜島文明軽石混のⅢc層でも、比較的少量ながらイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。同層ではヨシ属が見られないことから、堆積環境の乾燥化が示唆される。なお、桜島文明軽石直上のⅢa層では、稲作が行われていた可能性は認められなかった。

表 12 植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料							
		1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科	Gramineae								
イネ	<i>Oryza sativa</i>		14	21	14				14
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			21	7	7	7	20	14
キビ族型	<i>Panicum type</i>		21	7			7		7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>		42	21	21	21	29	7	64
ウシクサ族A	<i>Andropogoneae A type</i>	125	85	91	97	110	92	40	129
タケ亜科	Bambusoideae								
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	125	85	126	111	139	49	67	114
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	485	403	551	560	541	226	256	572
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	14	7	14	14	15	7	13	14
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	35	35	42	21	7	21	7	21
マダケ属型	<i>Phyllostachys</i>				7				
未分類等	Others	83	170	174	104	73	99	87	107
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	21	7	14	14	22	14	20	29
棒状珪酸体	Rodshaped	69	198	195	435	102	163	61	207
茎部起源	Stem origin					7			
未分類等	Others	118	99	77	48	58	106	74	72
樹木起源	Arboreal								
ブナ科(シイ属)	<i>Castanopsis</i>	7	7						
クスノキ科	<i>Lauraceae</i>	7	14	7	7	7	21	7	21
その他	Others	35	28	21	14	22	21	13	7
植物珪酸体総数	Total	1164	1195	1381	1472	1140	841	673	1394

おもな分類群の推定生産量(単位: kg/m²・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>		0.42	0.62	0.41				0.42
ヨシ属	<i>Phragmites</i>			1.32	0.44	0.46	0.45	1.27	0.90
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.52	0.26	0.26	0.26	0.36	0.09	0.08	0.80
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	1.45	0.98	1.46	1.28	1.61	0.57	0.78	1.33
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	2.33	1.93	2.65	2.69	2.60	1.09	1.23	2.75
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.10	0.05	0.10	0.10	0.11	0.05	0.10	0.11
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.10	0.11	0.13	0.06	0.02	0.06	0.02	0.06

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	36	32	34	31	37	32	37	31
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	58	63	61	65	60	61	58	65
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	3	2	2	3	3	3	5	3
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Crassinodi</i>	3	3	3	2	1	4	1	2
メダケ率	Medake ratio	95	95	95	96	97	93	94	96

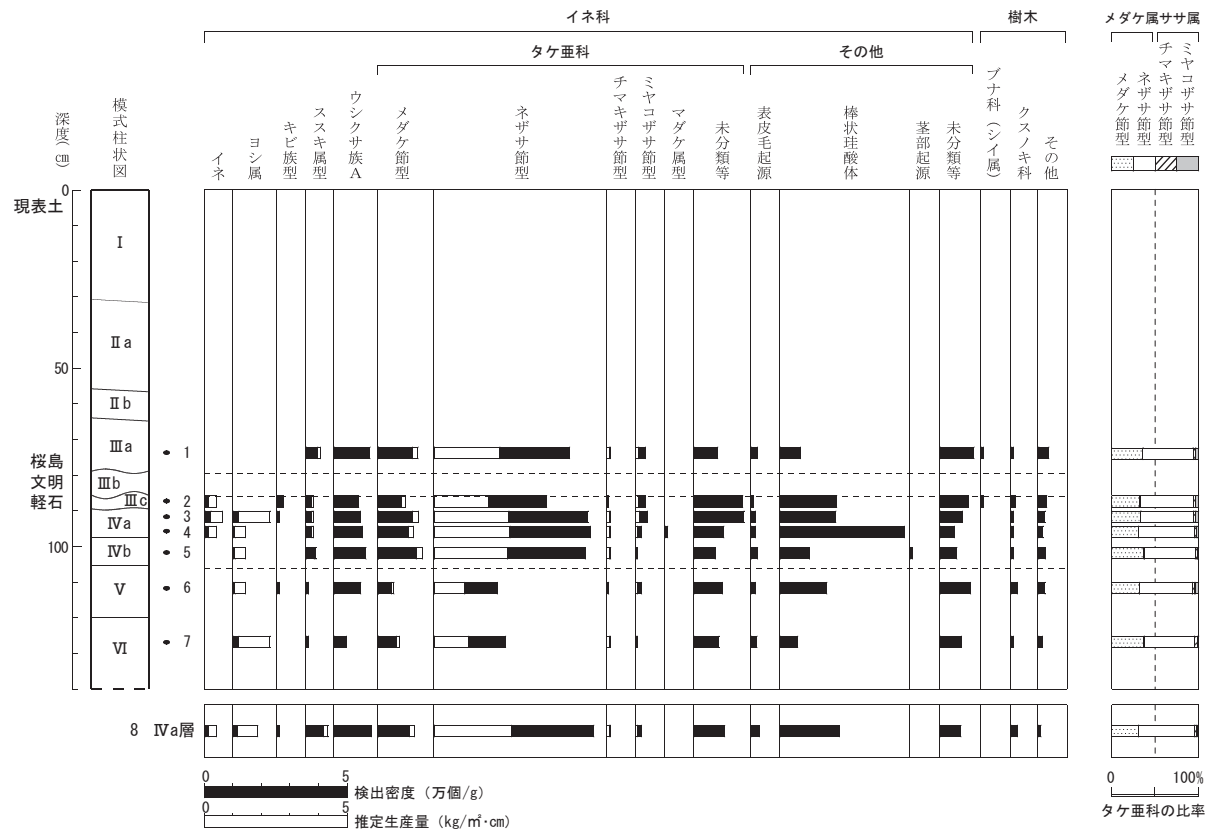
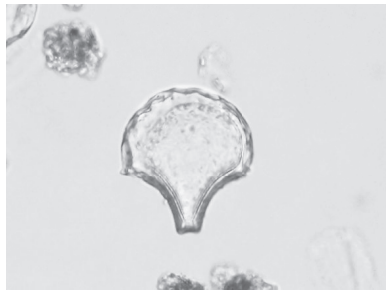
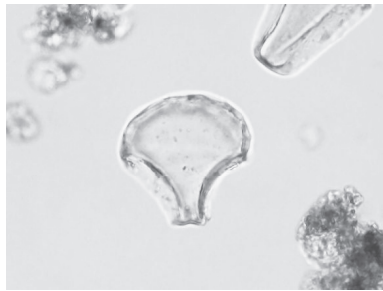


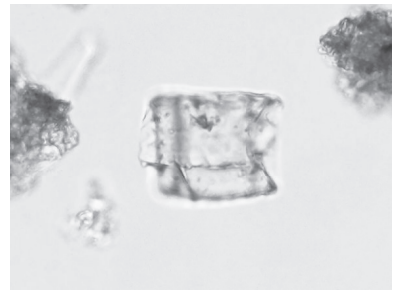
図 38 植物珪酸体分析結果



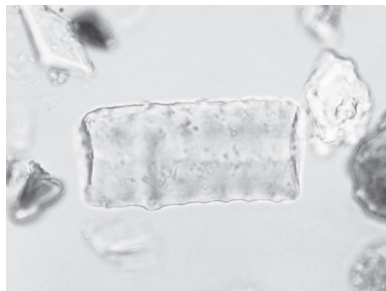
イネ



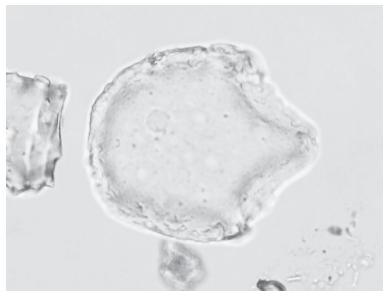
イネ



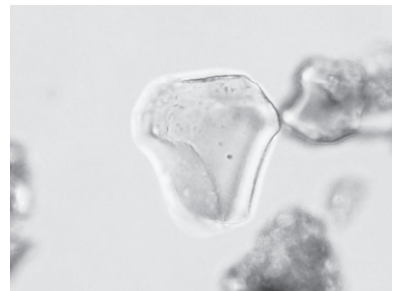
イネ (側面)



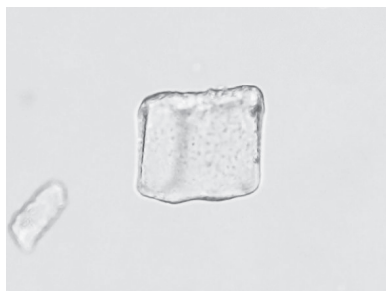
キビ族型



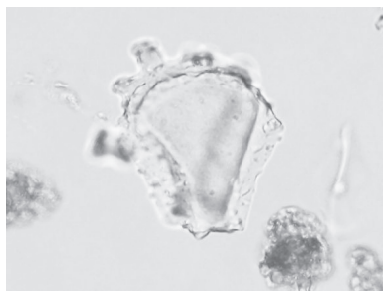
ヨシ属



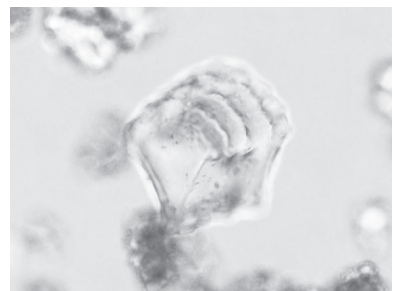
ススキ属型



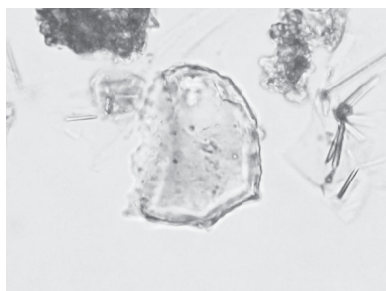
ウシクサ族A



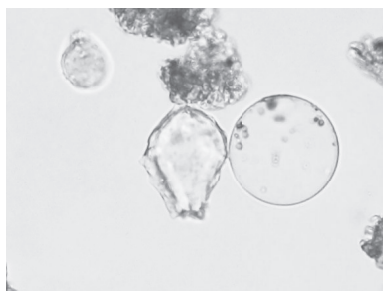
メダケ節型



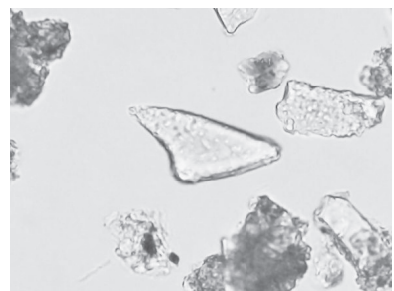
ネザサ節型



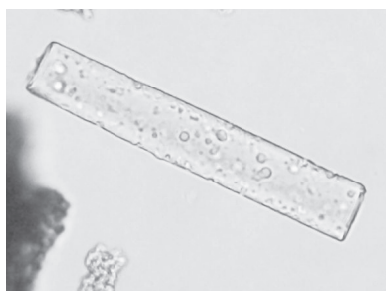
チマキザサ節型



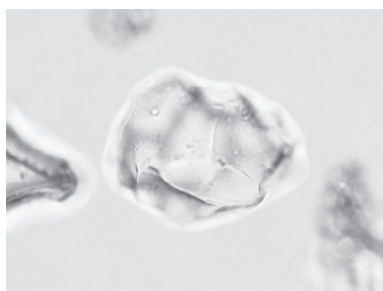
マダケ属型



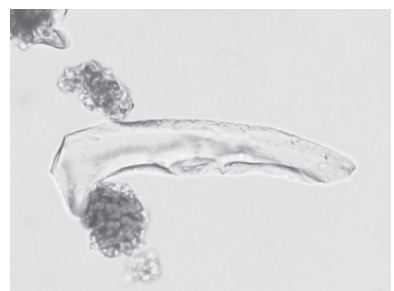
表皮毛起源



棒状珪酸体



ブナ科 (シイ属)



クスノキ科

50 μm

図版2 植物珪酸体(プラント・オパール)

王子原遺跡（第4次調査）における花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、北壁地点のⅢ a 層からⅣ a 層までの層準から採取された計5点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉16、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計35である。なお、寄生虫卵は認められなかった。分析結果を表13に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、ハシバミ属、クマシデ属—アサダ、クリ、シイ属—マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ブドウ属、ツバキ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科—ヒユ科、キンボウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、シソ科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

（２）花粉群集の特徴

桜島文明軽石直下のⅣ a 層（試料 3、4、8）および桜島文明軽石混のⅢ c 層（試料 2）では、草本花粉の占める割合が約 80% を占め、樹木花粉は約 15%、シダ植物孢子は約 5% である。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が優勢で、タンポポ科、キク科、キンポウゲ属、セリ科などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、シイ属—マテバシイ属、クリなどが認められた。桜島文明軽石直上のⅢ a 層（試料 1）でも、おおむね同様の結果であるが、シダ植物孢子がやや増加し、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属は減少している。なお、イネ属型（イネ）やソバ属（ソバ）などの栽培植物に由来する花粉は、いずれの試料からも検出されなかった。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

桜島文明軽石（Sz-3, 1471 年）直下のⅣ a 層では、イネ科やヨモギ属を主としてタンポポ科、キク科、キンポウゲ属なども生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと考えられる。これらの草本類は耕地雑草や人里植物の性格を持っていることから、畑地周辺の環境も示唆される。近隣に森林は少なく、周辺地域にナラ類（コナラ属コナラ亜属）やクリなどの落葉樹、カシ類（コナラ属アカガシ亜属）、シイ属—マテバシイ属などの照葉樹、マツ属複維管束亜属などの針葉樹が分布していたと推定される。

桜島文明軽石混のⅢ c 層でも、おおむね同様の状況であったと考えられるが、ヨモギ属が増加していることから、堆積環境の乾燥化が示唆される。桜島文明軽石直上のⅢ a 層では、テフラ降灰の影響など何らかの原因でシダ類がやや増加し、ナラ類やカシ類などの森林植生は減少したと考えられる。

王子原遺跡（第 4 次調査）における植物珪酸体分析 文献

杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p.69-84.

杉山真二(1999)植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究, 38(2), p.109-123.

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.

藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探索—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

王子原遺跡（第 4 次調査）における花粉分析 文献

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第 10 巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第 5 集, 60p.

中村純(1967)花粉分析。古今書院, p.82-110.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究, 13, p.187-193.

中村純(1977)稲作とイネ花粉。考古学と自然科学, 第 10 号, p.21-30.

中村純(1980)日本産花粉の標徴。大阪自然史博物館収蔵目録第 13 集, 91p.

表 13 花粉分析結果

学名	分類群	和名	北壁地点					
			1	2	3	4	8	
Arboreal pollen		樹木花粉						
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1	2	1	
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属複雑管束亜属	8	8	4	12	5	
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ			1			
<i>Corylus</i>		ハシバミ属				2		
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属-アサダ		2	6		2	
<i>Castanea crenata</i>		クリ	5	1	4			
<i>Castanopsis-Pasania</i>		シイ属-マテバシイ属	3	8	3	6	11	
<i>Fagus</i>		ブナ属		3				
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	3	22	19	14	25	
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	3	7	13	17	22	
<i>Zanthoxylum</i>		サンショウ属		1				
<i>Ilex</i>		モチノキ属					1	
<i>Acer</i>		カエデ属			2	4	3	
<i>Vitis</i>		ブドウ属					1	
<i>Camellia</i>		ツバキ属			1			
<i>Distylium</i>		イスノキ属		1		1		
Arboreal Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉						
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1	1		1	1	
Rosaceae		バラ科				1		
Leguminosae		マメ科		3	2	1		
Araliaceae		ウコギ科		1		1	1	
Nonarboreal pollen		草本花粉						
Gramineae		イネ科	95	125	160	158	137	
Cyperaceae		カヤツリグサ科	4	1	7	3		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae		アカザ科-ヒユ科			1	1		
<i>Ranunculus</i>		キンポウゲ属		4	5	10	5	
Cruciferae		アブラナ科				1	1	
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリトウグサ属-フサモ属	6	1	2			
Hydrocotyloideae		チドメグサ亜科	1					
Apiodeae		セリ亜科	2	3	5	11	10	
Labiatae		シソ科		1				
Valerianaceae		オミナエシ科	2	1		1		
Lactucoideae		タンポポ科	9	12	14	12	7	
Asteroidae		キク亜科	2	14	8	5	7	
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	92	117	104	71	94	
Fern spore		シダ植物胞子						
Monolate type spore		単条溝胞子	14	14	17	14	10	
Trilate type spore		三条溝胞子	26	5	5	8	5	
Arboreal pollen		樹木花粉	22	53	54	58	71	
Arboreal Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	5	2	4	2	
Nonarboreal pollen		草本花粉	213	279	306	273	261	
Total pollen		花粉総数	236	337	362	335	334	
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	2.0	5.5	7.2	8.8	8.1	
			×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ³	×10 ³	
Unknown pollen		未同定花粉	11	10	19	22	18	
Fern spore		シダ植物胞子	40	19	22	22	15	
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Digestion remains		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	
Charcoal fragments		微細炭化物	(+)	(+)	(++)	(++)	(++)	

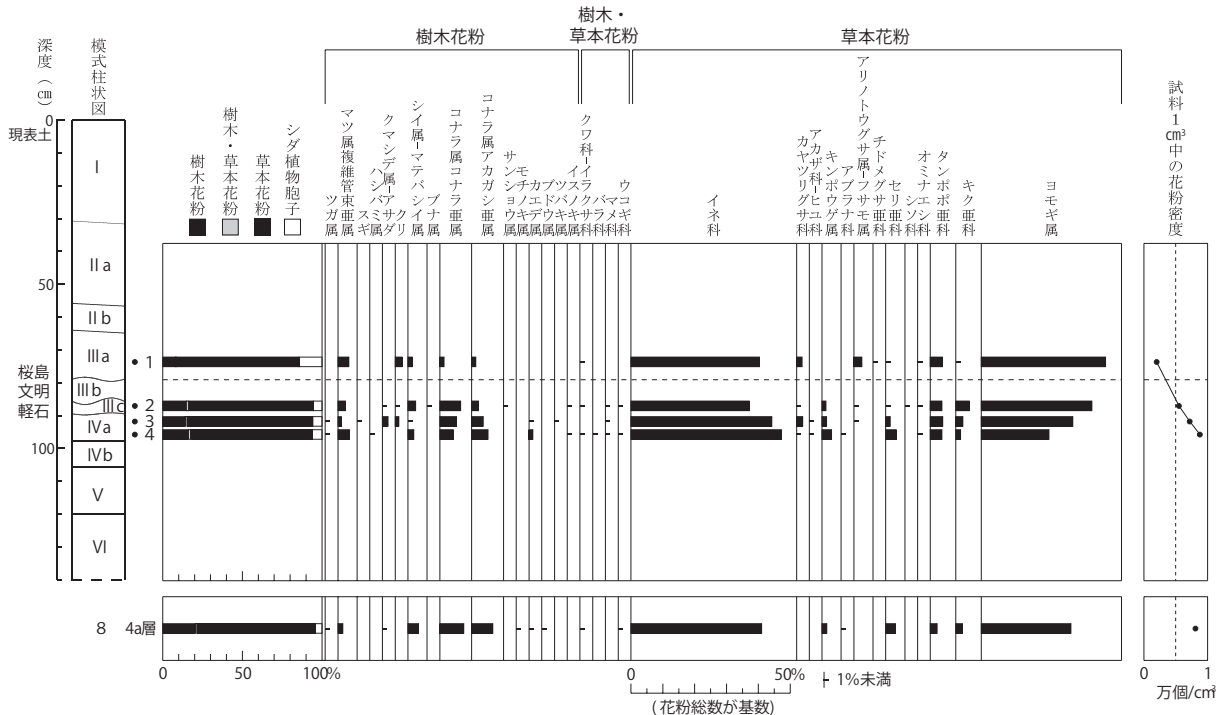
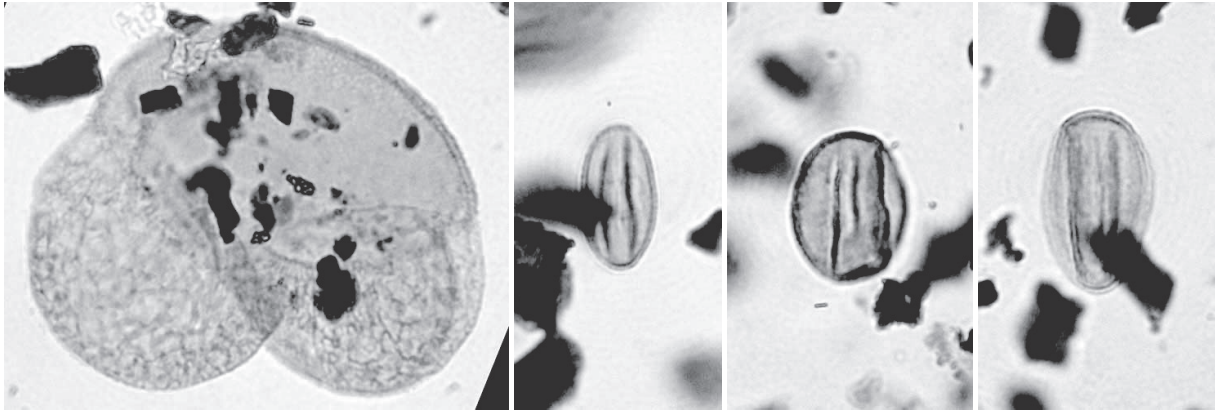


図 39 花粉ダイアグラム

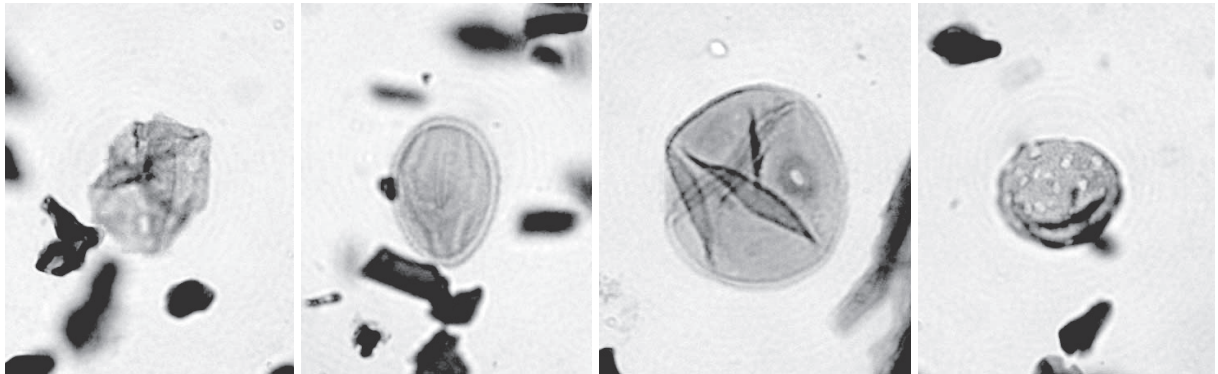


1 マツ属複維管束亜属

2 シイ属-マテバシイ属

3 コナラ属コナラ亜属

4 コナラ属アカガシ亜属

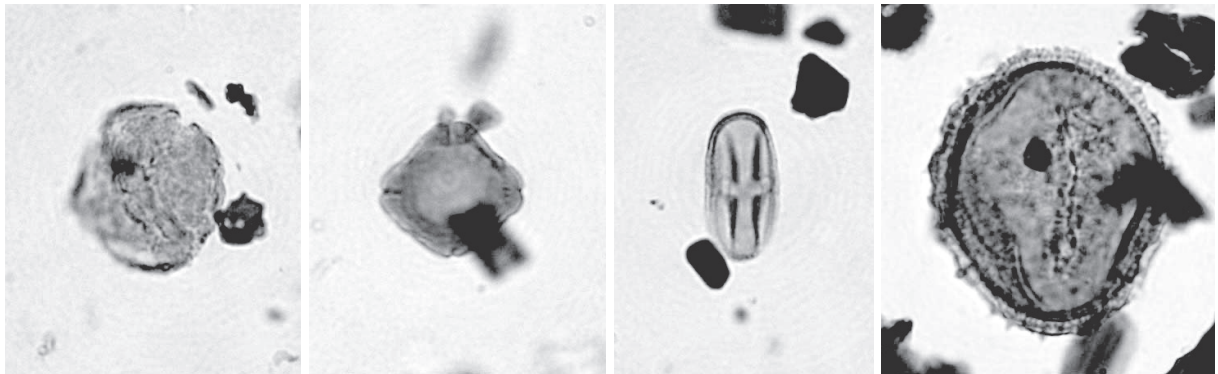


5 クワ科-イラクサ科

6 マメ科

7 イネ科

8 アカザ科-ヒユ科

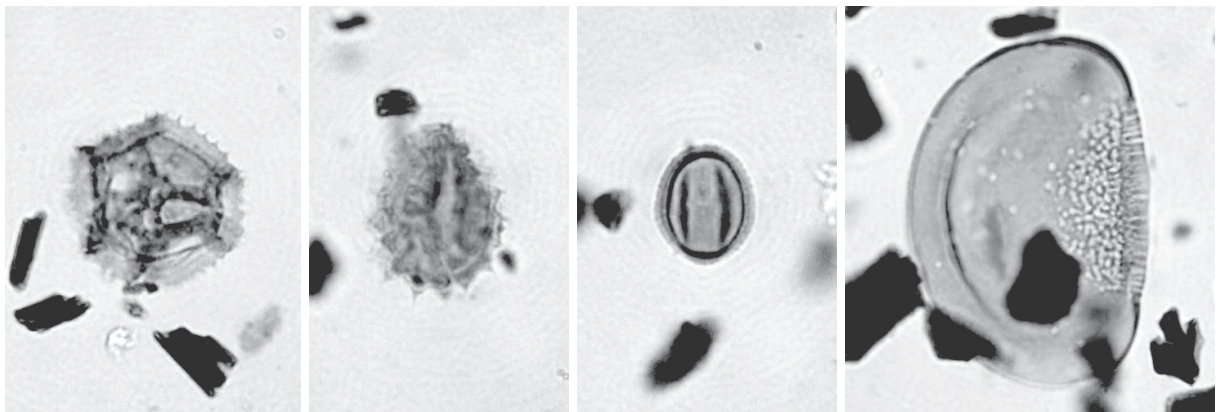


9 キンボウゲ属

10 アリノトウグサ属-フサモ属

11 セリ亜科

12 オミナエシ科



13 タンポポグ科

14 キク亜科

15 ヨモギ属

16 シダ植物単条溝孢子

図版3 花粉・孢子

— 10 μm

王子原団地建替工事に伴う地質調査（抄）

株式会社 八光開発コンサルタント

はじめに

本調査業務は、都城市建築課のご依頼により 都城市安久町地内において、王子原団地建替工事に伴い地質調査を実施したものである。

本調査は、団地建設計画における地盤の基礎資料を得るためのもので、次の事項を目的に実施した。

- ・地質構成とその分布の把握
- ・土の相対指数（N 値）の把握
- ・土質試験等による土の工学的性質の把握
- ・建築物基礎の支持地盤の支持力、液状化有無の把握

したがって本報告書では、これらの調査結果を整理し取りまとめると共に、若干の考察を加え報告する。

3. 地形・地質概要

調査地域の都城市は宮崎県の南西部に位置し、西部・南部を鹿児島県と接し、宮崎市と鹿児島市の間地点にあたる主要都市である。その中で、調査地は、都城市街地（市役所）より南南西へ約 5 km 離れた地点にあり、北は都城市市街、南は安久の山間地となる。

また、西 1 km ほどに大淀川の支流である安久川が流れている。本地域における大略の地質構造は次頁の地質図（略）のとおりである。

調査地は四万十層群を基盤岩として、未固結の礫、砂よりなる都城層の上に始良火山に属する入戸火砕流堆積物（非溶結部シラス）が堆積している。上部 6～8m は、上位から霧島火山噴出物（黒ボク、ローム）及び沖積層（シルト、砂、礫）の構成になっている。

調査地を含む周辺の地質（都城盆地全体）については、地質構造的に落ち込んだ凹地になっている。特に 2 万年前の入戸火砕流（シラス）の堆積直後、盆地中央部は水の排出口を失い、かなりの期間湖水を形成していたことが堆積状況から知られている。現在盆地の水系は大淀川で、盆地の北東部にその排水口がある。盆地全体が湛水したのち、この部分で湖水があふれ出し、同時にここでの浸食作用が進行した結果、次第に湖面の水位は下がり、ついに湖はその姿を消してしまったというのがおよその経過である。盆地内の地形面を要約すると、周辺部のシラス台地、中央部を広く占める低位段丘、大淀川とその支流沿いの氾濫原の三つにまとめることができる。このうちの低位段丘面が湖水形成時の堆積層で浅く平らな湖底や湖岸の汀線を示すものと考えられる。（宮崎大学 横山淳一教授の文献より引用）

本調査地のボーリングのコア鑑定結果と「都城地域の地質」（国土地理院発行 昭和 52 年）とを勘案した結果、以下の表 14 の通りの地質層序となった。

4. 調査結果

4.1 調査ボーリング結果

調査結果は「調査地位置平面図」（略・図 7 参照）、「地質推定断面図」（図 40）及び巻末の「ボーリング柱状図」（略）に示す。

調査地は表 15 に示すとおり、6 層の地層が分布している。

(1) 火山灰質粘性土層 kb・Lm

霧島火山噴出物である黒ボク、砂質ロームが主体である。

本層は 2.30～3.70 m の層厚を示す。

層の中位から上位は、含水比が低くパサパサしているが、下部の方は含水比が高く粘性が強い。

N値は1～24とばらつきがあり、特にNo,3孔の黒ボクはN値が9～24とかなり高い。
相対稠度ではNo,1孔で「軟らかい」～「中位」を示し、No,2孔、No,3孔で「中位」～「硬い」を示す。

(2) 上部粘性土層 ACF1

湖水形成時の堆積層あるいは、河川の氾濫堆積物と考えられる。

本層は0.45～2.30mの層厚を示す。

No,1とNo,3では、最大20mm礫を含む。

N値は8～13を示し、相対稠度は、「硬い」を示す。

(3) 砂質土層 AS

湖水形成時の堆積層あるいは、河川の氾濫堆積物と考えられる。

本層は1.30mの層厚を示し、No,2孔のみ存在する。

含水比が非常に高く緩い。

細粒土を20～30%位含み、 ϕ 10～20mmの礫を含んでいる。

粘性土～礫を含むため、粒度分布が良い。N値は4～7を示し、相対稠度は、「緩い」を示す。

(4) 礫質土層 AGF

湖水形成時の堆積層あるいは、河川の氾濫堆積物と考えられる。

本層は0.40～2.00mの層厚を示す。

細粒土分を20～30%程含む。礫径は ϕ 2～3mmが主体でMax5mm程度を混入する。

粘性土～礫を含むため、粒度分布が良い。

N値は5～24を示し、相対稠度は、「中位」を示す。

(5) 下部粘性土層 ACF2

本層は0.45～0.90mの層厚を示す。

比較的均質で軟らかい。またNo,3では ϕ 20mm礫を含む。

粘性土～礫を含むため、粒度分布が良い。

N値は6～12を示し、相対稠度は、「中位～硬い」を示す。

(6) シラス層 DSi

起源は、始良火山に属する入戸火砕流堆積物（非溶結部シラス）である。

色調が褐色化し且つN値が低いことから、盆地周辺の湖水形成時に流入したシラス（二次シラス）と考えられる。そのため、深部でもN値が低いため、構造及び杭の支持層を検出出来ない。

層厚は、ボーリング調査で最大20m程度を確認し、実際には20m以上の層厚に達するものと思われる。

このシラスの特徴としては、軽石の混入量が非常に多い。 ϕ 5mm前後の軽石を含み、最大50mmの軽石も存在する。特にNo,1孔の上位はも軽石の比率が高い。またNo,3孔の上位は、細粒土の分布が高く、緩いシラスを構成している。

4.2 地下水位状況

当地盤の地下水は、表16のとおり浅部に概ね水平状で分布する。ただし、渇水期、豊水期により多少水位の変動がありうる。

表 14 調査地周辺の地質層序

(×100万年)	地質時代		地質名	岩盤及び土質名
0	新	完新世	霧島火山現世堆積物	◎火山灰質粘性土(黒ボク、ローム)
0.01			第四紀	河川氾濫原堆積物 低位段丘堆積物
1.7	生	更新世		霧島火山新規堆積物 始良火砕流他意堆積物 都城層
24			代	新第三紀
65	古第三紀	四万十累層群		砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層

◎は、今回ボーリングで検出した地層

表 15 調査地の地質層序

凡 例

地質時代	地層名	土質名	記号	
第 四 紀	堆積物 火山物	①火山灰質粘性土層	黒ボク ローム	K b ・ L m
		沖積層	②上部粘性土層	礫混じり粘土 砂質シルト
	③砂質土層		礫混じり砂	A S
	④砂礫層		砂礫、 粘土質砂礫	A G F
	⑤下部粘性土層		礫混じり粘土 粘性土	A C F 2
	更新世	堆積物 入戸火砕流	⑥シラス層	シラス

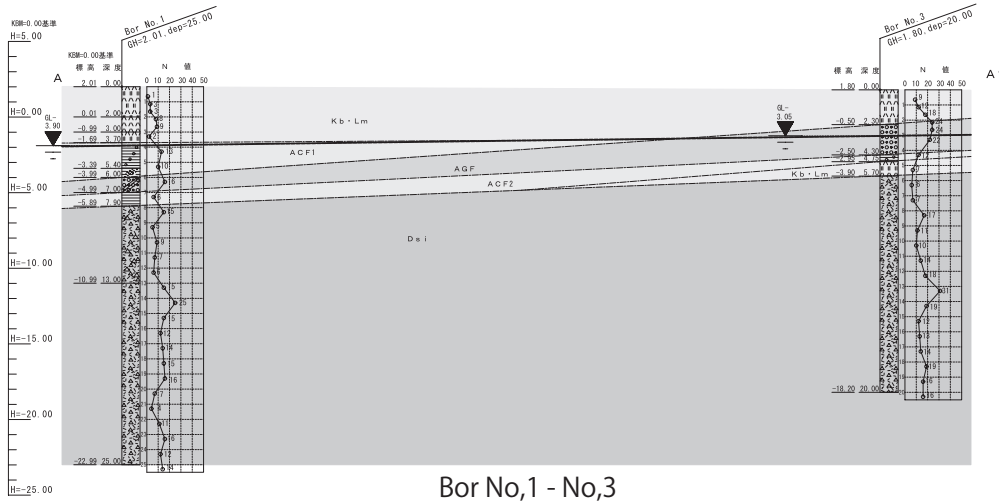
左記地質文献は、
「都城の地質」地質調査所(昭和52年)を参考にした。
① : 現霧島火山噴出物
②~⑤ : 河川氾濫原堆積物、低位段丘堆積物
⑥ : 始良火山入戸火砕流堆積物

表 16 地下水位一覧表

調査番号	地盤高 GL- (m)	DL (m)	調査地年月	備考
No. 1 孔	3.90	-1.89	H22.11	
No. 2 孔	3.30	-1.74	H22.10	
No. 3 孔	3.55	-1.25	H22.11	

DL : KBM=0.00 を任意の基準高

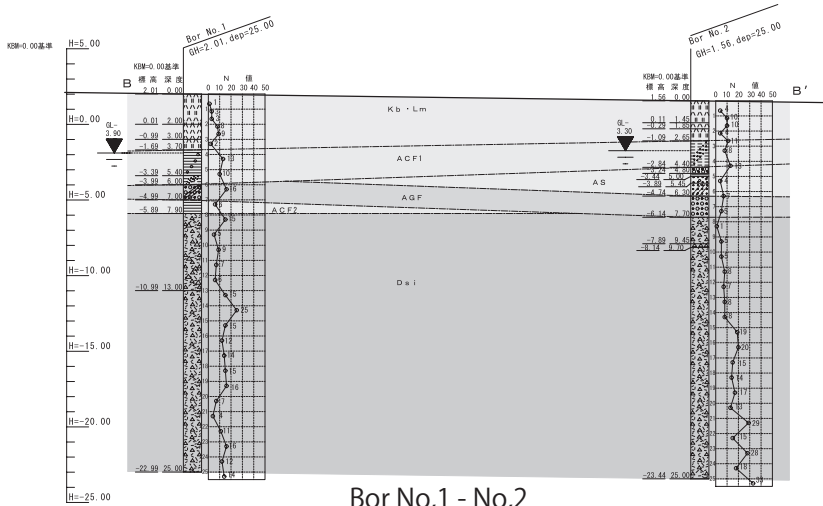
当地盤の地下水は、表 4.2.1 のとおり浅部に概ね水平状で分布する。ただし、渇水期、豊水期により多少水位の変動がありうる。



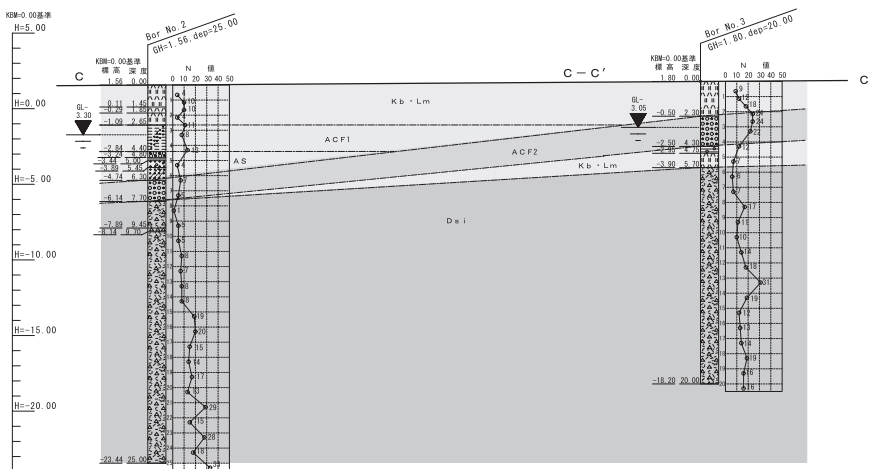
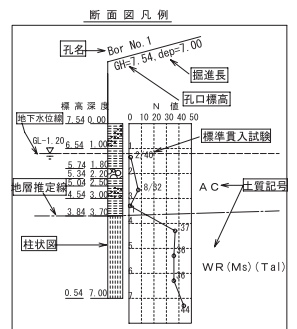
Bor No,1 - No,3

凡例

地質時代	地層名	土質名	記号
第四紀 沖積層	①火山灰質粘性土層	黒ボクローム	Kb·Lm
	②上部粘性土層	礫混じり粘土 砂質シルト	ACF1
	③砂質土層	礫混じり砂	AS
	④砂礫層	砂礫、 粘土質砂礫	AGF
	⑤下部粘性土層	礫混じり粘土 粘性土	ACF2
更新世 堆積物 入窪戸火砕流	⑥シラス層	シラス	Dsi



Bor No,1 - No,2



Bor No,2 - No,3

図 40 地質推定断面図 S=1/500

V 調査のまとめ

王子原遺跡は都城盆地の南部、盆地の東南をふちどる鱈塚山地のふもとにあって、西流し大淀川へ合流する萩原川と、北流し大淀川・萩原川へ合流する梅北川・安久川とに囲まれた開析扇状地面に立地している。この扇状地面はシラス台地面などと複合し、東側を中心にやや広い台地的な平坦面が形成され、西側は梅北川に向けて開析谷が複雑に展開する。

今回の調査区は扇状地面の東南部に位置している。台地地形の端部に近く、西には入り組む開析谷を望み、南には浅い谷が東西方向に延びる。現状では調査区付近を頂点に北・西・南の三方への傾斜が観察される。調査区内は削平・攪乱が進行していたが、土層断面の観察などより、南東部から西へかけて微高地的な高まりがあり、その両側はごく緩やかに下る斜面となっていた旧地形が推測された。

出土した遺構・遺物の時期は縄文時代～中世と幅広い。その主体としては、集石遺構が確認された縄文時代早期、掘立柱建物群や多量の遺物が出土した古代～中世、畠跡が検出された中世とに大別される。

縄文時代早期

集石遺構 2 基が検出され、土器片 120 点余りが確認された。出土層位は桜島 11 テフラが混じる X I 層最下部から X IV 層の上位にかけてである。

土器片は 3 種類に分類した。I 類はラップ状に大きく開く口縁部であり、II 類はやや膨らみ気味胴部である。I・II 類を合せ 1 個体となる可能性も考えられた。調整は基本的にナデであり、文様は観察できない。器形は撚糸文系塞ノ神式土器(塞ノ神式 A b 式)との類似点が多いと考えられる⁽¹⁾。III 類で土器形式として分類できた例は下剥峯式土器 1 点のみであった。分類ごとの平面分布に大きな偏りはみられず、層位は X II・X III 層を中心にその上下層に散る状況である。I・II 類を塞ノ神式土器の類とした場合、下剥峯式土器の早期中葉、塞ノ神式土器の早期末との 2 時期が考えられる。

集石遺構は、いずれも径 80cm 程度の範囲に礫が集中し、周囲に少量の礫が散る。明確な掘り込みは確認できていない。形態的には八木澤一郎氏の分類(八木澤 2003)「II + I 類型(構成礫が集中する部分は確認できるが、その周辺にも散布する礫が検出された集石遺構)」に該当すると考えられる。構成礫は S S O 1 では破碎が進む 100g 以下の小片が多く、S S O 2 ではやや大ぶりの 101 ~ 200g の割合が高い。集石内での接合状況は S S O 1 では構成礫数が 156 点→94 点、S S O 2 では 106 点→93 点と、S S O 1 にて比較的良好に接合した。

八木澤氏は「構成礫の破損・破碎状況の違い」について「準備段階から使用段階を経て廃棄段階に至る、形成過程の差であると判断できる」(八木澤 2003)とされる。今回検出された集石遺構は、同一集石内で接合が進む状況より、使用時と同一群を保った状態と推測され、破碎が進む礫で構成される S S O 1 は使用が進行した状態、やや大ぶりの礫で構成される S S O 2 は使用度の低い状態を示している可能性も考えられる。また、構成礫は目視観察では全て砂岩と考えられ、下位の礫層(沖積層)に属する礫とほぼ同一であった。そのため、構成礫の起源としては、礫層(沖積層)の露出部などからの採取が考えられる。

本調査では、下剥峯式土器、塞ノ神式土器の可能性のある土器、集石遺構 2 基が確認された。本調査区を挟み、北の梅北北原遺跡では小牧 B 式土器、下剥峯土器、押型文土器、集石遺構 10 基、南の王子原第 2 遺跡では平椀式土器と礫器、礫が出土している。また、梅北北原遺跡と本調査区では桜島 11 テフラの直下層にて集石遺構が検出されるなど、共通性が高い。これらの点を合わせると、本遺跡の周辺、入り組む開析谷に面した台地地形の縁辺部において、縄文時代早期中葉から末にかけての遺跡の広がりが考えられる。

古代～中世

約 6,200 点の土師器片をはじめ、掘立柱建物、土坑墓、溝状遺構などが確認された。その出土量より本遺跡の主体期と位置付けられる。掘立柱建物を中心とする遺構群及び遺物の出土は、調査区中位より北に偏る。旧地形上では、南東部から西に延びる微高地の北側、ごく緩やかに下る斜面上の立地と捉えられる。

遺物 陶磁器類は白磁・青磁が主体となる。分類可能であった白磁は椀Ⅱ類、皿Ⅵ類、椀Ⅳ類と、いずれも大宰府陶磁器区分 C 期（11 世紀後半～12 世紀前半）に属する。青磁は総点数 7 点と白磁に比べ少ない。分類可能であった例は龍泉窯系椀Ⅰ類、Ⅱ-b 類であり、大宰府陶磁器区分 E 期（13 世紀初頃～前半）に属する。これらの点より、陶磁器から想定される時期としては、11 世紀後半～12 世紀を中心としたその前後期と把握される。

陶磁器から想定される 11 世紀後半～12 世紀、都城盆地の土師器研究には栗畑光博氏の編年案（栗畑 2004）や永田藤東遺跡 S D O 3 出土土師器を分析した山下大輔氏の研究（山下 2011）などがある。栗畑氏編年案における当該期資料は「一括資料①池ノ友遺跡第 1 次調査 周溝墓」（以下、一括資料①と略記）・「一括資料②松原地区第Ⅳ遺跡 4 号土坑墓」（以下、一括資料②と略記）が該当する。山下氏は「永田藤東遺跡 S D O 3」出土資料（以下、永田藤東例と略記）について、一括資料①段階を補足する資料群として位置付けている。年代的には一括資料①が 11 世紀代の新しい段階から 12 世紀初頭、一括資料②が 12 世紀前半から中頃と考えられている。また、当該期は都城盆地における底部切離し技法の転換期とされる。基本的には一括資料①ではヘラ起し、一括資料②では糸切離しであり、永田藤東例でも糸切離しは全体の数%とされる。今回、両氏の研究成果を基に土師器は坏・小皿それぞれを、底部切離し技法・色調・形態より 3 種類に大別し、さらに底部～体部形状より数種に細別し特徴・時期を考えた。

坏・小皿共に 1a 類とした一群は、ヘラ起し、橙色の色調、レンズ状に膨らむ底部を特徴とする。総点数 20 点と非常に少ない。出土層位はⅣ層主体である。坏・小皿セットが出土した S C 3 6 は、樹根の影響で不明瞭だが、Ⅳb 層下に形成される。P 2 7・3 1 など遺構埋土に含まれる例も数例みられる。形態的な特徴となるレンズ状に膨らむ底部は、一括資料①に類似するが、口径が 12cm 前後と一括資料①の 15cm に比べ小さい。口径が同程度となる類例は、ヘラ起しが再出し、糸切り離しと併存する一括資料⑥・⑦（13 世紀後半～14 世紀前半）にみられる。

1b 類・2 類と分類したのは、褐色系の色調、坏では平坦な底部から口縁部へ向けて大きく開き、小皿ではやや開きながら立ち上がる形状となる例である。底部切離し技法は 1b 類がヘラ起し、2 類が糸切離しである。両類とも出土層位の主体はⅣ層である。出土座標を記録した例では 1b 類が

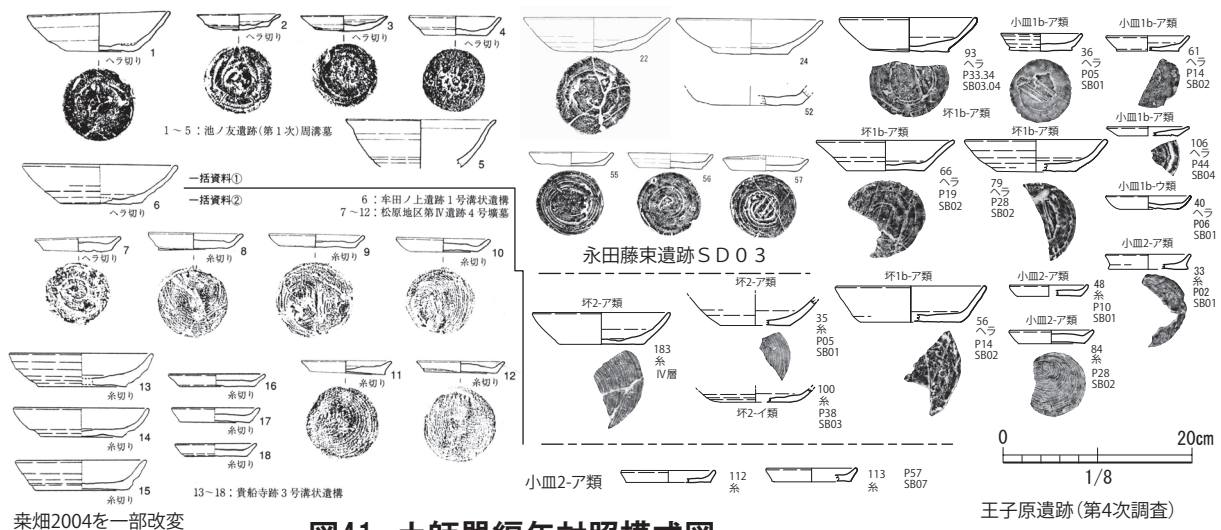


図41 土師器編年対照模式図

8～9割、2類が1～2割であり、糸切離しが一定量含まれる事が確認される。この状況は、遺構内出土例においても、ほぼ同様である。掘立柱建物柱穴出土土師器を中心に栗畑・山下両氏の研究と対照させたものが図41である。坏・小皿1b-ア類、2-ア類は口縁部に向かい大きく開く器形など、一括資料①、永田藤束例とほぼ同様と捉えられ、1b-イ・ウ類も永田藤束例にみることができる。一括資料②と対比可能な例は、2類で口径が10cm前後と大きなSB07の112.113程度であった。

これらの点より、1b類、2類の基本的な様相としては、一括資料①・永田藤束例と同様と把握される。だが、糸切離しが一定量含まれる点や、ヘラ起しだが器形的には一括資料②に近い例(56)、糸切離しだが前段階の器形に近い例(183)など、それらとは異なる点もみられる。そのため、一括資料①を主体としながらも、一括資料①から②への移行期を含めた時期の様相と考えておきたい。1a類については、明確な類例をみいだせなかったが、底部切離し技法と口径より13世紀後半～14世紀前半の一例となる可能性、SC36が1b類・2類を主体とするIV層の下に構築される点より、それ以前の11世紀代となる可能性の2種が考えられる。

また、特徴的な遺物としてはSB03:P39より出土した双口の滑石製品が上げられる。同柱穴からは硯も出土しており、筆記に関する用途も想起される。

遺構 調査区北部に掘立柱建物群と土坑群、その西側に道路状遺構群が広がり、溝状遺構群は調査区の四隅にて確認された。その時期は、土師器1a類が出土したSC36以外は、一括資料①を主体とする段階と捉えられる。遺構の重複関係には、SB01:P09→SC03→SF06、SB02:P22→SC04、SB02:P27→SF06、SB04:P75・76→SC06があり、掘立柱建物(SB01・02・04)→土坑(SC03・04・06)→道路状遺構(SF06)の順が考えられる。だが、遺物の様相はほぼ同じであり、時期差は小さく、重複していない遺構には同時期並存の例もあったと考えられる。また、埋土・遺物などよりSB01～05→07の時期差も想定される。

SB01～SB05は長軸方向が並列もしくは直交し、遺物の様相も近いため、同時期性が高いと考えられる。二面庇のSB02が面積76.7㎡(庇含)と最も大きく、その北・東にSB01・SB03～05が配置される。中世都城盆地の掘立柱建物を分析した外山隆之氏・原田垂紀子氏の研究(外山・原田2004)によると、最も普遍的なプランは「側柱のみで、3間×2間の庇の無い」建物であり、面積15～27㎡が最も多く、普遍的農民層の建物とされている。SB03・04は面積・構造より、この範疇に含まれるが、SB01・02は明らかに大きい。また「検出遺構からは一般的な集落遺跡と評価」される永田藤束遺跡⁽²⁾のSB01(総柱):17.9㎡、SB02:20.0㎡と比較しても、明らかに大きい。また、硯などの遺物も一般集落とはやや離れている。これらの点より、建物群については一般集落・階層ではなく、上位階層が存在した可能性が高いと考えられる。

小結 遺構・遺物を整理したものが表17である。11世紀末～12世紀初頭、上位階層の存在が想定される掘立柱建物群(SB01～05)が形成され、その後、土坑群、道路状遺構の形成をへて、12世紀前半～中頃にSB07が構築されたと考えられる。また、詳細を明確にはできなかったが、掘立柱建物・土坑・道路状遺構には並存例もあったと考えられる。

中世

文明軽石層(Ⅲ層・1471年)を検出指標とした畠跡・畝状遺構である。Ⅲ層は3層に分層したが、いずれも軽石一次堆積ではなく、災害復旧過程による形成層と考えられた。

調査の結果、文明軽石を最も多く含むⅢb層を境に、畝状遺構の方向が南北から東西へ変化する様相が観察されたが、その目的や方法は明確にはできなかった。また、自然科学分析ではⅣa・b層、Ⅲc層では稲作(陸稲)の存在が推定されたが、Ⅲa層では認められず、軽石をはさみ耕作種が変化した点は確認される。災害復旧の方法については、畠の基盤層と考えられるⅣ層上面に「小溝状遺構群」(高橋2000)が検出されていないため、小溝状遺構が形成される形での災害復旧ではなか

表 17 遺構分類表

時 期	土師器分類	遺 構
(11世紀以前)	1a類?	? SC36
一括資料①段階 11世紀の新しい段階 ～12世紀初頭	1b類 2類	掘立柱建物 SB01～05 土坑群 道路状遺構 溝状遺構
一括資料②段階 12世紀前半～中頃	2類(口径大)	SB07
一括資料⑥・⑦段階 13世紀後半～14世紀前半	1a類?	? SC36

った点は推測される。

まとめ

縄文時代早期は集石遺構などが確認された。周辺の梅北北原遺跡や王子原第2遺跡と合わせ、当該期の遺跡の広がりが想定される。縄文時代後晩期から弥生時代・古墳時代は遺物の確認のみであった。王子原第2遺跡でも縄文時代後晩期、弥生時代の遺物が確認されるが、少量に留まる。そのため、現状では、本調査区周辺は遺跡の中心からは少し離れた場所であった可能性が高いと考えられる。

11世紀末～12世紀初頭、上位階層の存在が想定される建物群が形成されるが、少なくとも12世紀前半には消え、土坑群、道路状遺構へと変化して行く。この時期の都城盆地は、11世紀初頭の島津荘成立から拡大(野口1997)へ至る時期とされ、栗畑光博氏は12世紀代における遺跡数の急増を指摘し、考古学データの検証より、「十二世紀中頃以降」を「開発の展開期」と位置付け(栗畑2009)ている。この歴史的背景を単純に重ねた場合、上位階層の性格としては、開発の初期段階にかかわっていた有力者像が想起される。

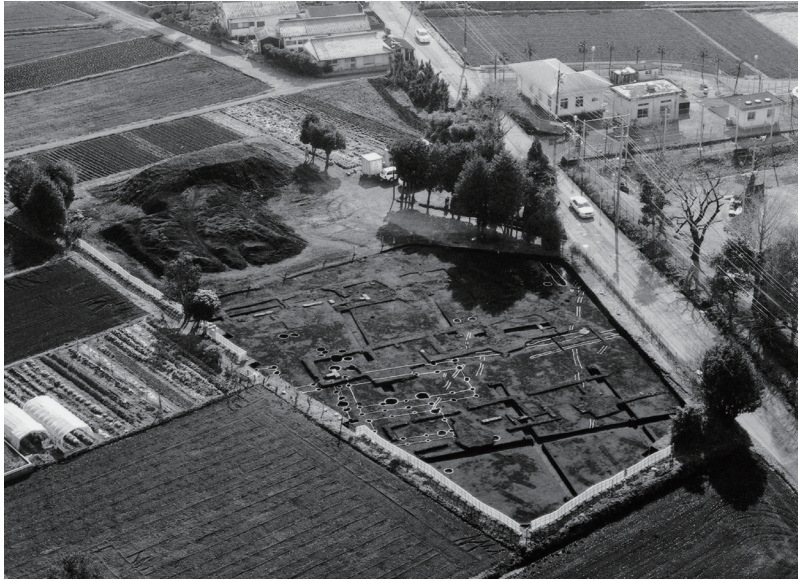
12世紀以降、自然科学分析では耕作地として稲作(陸稲)がなされていた可能性が想定され、1471年の文明軽石による災害を契機に、陸稲から別の栽培作物への変化が指摘される。それ以後は、ほぼ一貫して耕作地(畑地)として利用されていたと考えられ、昭和38年中郷村により公営住宅が建設され現代へと至る。

補遺 校了後となってしまったが、山本信夫氏(山本考古研究所)に土師器の鑑定を頂いたところ、本遺跡分類1a類は中坏もしくは小坏に分類すべき例であり、本遺跡分類1a・小皿1a類は本遺跡分類1a-A類などとセット関係にあり、大宰府XII期に属する資料である可能性が高いとの所見を頂いた。そのため、SC36についても一括資料①段階の遺構と考えられる。

- (1) 栗畑光博氏(都城市教育委員会)、山下大輔氏(都城市教育委員会)のご教示による
- (2) 遺物では青白磁水滴など希少品や鍛冶関連遺物などが出土しており、遺構と遺物の評価に格差が指摘される。

参考文献

栗畑光博 2004 「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究(1)」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
 栗畑光博 2009 「島津荘の成立をめぐる諸問題」『地方史研究』341 地方史研究協議会
 外山隆之・原田亜紀子 2004 「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』第19号 宮崎考古学会
 野口実 1997 「第4章 島津荘の成立」『都城市史 通史編 自然・原始・古代』都城市
 山下大輔 2011 「第4章 第1節 平安時代末～中世の遺物について—SD03出土遺物を中心に—」『永田藤束遺跡』
 都城市教育委員会
 都城市教育委員会 2004 「王子原第2遺跡」
 都城市教育委員会 2007 「梅北北原遺跡」
 都城市教育委員会 2011 「永田藤束遺跡」



1区全景（北東上空から）

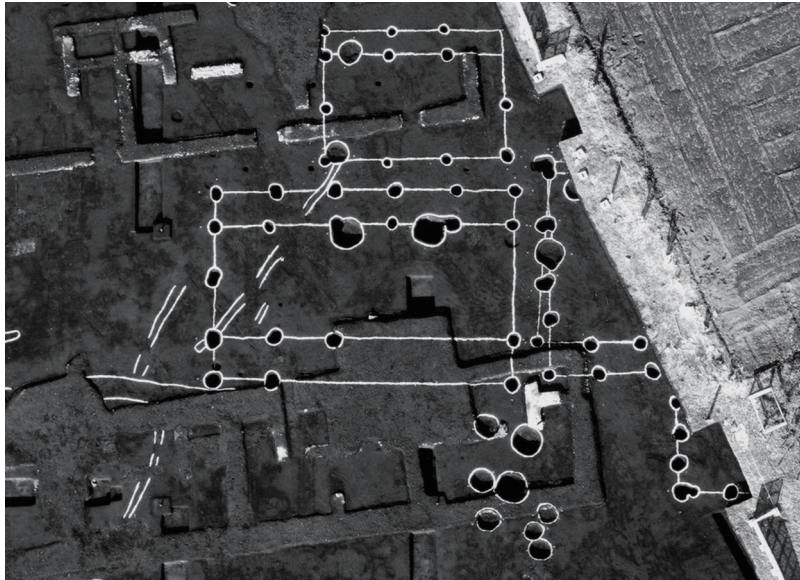


2区全景（北西から）



1区北壁土層

図版 4



堀立柱建物跡群
(SB01~05・07)

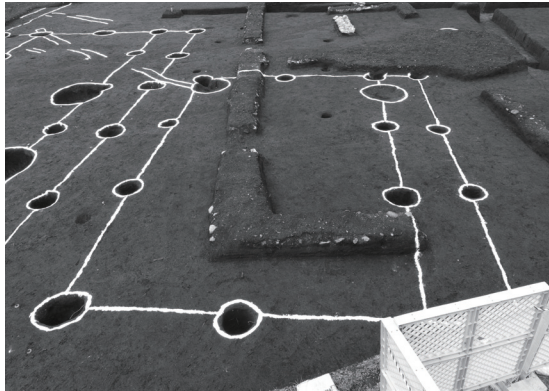


土坑群 (SC09~16)

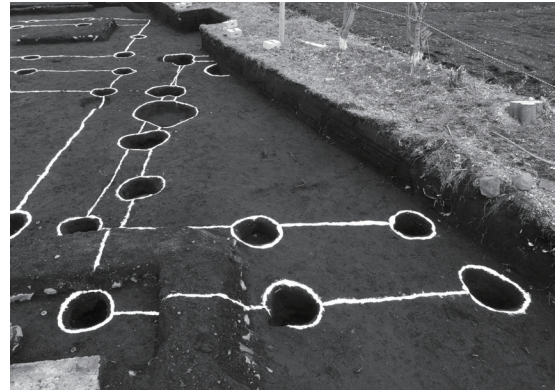


土坑墓 (SC36)
遺物出土状況

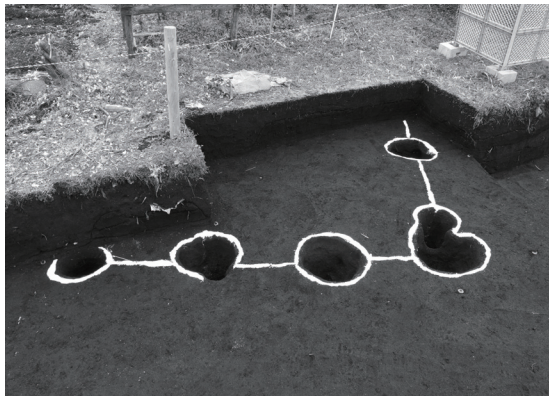
図版 5



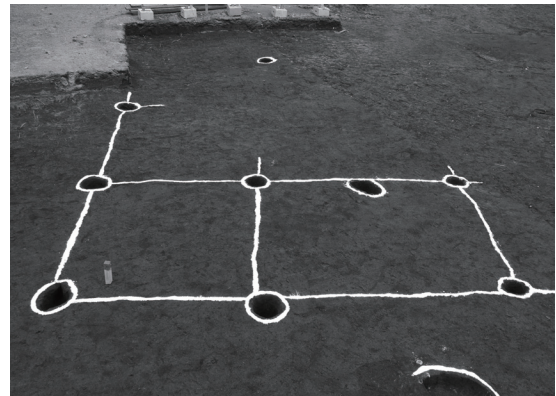
SB01 (東から)



SB03.04 (南から)



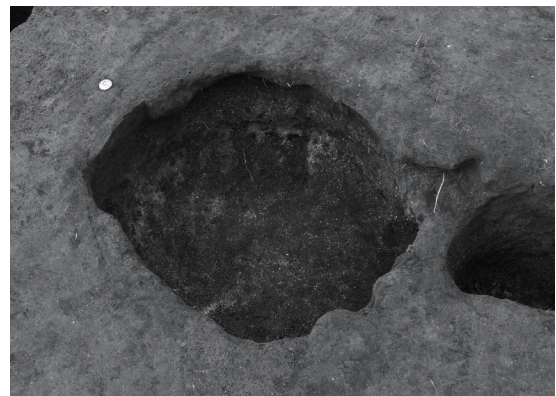
SB05 (西から)



SB06 (南から)



P39 (遺物出土状況)



SC05 (北から)



SC36.SD04 (南から)



SC36 土層

図版 6



SD02(南から)



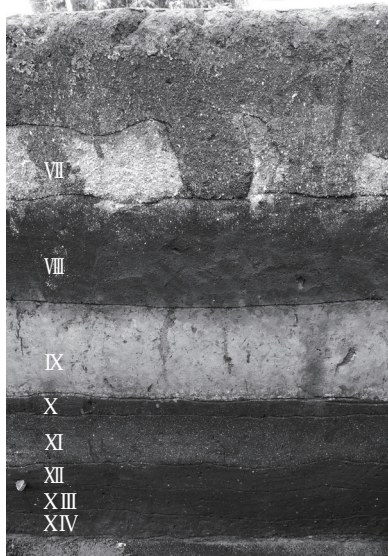
SF08.09(西から)



SF11.12(西から)



調査状況
(後方/霧島新燃岳噴煙)



2区X I ~XIV層土層



2区X I ~XIII層
遺物出土状況

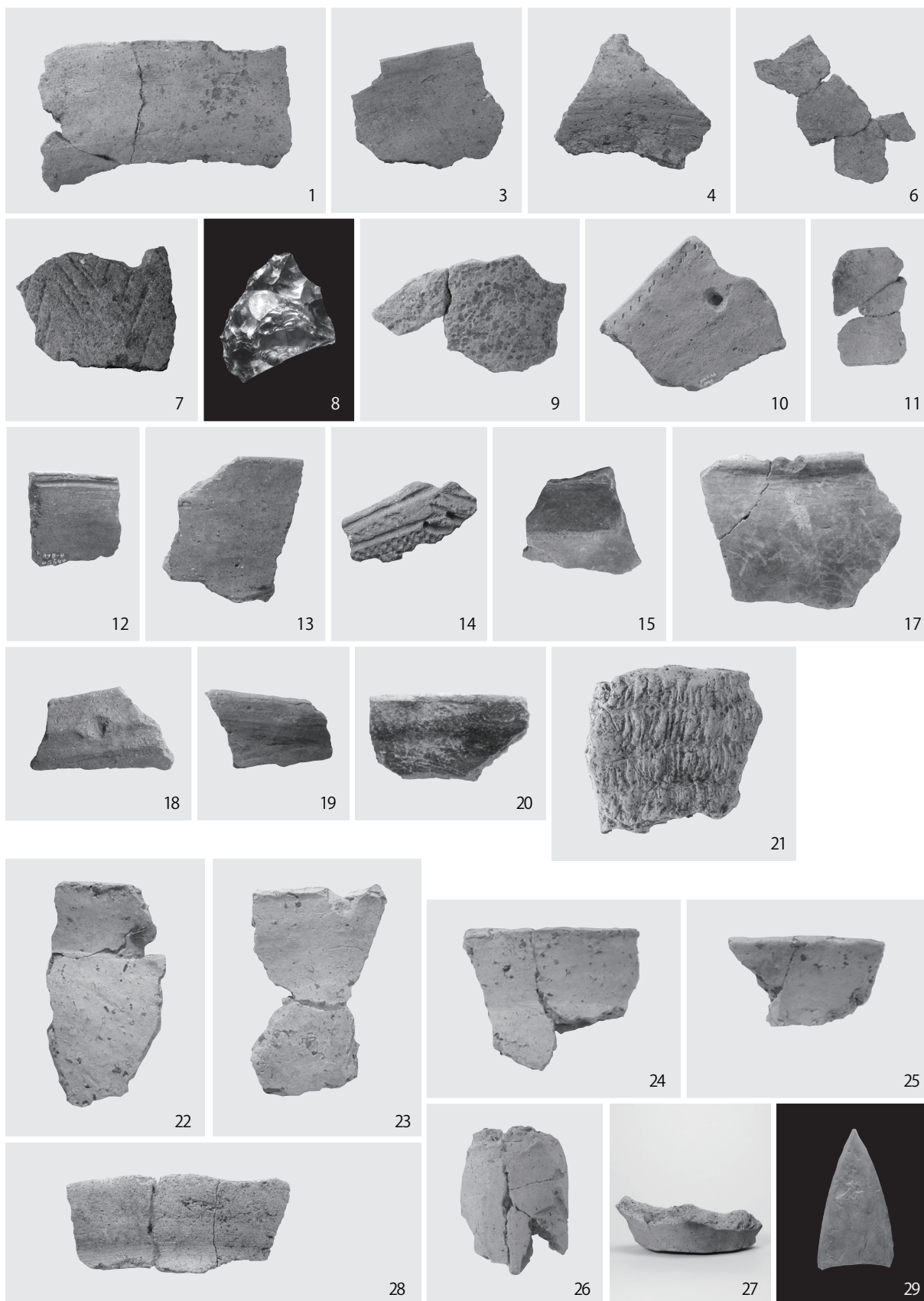


SS01(西から)

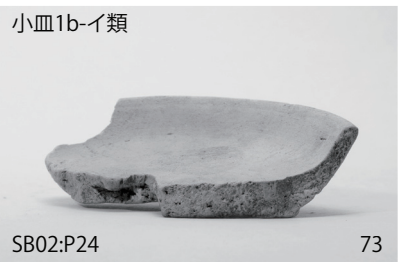
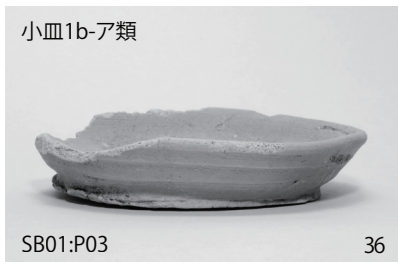
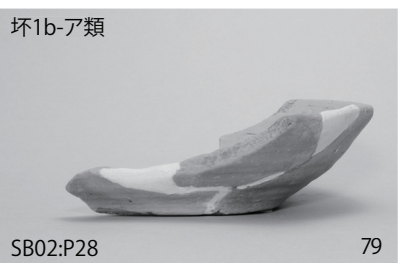
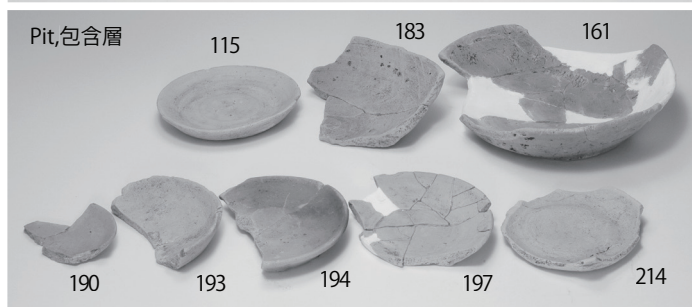
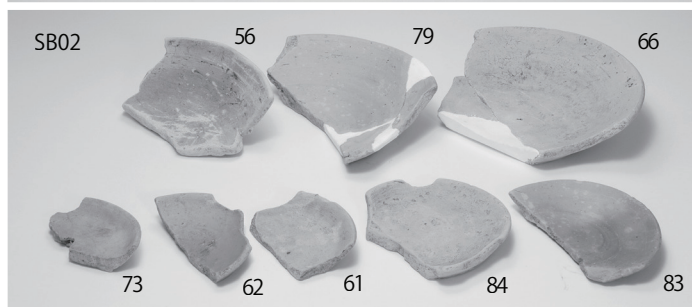
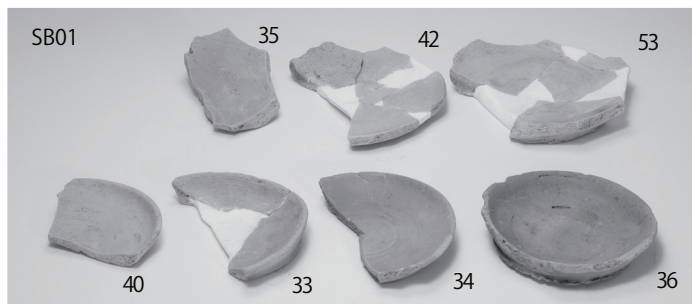


SS02(東南から)

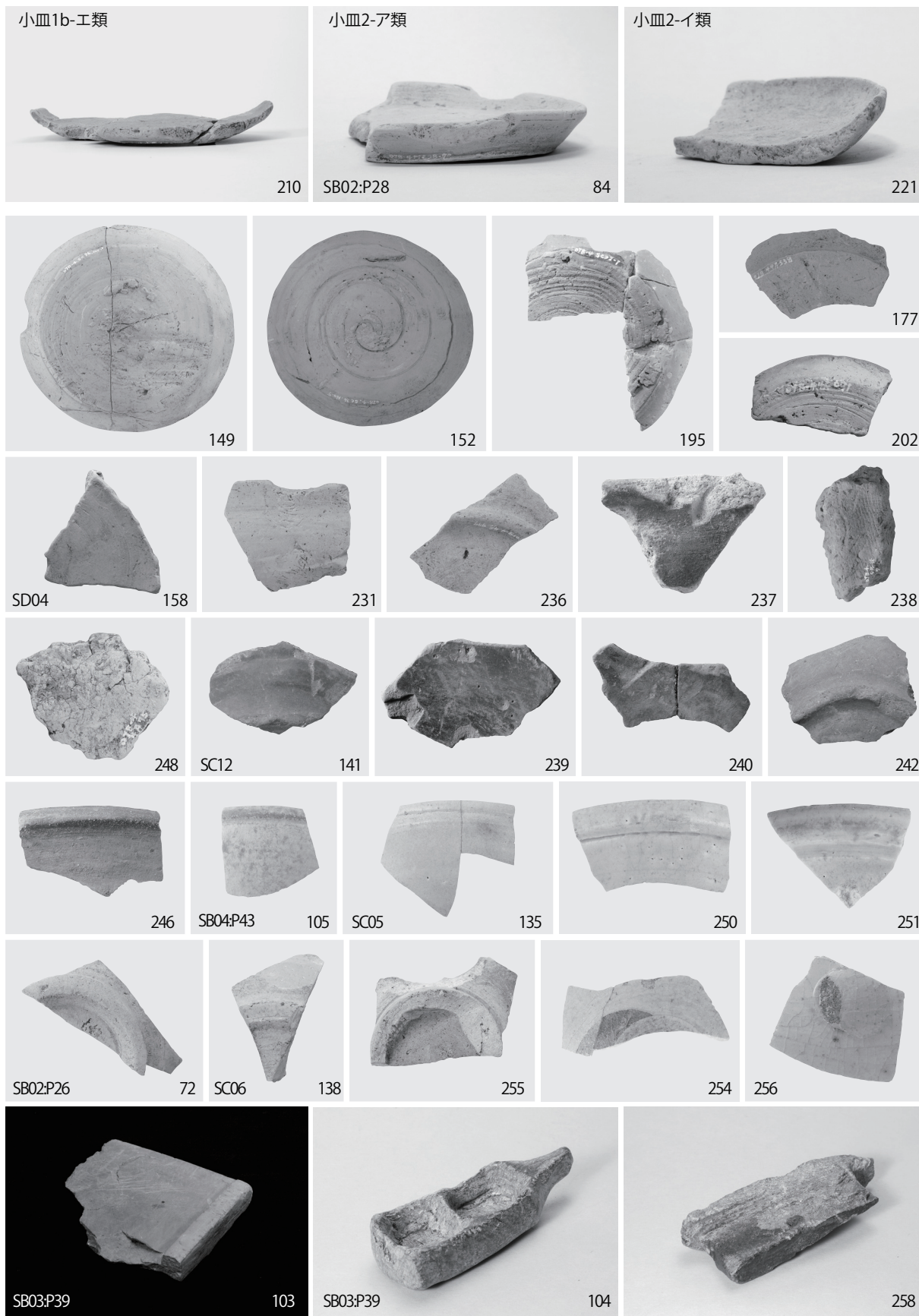
図版 7



图版8 出土遺物:1



図版9 出土遺物:2



図版10 出土遺物:3

報告書抄録

ふりがな	おうじばるいせき（だい4じちょうさ）						
書名	王子原遺跡（第4次調査）						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第106集						
編著者名	近沢恒典						
編集機関	都城市教育委員会						
所在地	宮崎県都城市菖蒲原町19-1 郵便885-0034 電話0986-23-9547						
発行年月日	2012年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積
		市町村	遺跡番号				
おうじばるいせき 王子原遺跡	みやこのじょうし 都城市 やすひさちよう 安久町	45202	M7052	31° 41' 01"	131° 04' 32"	20101014 ～ 20110330	2,860m ²
発掘原因	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		
公営住宅 建設	集落	縄文 古代 中世	縄文：集石遺構 古代～中世： 掘立柱建物跡群・土坑墓 中世：畠跡		縄文：土器 古代～中世： 土師器, 白磁, 黒色土器		
要約	<p>王子原遺跡は都城盆地の南部、南縁山地のふもとに形成された開析扇状地面に立地する。</p> <p>今回の調査では、縄文時代～中世にかけての遺構・遺物が確認された。主体となる時期は、古代末～中世初頭である。掘立柱建物群を中心とする遺構群が確認され、多量の土師器のほか、貿易陶磁器、硯、滑石製品なども出土している。</p> <p>掘立柱建物群は大型建物を中心とした配置がみられ、その範囲は東へと広がる。その時期は11世紀末～12世紀初頭と考えられ、以後、土坑群、道路状遺構群の形成を経て、耕作地へと至る。</p> <p>この時期の都城盆地は島津荘の成立から展開にいたる時期であり、12世紀中頃以降が本格的な展開期と位置付けられている。今回の調査で確認された建物群は、開発の初期段階にあって、上位階層の存在が考えられる建物群であり、当該期の都城盆地を考える上で、重要な資料となると考えられる。</p>						

都城市文化財調査報告書第106集

王子原遺跡（第4次調査）

公営住宅建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月30日 発行

編集・発行	都城市教育委員会事務局文化財課 宮崎県都城市菖蒲原町19-1 郵便番号885-0034 電話番号(0986)23-9547
印刷・製本	株式会社 みやこ印刷 宮崎県都城市大王町51-22 郵便番号885-0026 電話番号(0986)23-1682